

日本薬学会
第1回全国学生ワークショップ
「6年制一期生として薬学教育に
望むこと」

報告書

平成23年9月

六年制薬学教育がスタートして6年目となり、第一期生が最終学年となっている。一万人近い学生に対して、日本のどこにおいても均一で質の高い長期実務実習を、しかも大半が大学外の病院や薬局で、滞りなく実施できているということは日本の薬学関係者の誇りである。日本薬学会も薬学教育改革大学人会議を立ち上げ、薬剤師団体、関係省庁や機関と連携して、システム作りや人材育成を推進してきた。しかし、今までは、決められたタイムスケジュールに合わせて実施することが第一目的で、課題を掘り下げたり、ボトムアップ的な議論をする余裕がなかった。そこで、薬学教育改革大学人会議を発展的に解消するとともに、教育に関する組織を一本化するために、日本薬学会では、薬学教育委員会を常置委員会として本年度より発足させた。本ワークショップは、薬学教育委員会の主催で実施された。従来は、教育をする立場での議論が中心で、教育を受ける側の意見を聞く機会は少なかった。特に、六年制薬学教育全体を全国の学生に評価してもらう試みは初めてであろう。

8月の暑い大阪に日本全国から学生が集い、それぞれの6年間を振り返ってもらった。各大学から問題意識の高い学生が選ばれたこともあるようだが、熱心に議論してくれた。大学ごとに異なる事情に驚いたり、似たような課題に共感したり、今までの仲間とは違った視点の議論に正に目から鱗が落ちる経験をしたりと、大いに刺激になったようである。連帯意識も高まり、今後も「同期会」を継続していきそうな勢いである。彼らの報告書や感想にはそうした経緯が実に生き活きと述べられている。多くの薬学関係者が本報告書を読まれることを切に望む。

3月に日本を襲った未曾有の大震災およびその後の原子力発電所の事故により、人々の絆の大切さとリーダーシップの重要性、科学と科学者の大きな責任を改めて認識させられた。六年制薬学教育を受けた一期生の意識は高く、全カリキュラムを修めた学生は、Pharmacist-Scientistとして活躍することが期待されている。まさに、Pharm. D. と呼ばれることに相応しい人材である。来年の四月に彼らが社会に出たときに、システムに埋没させられてしまうことなく、逆風を浴びても負けないように支えていくことが、我々の責務であるとあらためて感じさせられた。そうした意味で、薬学教育委員会が取り組んでいる生涯研鑽(受動的ではなく能動的な学習という意味で“研鑽”を用いている)は、サポートの一助になるであろう。

平成23年9月

松木 則夫 公益社団法人 日本薬学会 薬学教育委員会 委員長

目 次

ページ

| | |
|---------------------------------------|-----|
| 第1回全国学生ワークショップの開催概要 | 1 |
| 第1回全国学生ワークショップのまとめ | 2 |
| 第1回全国学生ワークショップのプログラム | 8 |
| 第1回全国学生ワークショップの参加者および班分け | 9 |
| 「ワークショップ開催の経緯」説明原稿 | 11 |
| セッション報告 | 15 |
| 第一部「6年制薬学教育を通して成長したこと」 | 16 |
| 作業説明 | 17 |
| グループ報告 | 20 |
| 第二部「6年制薬学教育を通して、もっと伸ばしたかったこと、やり残したこと」 | 47 |
| 作業説明 | 48 |
| グループ報告 | 49 |
| 第三部「今後の6年制薬学教育に望むこと、生涯学習に望むこと」 | 78 |
| 作業説明 | 79 |
| グループ報告 | 82 |
| 参加者印象記 | 111 |
| 参加者アンケート結果 | 141 |
| 日本薬学会第1回全国学生ワークショップ実行委員会 | 154 |

日本薬学会第1回全国学生ワークショップの開催概要

公益社団法人日本薬学会は平成23年度より教育に関する組織を一元化し、薬学教育のあり方についてボトムアップの議論を行う場として“薬学教育委員会”を設置した。薬学教育委員会の新事業の一つに、「薬学教育者のためのアドバンスワークショップ」の企画・開催がある。日本薬学会はこれまで大学教員や研究者に対して研究と教育について研鑽の場を提供してきた。カリキュラムプランニングに関するワークショップ「薬学教育者のためのワークショップ」は平成11年度に始まり、「認定実務実習指導薬剤師養成ワークショップ」も含めると、全国の大学教員のほとんどは同内容のワークショップへの参加経験を有する。そこで、薬学教育に携わる大学教員や薬剤師のさらなる研鑽について、その内容や実施体制を薬学教育委員会で検討することとした。委員会内に作業班が設置され、平成23年度内に新たな内容の「薬学教育者のためのアドバンスワークショップ」を開催する準備を進めている。

この作業班において「薬学教育者のためのアドバンスワークショップ」の目的・内容などについて議論するなかで、学習の主体者である学生のニーズを取り入れる必要性が指摘された。平成23年度は6年制薬学教育課程が完成年度を迎え、一期生は最終学年である6年次まで進級している。そこで、最終学年を迎えた6年制一期生から薬学教育に対するフィードバックを受ける目的で、全国の薬系大学・薬学部の6年次学生を参加者として、6年制薬学教育の成果と課題について論議するワークショップを開催することとした。

全国の6年制薬学生が集うワークショップは、「薬学教育協議会フォーラム2011（平成23年2月）」で初めて開催された。このときのテーマは「実務実習を通して印象に残っていること」であり、実務実習を終えた5年次の薬学生（一期生）が全国から90名集まり、初年度実務実習の成果と課題について議論を行った。午後だけの限られた時間であったが非常に有意義な議論が行われ、学生ワークショップの有用性と必要性が明らかとなった。なお、この学生ワークショップ報告書は薬学教育協議会のホームページで公開されている（http://www.yaku-kyou.org/About_council/issue/pdf/2011STWS.pdf）。2月のワークショップのテーマは「実務実習」であったが、本ワークショップでは「6年制薬学教育」全体に議論の対象を広げた。

平成18年度に6年制薬学教育課程を設置した大学に6年次学生の派遣を依頼したところ、62大学62名の学生が参加した。全体を31名ずつの2チームに分け、各チームはさらに1グループ7～8人ずつの4グループに分かれて小グループ討議を行った。ワークショップのテーマは「6年制一期生として薬学教育に望むこと」とし、三部構成で進行した。第一部は「6年制薬学教育を通して成長したこと」、第二部は「6年制薬学教育を通して、もっと伸ばしたかったこと、やり残したこと」について、KJ法に従って文殊カード（三連の切り離し可能なカード）と模造紙を用いて抽出・整理を行った。第三部では、「6年制卒の一期生として取り組んでいきたいこと」と「今後の6年制薬学教育に望むこと、生涯学習に望むこと」について、グループとしての意見をまとめることとした。

第一部と第二部のプロダクトはチームごとの発表会を通じて学生間で共有し、第三部のプロダクトは全参加者を対象とした発表会で紹介された。8グループがプロダクト紹介を行い、すべてのグループの発表に対して他のグループの学生から質問や意見が出され、非常に活発な議論が行われた。各グループには第一部～第三部のプロダクトを議論の経緯と共に報告書としてまとめることを依頼した。また、第三部において全体発表と総合討論に十分な時間をとることができなかつたので、第三部の全体発表と総合

討論までを終えた参加者の意見、感想、メッセージなどを“印象記”として募集した。併せて、ワークショップに関するアンケート調査への協力依頼も行った。

各班から提出された報告書原稿については、グループ間で書式や写真の掲載について、一部編集・加工を行ったが、本文について加筆・変更などは行っていない。報告書原稿のあとには、参加者からの印象記とアンケート結果を掲載した。印象記およびアンケートの自由記述には、本ワークショップに参加した学生の意見、感想、メッセージが記されているので、報告書と併せて是非お読み頂きたい。

本ワークショップ実行委員会では、各グループからの報告書の内容に基づいて「まとめ」を作成した。この「まとめ」は、今後の6年制薬学教育の改善に役立てるため、日本薬学会を通じて積極的に発信していく予定である。

以下に日本薬学会第1回全国学生ワークショップの「まとめ」と各班からの「報告書」を掲載する。

【日本薬学会第1回全国学生ワークショップのまとめ】

日本薬学会第1回全国学生ワークショップ実行委員会（以下、本実行委員会）では、学生による小グループ討議のプロダクトのまとめ方について協議した。その結果、各班から提出された報告書の内容は非常によくまとまっており、本実行委員会でさらに加工するよりも、学生からのメッセージをそのまま伝える方が重要であるということで意見が一致した。そこで、各班のタスクフォースが中心となって、テーマごとに各班の特徴となるメッセージを抜粋し、以下に紹介することとした。メッセージから各班の学生達の考え・意見・要望などをくみ取っていただき、詳細については各班の報告書を熟読していただきたい。

また本実行委員会では、学生からの貴重な意見・提案を薬学教育関係者に広く伝える方法についても検討し、以下にまとめた。提案した方法を参考に、学生からのメッセージを関係者間で広く共有し、今後の薬学教育の改善・向上に積極的に活用して頂きたい。

I. 学生達からのメッセージの抜粋

1. 「6年制薬学教育を通して成長したこと」

- ・ ひとりで生きていけるすべを学べた。
- ・ パーソナリティの洗練
- ・ 薬学生に求められる人間力が身についた。
- ・ 命に対する倫理観、使命感を学べた。
- ・ ディスカッション能力が身についた。
- ・ コミュニケーションを通じた社会適応性の向上
- ・ 人のつながりの大切さを知った。
- ・ 相手の気持ちを感じ取る。
- ・ チームの中でどう動くか。
- ・ チームをどう動かすか。
- ・ 他の医療人との接し方
- ・ 探究心が向上した。
- ・ 視野が広がった。
- ・ 自己啓発するようになった。
- ・ 目的を持って行動するようになった。
- ・ 薬学的基础知識の習得
- ・ 薬の専門家になるための知識
- ・ 将来の仕事に対する実感ができた。
- ・ 薬剤師の仕事や役割について分かった。
- ・ 医療人としての意識、将来像の構築
- ・ 体験を通じた薬剤師の社会的立場の認識
- ・ 理想の薬剤師像が描けた。

2. 「6年制薬学教育を通して、もっと伸ばしたかったこと、やり残したこと」

- ・ 教養、幅広い知識を身につけておけばよかった。
- ・ 自分で行動するきっかけを持ちたかった。
- ・ 視野を広げたかった。
- ・ 研究ももっと積極的にしたかった。
- ・ 問題解決能力を高めたかった。
- ・ 医療にもっと関わりたいかった。
- ・ 長期実務実習の制度が整備されていなかった。
- ・ 英語力をもっとつけたかった。
- ・ 他大学、他学部と交流を広げたかった。
- ・ 「薬学部、やるな」と言われるようになりたかった。
- ・ 生活を充実させたかった：部活・サークル、ボランティア、アルバイト、旅行、遊び
- ・ 人間性の成長、人間力を高めるもの
- ・ 自己研鑽したかった。
- ・ もっと勉強したかった。
- ・ 臨床研究、学会参加
- ・ **Medical Specialist** として足りないもの
- ・ 他職種ともっと関わりたいかった。
- ・ 現場で通用する実力
- ・ 国際交流

3. 「6年制卒の一期生として取り組んでいきたいこと」

【残りの学生生活において】

- ・ ボランティア活動に参加→参加しやすい環境にしていきたい。
- ・ 後輩との交流会を実施する（他大学も含めて）。
- ・ 人脈を広げ、どこにいても情報交換できるルートをつくる。

【医療現場において】

- ・ 患者から信頼される薬剤師
 - 薬育できる薬剤師、ベッドサイドへ足を運ぶ薬剤師、メンタルケアができる薬剤師
 - Do 処方の特権を持つ薬剤師、介護ができる薬剤師
 - 学んだ倫理観を生かして患者さんと関わる。
- ・ スペシャリストである前にジェネラリストに
 - ・ 薬剤師としての専門性を高める。
- ・ ジェネラリスト→スペシャリスト→教育者・指導者へ
- ・ 薬剤師の仕事、必要性を明確にする。
- ・ 薬剤師の職能を周りに積極的にアピールしていく。
- ・ 「薬剤師だからこそできる業務」に重点をおき、常に問題意識を持ちながら取り組む。
- ・ 仕事に責任を持ちたい。
- ・ 「極（究）める」ことを極めたい。そして、薬剤師の仕事の幅を広げたい。
- ・ 薬剤師の職域を拓げる：検査オーダー、バイタル測定、採血、静注
 - 学校薬剤師（小・中学校への働きかけ）
- ・ 薬局での簡易検査を実施できるようにする（かかりつけ薬局をつくる）。
- ・ 臨床での問題点を見つけ、解決していこうとする薬剤師になる。
- ・ チーム医療に参加し、貢献できる薬剤師
- ・ 医師に対し処方提案、情報提供ができる薬剤師

- ・ 薬物治療以外にも医療人としての役割を果たせる薬剤師
- ・ 多職種と関わることができる環境
- ・ 新しい情報を幅広く、積極的に収集する（論文、学会など）。
- ・ 研究ができる、論文が書ける薬剤師
- ・ 薬剤師の活動を報告する（積極的に学会などで発表する）。

【社会において】

- ・ 6年制になった意味を理解し、分かってもらえるよう行動する。
- ・ 薬剤師の社会的立場をよりよく変えていく→薬剤師の地位向上
- ・ 実務実習に関するフィードバックを行う。
- ・ 企業や薬剤師、学生、教員を含め全体で交流会を実施する。
- ・ 6年制一期生として団体を作り、他大学や学年・学部を越えて交流を深める。
- ・ 臨床で学んだ知識、技術を企業での研究、開発に活かしていく。
- ・ 自己研鑽

【大学と後輩に対して】

- ・ 手本となる姿を示したい。
- ・ 自分たちの成長は後輩に還元していきたい。
- ・ 指導薬剤師になって、学生のニーズに合った実務実習をしていきたい。

4. 「今後の6年制薬学教育に望むこと、生涯学習に望むこと」

【教育に関して】

- ・ 6年制になった意味をもっと明確化すべき
- ・ 4年制と6年制の相違点を明確にしてほしい。
- ・ 社会のニーズを知りたい（今後の薬剤師に何が求められているのか）。
- ・ 薬学生全体のレベルアップ→薬学生全体のモチベーションのアップにつなげる。
- ・ 臨床に結びつく教育の強化
- ・ 病態についてもっと知識を高めたい。
- ・ 早期体験学習を充実化してほしい（参加型実習、臨床現場の生の声を聞ける機会）。
- ・ 専門知識以外に英語や経営学を学びたい。
- ・ 医療経済、薬剤経済を学びたい。
- ・ 海外研修の機会を増やす。
- ・ 多職種との合同実習（体験学習）の実施
- ・ 参加型の授業やディスカッションする機会を増やす。
- ・ 国家試験勉強以外の教育制度の充実
- ・ 一期生として感じたこと、考えたことを伝える機会がほしい。
- ・ 大学間での情報交換

【実習に関して】

- ・ 我々が将来何になりたいかを踏まえた上で支援して欲しい。
- ・ 個人の進路を考慮した実習先の選択を可能に
- ・ 実習受け入れ先の決め方の改善
- ・ 病院や薬局を選びたい。
- ・ 数ヶ所回りたい。
- ・ 実習内容の均一化
- ・ 施設機関でできる実習内容の提示
- ・ 実習期間の見直し
- ・ 到達レベルに応じたアドバンストの実習
- ・ CBT、OSCEの問題レベルの向上→仮ライセンスの取得
- ・ 実習の中で、他職種や他学部との関わりを持ちたい。
- ・ 実習中、実習後のフォロー
- ・ 指導薬剤師へ：指導に専念してほしい、実習生の部屋を作ってほしい、邪魔扱いしないでほしい、柔軟に対応してほしい、臨床現場でしか見られないものを見学したい（手術、検査、透析など）。
- ・ 実習内容に対する教員の把握と理解
- ・ 実習の日報や週報のフォーマットを大学間で統一してほしい。
- ・ 大学教員と指導薬剤師も情報交換や学ぶ機会を→教育者の質と意識の向上を
- ・ 実習費を統一してほしい。

【研究に関して】

- ・ 研究をもっと重視するべき
- ・ 研究に対するカリキュラムの制定
- ・ 博士課程の充実（卒後の環境整備）

【進路に関して】

- ・ 広く選択肢を持たせてほしい。
- ・ 企業側も実習先・大学側も、実習生の就職活動について理解、支援してほしい。

【制度に関して】

- ・ 薬-薬-薬連携の推進により生涯学習しやすい環境の形成
- ・ 処方箋に病名を記載する（制度化する）。
- ・ 病院における診療報酬の点数の付け方を改善してほしい。
- ・ 各関連団体や学会による専門薬剤師に関する認定制度が多数存在し、わかりにくい。可能な限り統一化してほしい。
- ・ 認定薬剤師のメリットを増やしてほしい。
- ・ 薬局薬剤師に認定制度を導入してほしい。

【ワークショップに関して】

- ・ 今後も全国学生ワークショップを開催してほしい。
- ・ 意見交換できる機会を増やし、大学だけでなく、学部や学年を越えたワークショップの開催を切に望む。
- ・ 他職種も含めたワークショップのような参加型の勉強会を生涯学習に取り入れてほしい。
 - 職種間や施設間で情報交換

【後輩に対して】

- ・ 早いうちからモチベーションを高く持つべし。
- ・ 勉強する意味を理解してほしい。
- ・ 英語を学習しておくべし。
- ・ 先輩の話を聞け。
- ・ 他学部や他大学の学生と交流できる場へどんどん足を運ぶべし。
- ・ 時間を有効に使うべし。
- ・ 早目の就職活動を
- ・ 遊べ!!!

II. 学生達からのフィードバックを活かすために

ある班の報告書に、以下のようなメッセージがある：「6年制薬学教育の目的や、また薬学部が6年制になった事実さえもまだ社会にはほとんど知られていない。『薬剤師の地位向上』のためにも、まずは6年制薬学教育について社会に知ってもらう必要があると考える。そのためにも心構えとして、自分たちが“一生一期生”であるとの自覚をしっかりと持ち、6年制薬学教育がどう医療に貢献するか、態度で示していくことが必要であると考えた。」

本実行委員会は、“一生一期生”として社会に巣立つ6年制課程修了生達を支援するために以下のことを提案する。

【“一生一期生”への支援】

- ・ 6年制課程を修了する“一生一期生”の生涯研鑽やメッセージの発信を支援する。
- ・ 社会で一定の経験を積んだ後、一期生として集い、語り合い、情報を発信する機会を提供する。
- ・ “一生一期生”として活躍できる環境の整備に努める。
- ・ 社会に向けて“一生一期生”を始め、6年制課程修了生に関する情報を発信する。

【大学・関連団体への伝達】

- ・ 「日本薬学会第1回全国学生ワークショップ報告書」を冊子体として全国薬科大学・薬学部、日本薬剤師会、日本病院薬剤師会、薬学教育協議会ほか関連団体等に配布する。
- ・ 「日本薬学会第1回全国学生ワークショップ報告書」を日本薬学会ホームページで公開し、PDFファイルとしてダウンロードできるようにする。

- ・ 日本薬学会の会誌「ファルマシア」において本ワークショップに関する記事を掲載する。
- ・ 日本薬剤師会、日本病院薬剤師会、薬学教育協議会などにホームページへのリンクを依頼する。
また、都道府県単位の薬剤師会・病院薬剤師会などのホームページへのリンクも併せて依頼する。
- ・ 本実行委員会のメンバーが中心となって、平成 23 年度に開催される学会・フォーラム等で学生のメッセージを紹介する。

【学生・大学教員への伝達】

- ・ 「日本薬学会第 1 回学生ワークショップ報告書」を学生と教員に配布することを、全国の薬科大学長・学部長に依頼する。
- ・ 平成 23 年 8 月 26 日に開催された文部科学省主催「薬学教育指導者のためのワークショップ」において、各グループからの報告書を編集したものを各大学からの参加者に配布した。
- ・ 大学において本ワークショップ参加者が中心となって、後輩にメッセージを伝える機会を設ける。

【指導薬剤師への伝達】

- ・ 全国の薬科大学・薬学部において、平成 23 年度の実務実習受入施設を対象とした説明会や訪問などの機会を利用して、「日本薬学会第 1 回学生ワークショップ報告書」の冊子体を指導薬剤師に配布することを提案する。

【今後の取組】

- ・ 本ワークショップにおけるプロダクトを大学教員にフィードバックするため、本年 12 月に「薬学教育者のためのアドバンストワークショップ」を開催し、全国の薬科大学・薬学部で教員の参加を依頼する。
- ・ 本ワークショップにおけるプロダクトが薬学教育の改善・充実に反映されたかを検証していくため、「全国学生ワークショップ」の定期的な開催について検討する。
- ・ 学生の参加できる薬学教育に関するイベントが積極的に開催されるよう提案していく。

日本薬学会第1回全国学生ワークショップ
「6年制一期生として薬学教育に望むこと」

主 催 : 公益社団法人 日本薬学会

開催日時 : 平成23年8月4日(木) 午前9時15分～午後5時

開催場所 : 大阪大学中之島センター (〒530-0005 大阪市北区中之島4-3-53 TEL 06-6444-2100)

参加者 : 62名(62大学)

グループ : 2P8S (1グループ7～8名)

プログラム

(2P: 全体会議、P: チーム討議、S: 小グループ討議)

8:45 受付

9:13 2P 配布資料の確認

9:15 2P 開会のあいさつ 松木則夫(ディレクター、日本薬学会薬学教育委員長、前会頭)

9:20 2P ワークショップ開催の経緯

第一部「6年制薬学教育を通して成長したこと」

9:30 2P 作業説明 自己紹介、KJ法

会場移動

9:50 S 自己紹介

10:00 S SGD(模造紙)

11:00 P 発表(3分×4班)、総合討論(10分)

第二部「6年制薬学教育を通して、もっと伸ばしたかったこと、やり残したこと」

11:25 P 作業説明 KJ法

11:35 S SGD(模造紙)分

12:45 S 昼食

13:30 P 発表(4分×4班)・総合討論10分

第三部「今後の6年制薬学教育に望むこと、生涯学習に望むこと」

14:00 P 作業説明

14:10 S SGD

15:20 休憩・2Pへ移動

15:30 2P 発表(発表5分、質疑3分×8班)、総合討論15分

16:50 2P 閉会のあいさつ

伊東陽子(文部科学省 高等教育局医学教育課 薬学教育専門官)

赤池昭紀(日本薬学会 副会頭)

松木則夫

17:00 2P 連絡事項の伝達、解散

ワークショップ参加者および班分け

I チーム

| A班 | |
|----------|--------|
| 北海道大学 | 橋田 真裕 |
| 東京薬科大学 | 戸原 侑希子 |
| 北陸大学 | 長井 宏文 |
| 京都大学 | 松村 敦子 |
| 福山大学 | 中村 健志 |
| 徳島文理大学 | 岩本 夢子 |
| 九州保健福祉大学 | 吉田 啓太郎 |
| 千葉科学大学 | 米田 尚子 |

タスクフォース: 平田 収正、徳山 尚吾

II チーム

| A班 | |
|---------|---------|
| 北海道薬科大学 | 須藤 迪依 |
| 東京大学 | 山口 奈美子 |
| 名城大学 | 服部 友哉 |
| 岡山大学 | 白石 奈緒子 |
| 福岡大学 | 森川 花絵 |
| 城西国際大学 | 中嶋 智治 |
| 同志社女子大学 | 角陸 舞 |
| 松山大学 | 佐々木 将太郎 |

タスクフォース: 大野 尚仁

ディレクター

| | |
|-------|-------|
| 日本薬学会 | 松木 則夫 |
|-------|-------|

タスクフォース

| | |
|--------|--------|
| 京都大学 | 赤池 昭紀 |
| 千葉大学 | 石井 伊都子 |
| 熊本大学 | 入江 徹美 |
| 東京薬科大学 | 大野 尚仁 |
| 静岡県立大学 | 賀川 義之 |
| 昭和大学 | 木内 祐二 |
| 摂南大学 | 河野 武幸 |
| 神戸学院大学 | 徳山 尚吾 |
| 昭和大学 | 中村 明弘 |
| 京都薬科大学 | 橋詰 勉 |
| 大阪大学 | 平田 収正 |

B班

| | |
|--------|--------|
| 新潟薬科大学 | 金照 智弓城 |
| 帝京大学 | 粗 恭子 |
| 岐阜薬科大学 | 浦田 聖 |
| 近畿大学 | 坂東 麻衣子 |
| 広島大学 | 三牧 沙織 |
| 熊本大学 | 川幡 見奈子 |
| 日本薬科大学 | 渡邊 なお子 |
| 広島国際大学 | 北川 俊一 |

タスクフォース: 賀川 義之

B班

| | |
|-------------|--------|
| 東北大学 | 瀬川 良佑 |
| 昭和大学 | 宮本 千賀子 |
| 昭和薬科大学 | 彦坂 一成 |
| 東邦大学 | 倉持 智美 |
| 神戸薬科大学 | 小山 理那 |
| 九州大学 | 山下 みづ穂 |
| 徳島文理大学香川薬学部 | 野口 知里 |
| 愛知学院大学 | 徐 勇 |

タスクフォース: 入江 徹美

行政

| | |
|-------|-------|
| 文部科学省 | 伊東 陽子 |
|-------|-------|

C班

| | |
|----------|--------|
| 東北薬科大学 | 佐々木 美織 |
| 東京理科大学 | 城山 亮輔 |
| 千葉大学 | 阿部 梢 |
| 金沢大学 | 宮坂 知幸 |
| 摂南大学 | 谷口 香織 |
| 第一薬科大学 | 小倉 良太 |
| 就実大学 | 坂本 愛 |
| 高崎健康福祉大学 | 矢部 晴香 |

タスクフォース: 木内 祐二、橋詰 勉

C班

| | |
|--------|--------|
| 明治薬科大学 | 青木 里美 |
| 北里大学 | 小川 隆弘 |
| 静岡県立大学 | 安藤 奈津子 |
| 京都薬科大学 | 林田 佳愛 |
| 神戸学院大学 | 山本 将太 |
| 徳島大学 | 水谷 翔 |
| 帝京平成大学 | 島田 紘明 |
| 長崎国際大学 | 大嶺 彩 |

タスクフォース: 石井 伊都子

事務局

| | |
|-------|--------|
| 日本薬学会 | 土肥 三央子 |
| 大阪大学 | 金田 洋和 |

D班

| | |
|----------|--------|
| 慶應義塾大学 | 嶋田 光希 |
| 城西大学 | 間 祐太郎 |
| 富山大学 | 高屋 郁江 |
| 大阪薬科大学 | 田中 理恵 |
| 長崎大学 | 小森 宏太郎 |
| 国際医療福祉大学 | 藤野 麻美 |
| 金城学院大学 | 金子 窓香 |

タスクフォース: 中村 明弘

D班

| | |
|---------|--------|
| 北海道医療大学 | 原嶋 久恵 |
| 星薬科大学 | 高橋 明日香 |
| 日本大学 | 曲山 佳代子 |
| 名古屋市立大学 | 堀場 さゆり |
| 大阪大学 | 早田 祐也 |
| 崇城大学 | 飯盛 宏二郎 |
| 横浜薬科大学 | 横山 正人 |

タスクフォース: 河野 武幸

I チーム全体担当: 徳山 尚吾

II チーム全体担当: 赤池 昭紀



「ワークショップ開催の経緯」

説明原稿

**日本薬学会
第1回全国学生ワークショップ**

ワークショップ開催の経緯

実行委員長 中村明弘

**2011年8月4日(木)
大阪大学中之島センター**

公益社団法人日本薬学会 The Pharmaceutical Society of Japan

薬学部6年制

2010年8月16日 読売新聞

薬学部6年制を答申

中教審 薬剤師養成へ薬科分離

「六年制移行による臨床重視の薬学部教育が、薬剤師に医療人としての口懸けを植え付けることを期待したい。」

「2010年8月16日 読売新聞」

中央教育審議会「薬学教育の改善・充実(答申)」

- 医療技術や医薬品の創製・適用における科学技術の進歩、医薬分業の進展など、薬学をめぐる状況が大きく変化してきている中、**薬剤師を目指す学生には、基礎的な知識・技術はもとより、豊かな人間性、高い倫理観、医療人としての教養、課題発見能力・問題解決能力、現場で通用する実践力などを身につけることが求められていること、**

中央教育審議会「薬学教育の改善・充実(答申)」

- このため、各大学において**教養教育を充実**しつつ、**モデル・コアカリキュラムに基づく教育を進めるとともに、特に臨床の現場において相当期間の**実務実習**を行うなど、**実学としての医療薬学**を十分に学ばせる必要があること、**
- 各大学が**モデル・コアカリキュラム**に基づく教育に加えて、**それぞれの個性・特色に応じたカリキュラム**を編成することが必要であること、
- こうした様々な要請に応えるには、**薬学教育の現状の修業年限(4年間)は薬剤師養成には十分な期間とは言えず、今後は、6年間の教育が必要であること、**が提言されている。

さて、
**皆さんは充実した学生生活を
送ることができましたか？**

**6年制薬学教育に
満足していますか？**

6年制薬学教育プログラム

薬学教育モデル・コアカリキュラム

実務実習モデル・コアカリキュラム

6年制一期生として



平成21年度
初めての薬学共用試験
CBT, OSCE

平成22年度:
初めての長期実務実習

薬学教育協議会フォーラム2011 「初年度実務実習の成果と課題」 ～学生からのフィードバック～ 2011年2月12日(土)

全国薬学生合同ワークショップ



テーマ 「実務実習を通して印象に残っていること」

- ・これから6年制卒の薬剤師になって取り組んでいきたいこと
- ・実務実習について、学生、大学教員、指導薬剤師等に伝えたいこと



実務実習の振り返り

↓

6年制薬学教育の振り返り

学生生活も残り8ヶ月

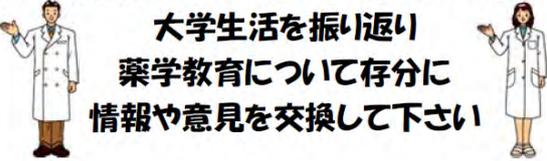


平成24年3月
初めての新・薬剤師国家試験

平成22～23年度
初めての就職活動

本日のテーマ 6年制一期生として 薬学教育に望むこと

今日は6年制一期生の仲間と共に
大学生生活を振り返り
薬学教育について存分に
情報や意見を交換して下さい



プログラムの概要

9:30 第一部

11:25 第二部

14:00 第三部

15:30 発表



では

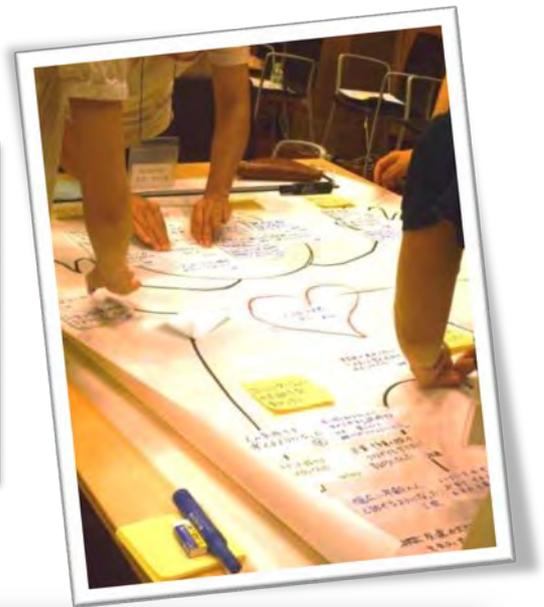
第一部の開幕です



セッション報告

第一部

「6年制薬学教育を通して成長したこと」



第一部作業説明

日本薬学会
第1回全国学生ワークショップ
第一部

「6年制薬学教育を通して
成長したこと」



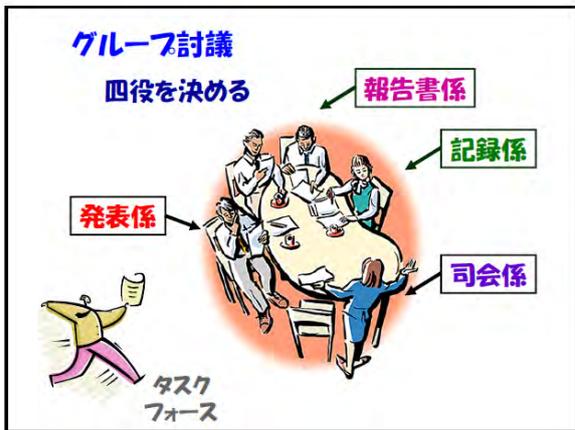

6年制薬学教育の概要（例示）

| | 1年 | | 2年 | | 3年 | | 4年 | | 5年 | | 6年 | |
|-----------------------|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|
| | 前期 | 後期 |
| 全学年を通して；ヒューマニズムについて学ぶ | | | | | | | | | | | | |
| イントロダクション | | | | | | | | | | | | |
| 薬学専門教育 | | | | | | | | | | | | |
| 物理系薬学 | | | | | | | | | | | | |
| 化学系薬学 | | | | | | | | | | | | |
| 生物系薬学 | | | | | | | | | | | | |
| 健康と環境 | | | | | | | | | | | | |
| 薬と疾病 | | | | | | | | | | | | |
| 医薬品をつくる | | | | | | | | | | | | |
| 薬学と社会 | | | | | | | | | | | | |
| 実務実習事前学習 | | | | | | | | | | | | |
| 薬学共用試験 | | | | | | | | | | | | |
| 病院・薬局実務実習 | | | | | | | | | | | | |
| 卒業実習教育 | | | | | | | | | | | | |
| 薬学準備教育（教養教育） | | | | | | | | | | | | |
| 薬学アドバンスト教育 | | | | | | | | | | | | |

今、ここで皆さんの
6年制薬学教育・学生生活を振り返って、

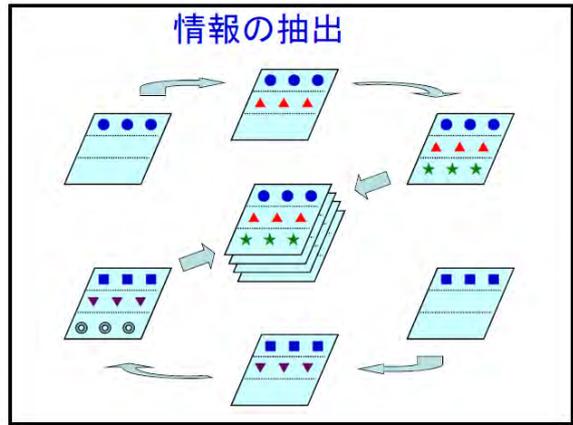
「6年制薬学教育を通して、
成長したこと」

小グループ討論を通して、皆さんの思いを
共有・意見交換をして下さい。

KJ法

情報を徹底して
収集
↓
語るところを
聞く
↓
情報の整理



記載上の注意点

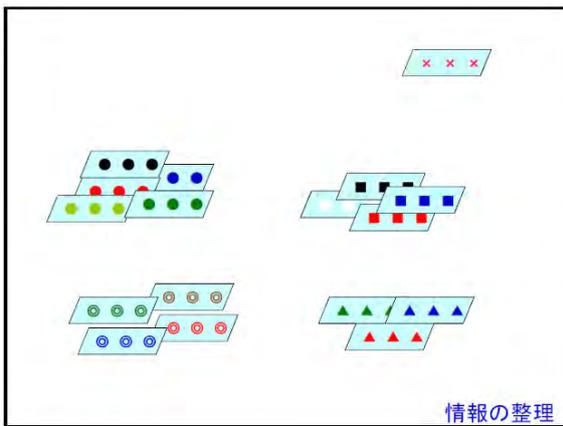
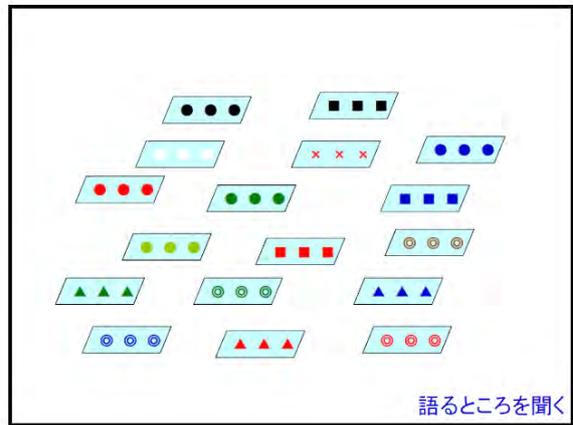
大きな文字で

明瞭に

誰が書いたか分かるように。イニシャルetc.

前の人意見を参考にしても、しなくてもよい

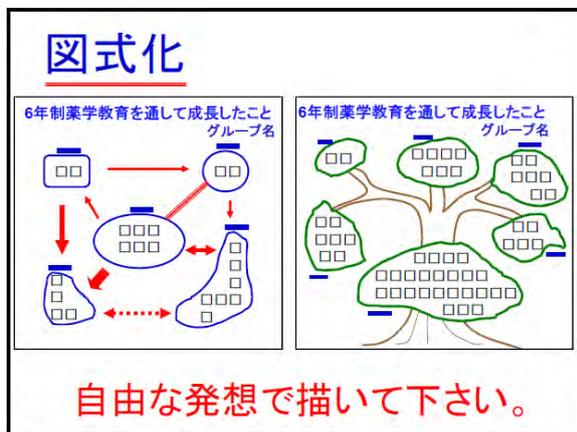
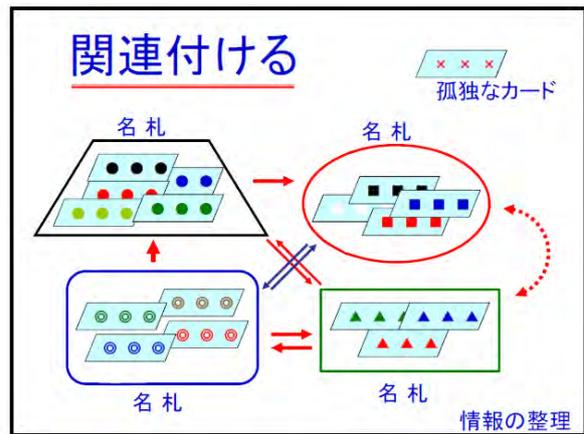
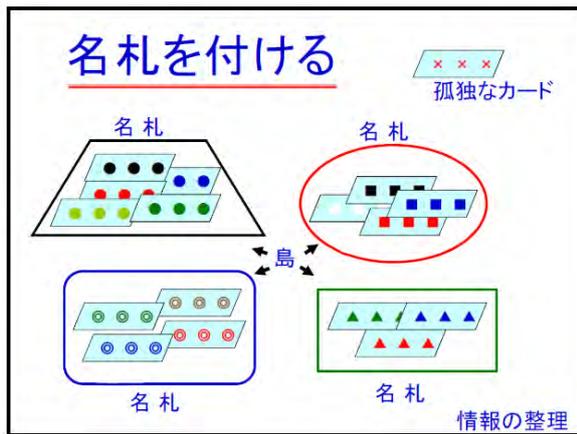
一人、5~6つ位の成長したことを書く



島を作る

孤独なカード

情報の整理



- ### これからの作業
1. 自己紹介 (1人30秒程度)
 - ・入学時に薬学を選んだ理由
 2. 「6年制薬学教育を通して、成長したこと」
- KJ法で情報を整理して発表する。
(模造紙で発表)

集合時間

11:00 集合

発表 3分
総合討議 10分

A → B → C → D

KJ法



IA班

1. 6年制薬学教育を通して成長したこと (KJ法によるプロダクト)

私たち IA 班は「6年制薬学教育を通して成長したこと」という題目について、KJ法を用いて意見を出し合った。討論の結果、各々の意見を「社会生活を送る術を学んだ」、「薬学的基礎知識の習得」、「研究活動を通しての成長と交友関係の広がり」、「長期実務実習を通して知識面・精神面の成長」、「ディスカッション能力の向上」、「将来の仕事への実感」の島に分類し、これらを時系列に並べ6年間の歩みを1枚の模造紙にまとめることで、成長の過程を漠然とした形ではあるが再確認した。ここで、意見として最も多かった内容は長期実務実習に関連する事柄及びそこから派生したものであった。長期実務実習で医療現場を経験したため、将来の仕事に対してより実感を持つことができたという流れに至った。

以下に各島に属する内容と簡単な説明を記載する。

◆ 「社会生活を送る術を学んだ」

- ・ 人との関わりの大切さを学べた
- ・ 何でも話せる仲間ができて、本当の自分が見つかった
- ・ 6年間大学へ通うことで、人間関係（学生同士、先生方との）が深まった
- ・ メンタル面が強くなった
- ・ 1人で生きていける術を学んだ
- ・ 生活の中で自然の凄さを実感した
- ・ 飲み会に参加することや、幹事をする人は人を成長させる

6年間の学生生活を通して人として成長できた部分の意見をまとめた島であり、普段の生活のなかで良好な人間関係を構築できたことが、最も重要であったと結論づけた。

◆ 「薬学的基礎知識の習得」

- ・ 基礎知識の重要性を認識した
- ・ 薬学関連の知識は重宝される
- ・ 普段の生活に活かせる知識がある
- ・ 必死になって勉強する力が身に付いた

基礎知識の重要性に関しては班内でも同意する意見が多かった。薬学的基礎知識は、長期実務実習を経験を経たからこそ様々な問題を薬学的な観点から考察する際に、必要であると結論づけた。

◆ 「研究活動を通しての成長と交友関係の広がり」

- ・ 研究活動を通して同期の仲間とコミュニケーションを図れた
- ・ 研究室の先生、先輩方と話し合うことでディスカッション能力がついた
- ・ 研究に携わることの楽しさを知った
- ・ 友人（後輩を含む）、知人が増えた
- ・ 今まで扱った事のない PC 関連機器に触れられた

研究活動を通してより深い知識、新たな技術の習得ができたこと、及び交友関係が広がったことは、実習と同様に私たちを成長させる 1 つの要因であった。一方で、大学によって研究に費やすことのできる時間に差が出ていることも事実であり、その点については第二部、第三部で討論した。

◆ 「長期実務実習を通して知識面・精神面の成長」

- ・ 薬局、病院、地域の繋がりについて学べた
- ・ 薬の先に患者がいることを意識するようになった
- ・ 薬剤師の仕事は薬を渡すだけではないことを現場で実感した
- ・ 現場で必要とされる知識のレベルを少しでも知ることができた
- ・ 調剤業務の楽しさを知った
- ・ 実務的な力が身に付いた
- ・ 栄養療法、運動療法の重要性がわかった
- ・ データの正確性を考えるようになった
- ・ 物事を多角的に思考するようになった
- ・ 薬を作るプロセスを具体的に知った
- ・ より他人の感情に気付くようになった
- ・ 教養は大切であると知った
- ・ 勉強に対する意識が変わった
- ・ 教科書通りではないことを実感した
- ・ デスクワークのみでは理解できないことが多い
- ・ 医薬品について詳しくなった
- ・ 医薬品の商品名を知ることができた

長期実務実習を通して得られた知識や経験はかけがえのないものであり、私たちを大きく成長させてくれた。そして、同班の全員が 6 年制薬学部における長期実務実習の重要性を理解していたからこそ、最も多くの意見が上がったのではないかと考えられた。また、この島の意見は第二部、第三部の討論の内容に繋がっていくものが多かった。

◆ 「ディスカッション能力の向上」

- ・ グループディスカッションや発表に慣れることができた
- ・ 人前で話す機会が多く、自分の考えをまとめて伝えることの大切さを感じた
- ・ 話し合いにより、新しい考え方に気付くことを学んだ

臨床を意識した6年制の教育では、発表やディスカッションを行う機会が多く設けられていたことで、意見を的確に相手に伝える能力の向上に繋がったと結論づけた。

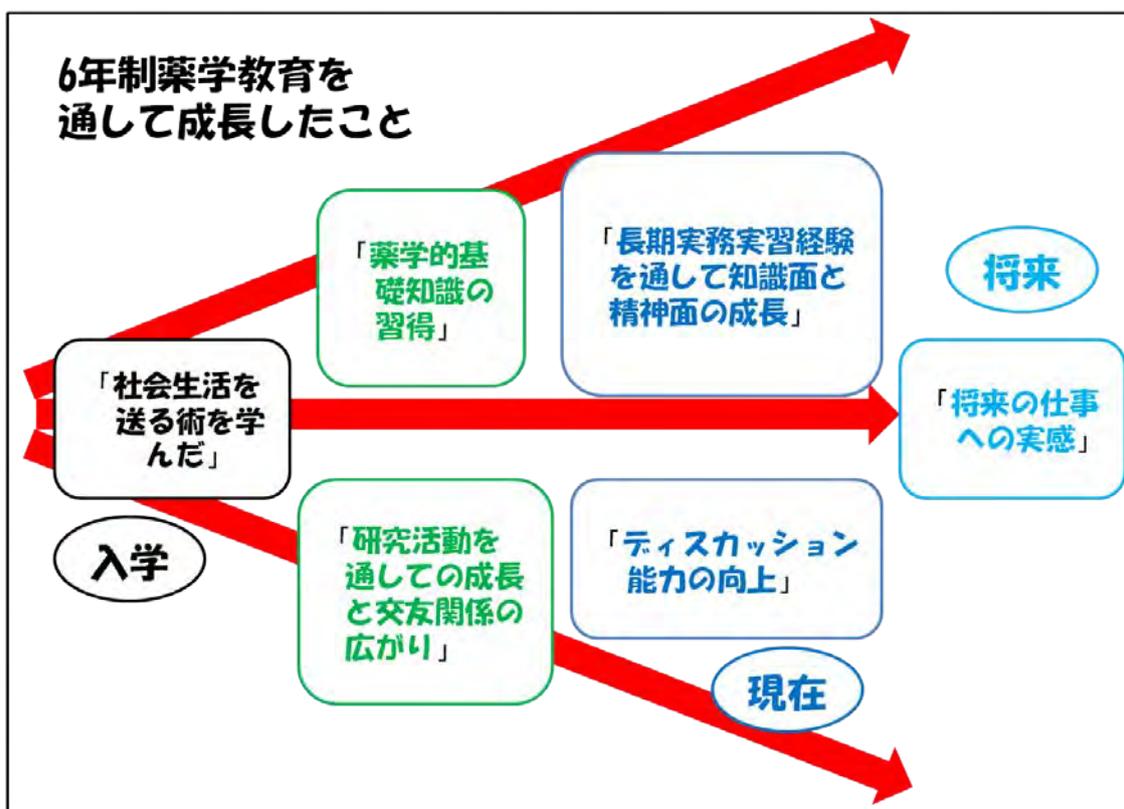
◆ 「将来の仕事への実感」

- ・ 薬剤師という仕事を具体的に知ることができ、薬剤師として働く生きがいを感じた
- ・ 現場の様子を見て、将来の仕事に対する実感を持つことができた

長期実務実習で薬剤師が関与できる仕事（病棟業務、地域医療、医薬品の開発等）を経験して、薬剤師の活躍できる幅広いステージに対する期待や実感が得られた。



画像：6年制薬学教育を通して成長したことのプロダクト



プロダクトの概略図

入学した当初は、私達個人にできる事は少なく、人としても未熟であった。しかし、社会生活を送る術を学び、勉学と研究に勤しむことで薬学的基礎知識の習得及びディスカッション能力の向上、並びに良好な人間関係を構築していくことができたのではないかと思う。そして、長期実務実習では医療現場を経験することにより知識面と精神面をさらに成長させる事ができた。現在は、今まで培ってきたものを生かし、勉学と研究に打ち込んでいるが、同時に長期実務実習を通して薬剤師の仕事に対する実感を得られたこともあり、将来に対する展望も見えてきた。

1. 「6年制薬学教育を通じて成長したこと」(KJ法によるプロダクト)

まずはメンバー個人の意見をそれぞれに出し、全ての意見を尊重して島に分類し、アウトプットへと準備していきました。

様々な意見を分類する中で時間をかけた部分は『成長の基準(何をもって成長なのか??)』でした。なぜ成長したのか、また、その成長には順番があるのかだろうか?ということです。そうした議論の中で、成長には種類や順番があるのではないかと考え、ストーリーを構成しました。ポスター発表には私たちの考えを上手く表現するために人の模式図を見だし、両足、足をつなぐ体、そこから手が派生し、頭で考える、そんなアイデアを見せる方法として使用しました。

人の行動や成長には必ず動機(heart)が必要であり、多くの人がそれを主に日々生活の中と実習の中で意識し始めていたことは全体の議論を通じて一致していました。

以下、各カードの意見と分類した島のタイトル、プロダクトを示します。

【コミュニケーションの大切さを知った】

- ・人の気持ちを考えるようになった。
- ・オトナと話せるようになった。
- ・相手の気持ちを考えて接するようになった。
- ・人間関係を築くことの大切さと難しさを知った。
- ・幅広い年齢の人と話せるようになった。
- ・先輩・後輩の縦のつながりを大切にするようになった。
- ・友達の大切さを知った。
- ・色々な考え方があり、それを受け入れる力を養えた。
- ・全く何も知らない人にわかりやすく薬について説明することを心がけるようになった。
- ・幅広い年代の人と接することで、周囲の人から良い刺激を受けることができた。

【探究心が向上した】

- ・OTCの説明書をよく読むようになった。
- ・「なに」「なぜ」を考えるようになった。
- ・学ぶことの大切さを知った。
- ・疑問点を納得いくまで調べるようになった。
- ・基礎を鍛えることが大切だと知った。
- ・物事を考える力がついた。
- ・自ら勉強する大切を知った。
- ・実験の面白さを知った。
- ・勉強の必要性を知った。
- ・自分の知りたい情報をとことん探せるようになった。

- ・薬を「化合物」と「お薬（治療）」の2つの視点で見えるようになった。
- ・薬剤に関する新聞記事に強く関心を持つようになった。
- ・卒業研究を通して物事を論理的に考えたり、上手く説明できるよう、心がけるようになった。

【社会人としての一步を踏み出せた】

- ・仕事の難しさを知った。
- ・生活することの難しさを知った。
- ・実習やアルバイトで社会の一員として働くことを知った。
- ・社会のルールを知った。
- ・お金の管理ができるようになった。

【薬剤師としての一步を踏み出せた】

- ・健康相談に答えられるようになった。
- ・患者さんと接する難しさを知った。
- ・4年制の頃と比べ実習期間が伸びたので、多くの患者さんと接することができた。

【自己啓発するようになった】

- ・勉強などで自分の時間を多く持てたので、自分がどんな人なのかが分かった。
- ・時間には限りがあると意識するようになった。
- ・何か新しい事を始めたいと感じるようになった。
- ・できなくても努力するようになった。
- ・行動基準が「自分」から「他人」へ変化。
- ・時間の大切さを知った。
- ・プレゼンをする機会がたくさんあった。

【薬剤師として将来を考えるようになった】

- ・医者は思ったより薬のことを知らないのでは、誤りがないか薬剤師がきちんとチェックしなければと思った。
- ・実際に医療現場を見て、薬の知識を多く持たなければならないことを知った。
- ・薬剤師はまだ社会にあまり知られていないと思った。
- ・病院に行った時、医者や薬剤師が何をしているか、じっくり見るようになった。
- ・病院、薬局両方で実習でき、就職先を考える上で参考になった。
- ・薬剤師になるという自覚を持つことができた。

<議論の経緯>

一通り意見を出しあってから、島のタイトルに取りかかりました。島のタイトルと平行して、どのように自分たちの考えを発表へとつなげるかを考えました。島のタイトルとして挙げた6つをつなげ、関連付ける中で、その中に一つのストーリーを見出しました。それは、成長を経た現在の自分たちを人に見立て、その「人」を形成する「脚」や「手」、「頭」が成長した結果、今の私たち自身である「人」

が形成されているのだというストーリーです。

「人」を形成するそれぞれのパーツには、以下の様な議論の中で島のタイトルとリンクさせていきました。



まず、「脚」＝人を支える支柱と考え、島の中で最も人間として成長した内容と捉えた「コミュニケーションの大切さを知った」と薬学生として成長した内容の「探究心が向上した」ことを「脚」に選びました。成長するという事は大学生として成長すること、薬学を学んでいるという学部特異的な成長と分けて考えた方がまとめやすく、2本の脚とリンクさせて考えました。コミュニケーションの大事さは多くの意見が2種類あり、オトナな人との付き合いのコミュニケーションと、病院実習を通して感じたコミュニケーションの大切さが挙げられました。「探究心の向上」としては長く経験した研究室生活で感じた道の世界への探求心と、実習で感じた知識不足からの探究心についての意見が多く挙げられました。

次に「頭」＝「自己啓発するようになった」、「薬剤師として将来を考えるようになった」の2つとしました。脚という土台を持ったうえで、自分の頭で考えるようになったこととしてこの2つのテーマを「頭」に分類しました。

最後に、頭で考えたことを実行するための「手」として「社会人としての一步を踏み出せた」、「薬剤師としての一步を踏み出せた」の2つを分類しました。これから薬剤師や社会人になり、独り立ちするために今の自分に何が足りないか、成長した結果、これから何が必要なのかを考えて議論していきました。

We are going to be a Medical Specialist!!! ... Basic & Standard, Think , and...Get!!!

IC班

1. 6年制薬学教育を通して成長したこと(KJ法によるプロダクト)

私たちIC班は、「6年制薬学教育を通して成長したこと」について、カードに自由に意見を書き、類似しているカードを集め、大きく5つの島に分類し図式化した。

4年制から6年制になったことで長期実習を経験し、その中で成長できたことが最も多く挙げられた。「能力」と名札をつけた島の中には、薬局実習や病院実習を通して成長できたことが多く挙げられた。様々な患者さんと接したことで、個々の患者さんに合った接し方を身に付き、他の医療従事者と交流する機会を得たことで、チームワークの大切さを知ることができたという意見が多かった。また、卒業研究を通して情報収集能力や解析能力、質問力、発言力を向上させることができた。このような能力は社会に出た時の薬学の専門家としての職能発揮に繋がるのではないかという意見も挙がった。

「医療人としての意識」という島に分類したカードは、どれも長期実習があったからこそ、成長できたことだと考えた。

「幅広い知識」という島は、長期実習を通して学んだことと6年間の講義を通して得た知識に分けた。臨床現場に出て、初めて医療経済的な考え方が重要であることに気付かされたという意見もあった。

6年間を通して積極性などの自己成長を実感することができ、またそれが災害時の活動に参加するといった行動力にも結びついていると考えた。

各島の中には小さな島を作ったものもあったので、◇として小さな島の名札を表した。以下に、島の名札と、各カードに記載された意見を以下に示す。

<能力>

- ・コミュニケーション
- ・コミュニケーション能力を身につけることができた
- ・人にわかりやすく説明すること
- ・様々な人と交流をもつことができた

◇患者との接し方

- ・年齢に応じたコミュニケーション
- ・聞き上手になった
- ・患者さんとの距離のとり方

◇他の医療人との接し方

- ・他の医療従事者との交流
- ・様々な職種の人との交流
- ・社会人としてのマナー、人間関係
- ・協調性
- ・チームワーク
- ・人脈が増えた
- ・人との繋がり

◇薬剤師として必要な能力

- ・図や資料を作成する能力
- ・発言力
- ・情報収集
- ・質問力

<医療人としての意識>

- ・人を思いやる気持ち
- ・見本、手本になる意識
- ・人間性と倫理観
- ・医療人としての倫理観
- ・責任感を持てるようになった
- ・様々な知識、意見を受け入れる気持ち

ID班

【方法】

方法は KJ 法に従った。まず司会者の進行のもと、個々が 6 年制薬学教育を通して成長したことについて、個々がカードに記載していった。

島のわけ方について

最初はキーワード別に細かくわけていたが、非常に島の数が大きくなった。ディレクターの助言のもと、まずは大きく知識面と体験面に関するカードで大きく 2 つにわけた。その中でそれぞれが書いたカードが抽象的な内容も多かったため、具体的にどのようなことを述べているのか、一つ一つのカードを丁寧に検討していった。

そして、島を大きく 6 つに分け、テーマをつけた。その際に抽象的なテーマにならないように、主語、述語を意識し、話し手に内容がうまく伝わるように心がけた。

以下にそれぞれのテーマと議論の内容を示す。

【結果と議論】

1. 「パーソナリティーの洗練」

それぞれ個々が、薬学以外で自分が成長したことについての意見をまとめた。現在の日本の大学ではモラトリアムの傾向が強いと個人的に感じるが、班全員がそれぞれ社会人としての意識を高めており、モラトリアムをすでに卒業していると感じた。

具体的な意見としては、積極性の向上、高いモチベーションの維持や目標に向けてあきらめずに努力すること、そしてそのためのタイムマネジメントなどである。そしてそれは今後社会で活躍するための土台となるものであり、模造紙の最も下に位置づけることにした。

2. 「薬の専門家になるための知識」

有機化学や薬理学、薬物治療学、環境衛生学、法律、そして薬そのものが何のためにあるのかといった事柄まで様々なことを六年間勉強してきた。そしてそれは、ただ知識を持っているというだけではなく、薬の専門家になるためのものであり、薬の専門家には不可欠なものであるという結論に達した。

我々の班は知識と体験と大きく二つの枠組みで考えたことから、この島を中央に大きく並べた。

3. 「体験を通じた薬剤師の社会的立場の認識」

ここでは臨床実習である長期実務実習での体験はもちろん、その他の交流での体験での意見も取り入れていった。

医療現場を考える力やドラッグストアの重要性、世界の中での日本の薬剤師の立ち位置を学んだという意見があった。他にも薬剤師の職能の限界を感じた者もいる。しかし、それぞれの職業にスペシャリストとしての枠組みがあるからこそ、チーム医療を進めていかなければならないと感じた。

上述の通り、体験と知識のそれぞれの島は大きく隣に並べた。

4. 「コミュニケーションを通じた社会適応性の向上」

臨床実習が多い6年制教育カリキュラムならではの点であり、従来の4年制カリキュラムと大きく差がつく内容であると考えられる。

患者に対してどのようなアプローチをするべきか、チーム医療が重要視されている現代で他の医療人とのコミュニケーションの仕方、他にも今回のようなワークショップをはじめとしてそれぞれの大学が工夫をこらして他大学、他学部との交流の場を設けることで、ディベート力を身に付けることができた。

このテーマは学んできた知識や経験に裏付けされたものであり、また六年制教育である利点ともとらえたことから、模造紙の上の方に位置するべきだと考えた。

5. 「倫理観、使命感を学んだ」

班の多くが、大学講義で学んだ薬剤師や医療従事者のあり方を実務実習体験を通して深く実感し、倫理観、使命感を学んだ。以下に班の意見を簡潔に示す。

医療従事者としての倫理観や使命感が身に付いた。命の尊さを身近に感じた。

患者や他の医療従事者に対して、どのような態度が必要か。

このテーマは今後薬剤師として活躍していく上で、常に心に留めておくべきものであり、その重要性から模造紙の上に位置することにした。

【結論】

以上5つのテーマの集大成として、最後に今後どのような薬剤師を目指すべきかに関する議論を「個々それぞれの医療人としての将来像構築」と題した。大学講義や実務実習を中心に、個々が努力を積み重ねていくことで、将来の薬剤師像を班の全員が形成できた。今回のディスカッションを通して、さらに今後、薬剤師としてあるべき姿を皆が再考させられた良いディベートとなった。

【謝辞】

最後に、タスクフォースとして細かなアドバイスをいただいた中村明弘先生をはじめ、ご協力頂いた大阪大学の有志の方々、その他多くの先生の方々に感謝いたします。

KJ法のカード一覧

「パーソナリティーの洗練」

- 四年制との差別化を今後図られることでモチベーションを持ち続けなければという意識がついた。
- 積極性が身に付いた
- 目標に向けて努力すること
- 時間管理能力の向上
- テスト勉強で努力は必ず報われると思い頑張る力がついた
- 諦めない根性がかなり強くなった
- 人間関係の築き方を学んだ

「薬の専門家になるための知識」

- 薬の存在意義を知ることができた
- 薬が環境や衛生と結びついていることを学んだ
- 薬に関係する法律について学んだ
- 薬の効力などを薬理、動態などで、ミクロな視点でみれた
- 薬の良い面、悪い面がみれた
- 病態と絡めた薬の使い方について学べる授業がたくさんあった
- 薬に関する科学について学んだ

「体験を通じた薬剤師の社会的立場の認識」

- 医療現場を考える力
- 世界の日本の立ち位置を知ったこと
- 薬剤師の現時点での限界を知った
- ドラッグストアの重要性
- 薬局や病院実習を通してたくさんの職種で成り立っているという社会の仕組みを学んだ
- 他の医療従事者との連携をとるために他職種について学んだ

「コミュニケーションを通じた社会適応性の向上」

- 自分の意見を簡単に伝える大切さを学んだ
- 他の学生と意見交換する機会が増えた
- 他学年、他学部の人とのつながりができ、視野が広がった
- 患者さん1人に対する様々なアプローチの仕方
- 試験勉強や研究を通して友人と協力することの重要性を知った
- 医療人としての基本的なコミュニケーション能力が身についた
- 人と意見を交換することの大切さを学んだ

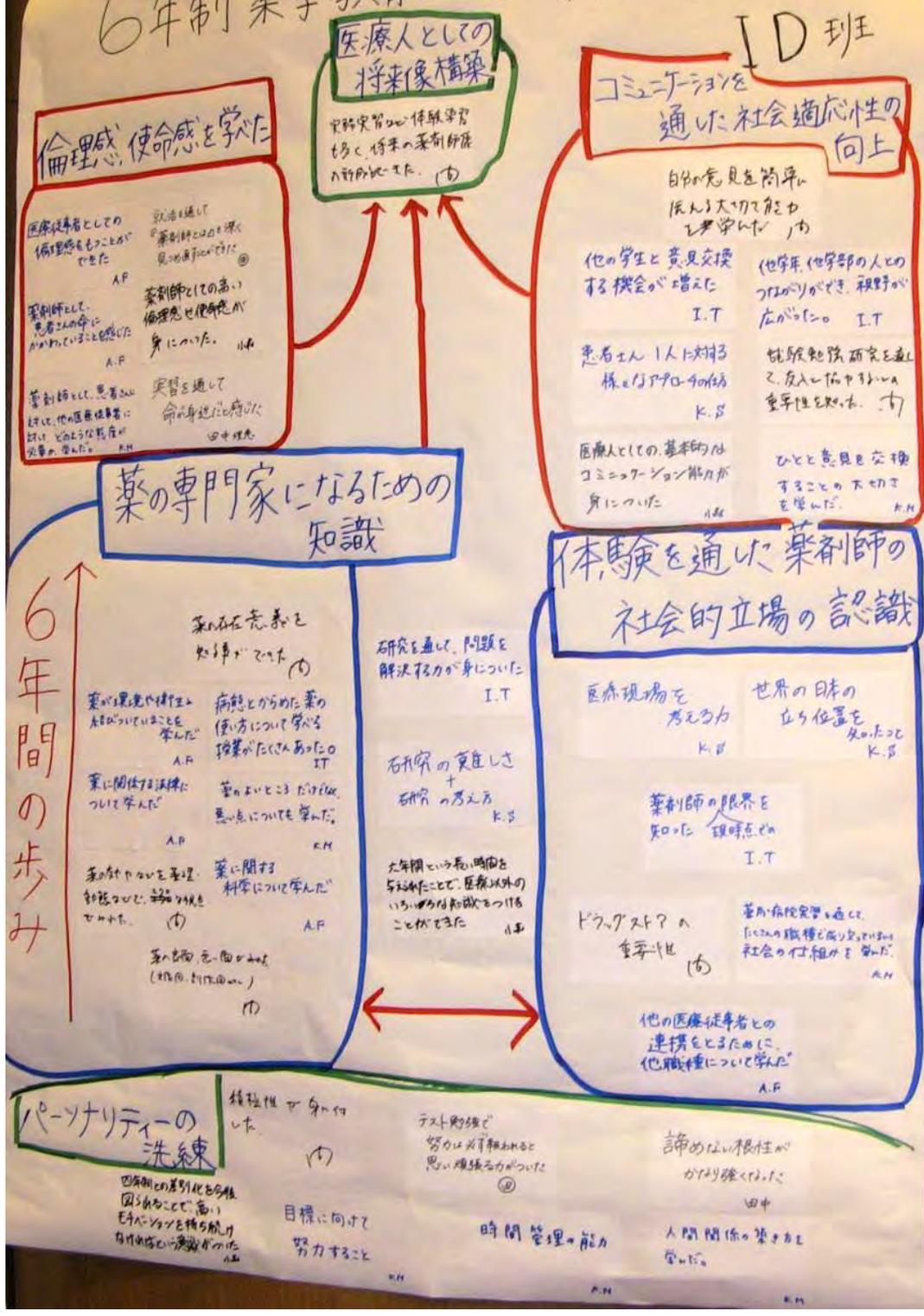
「倫理観、使命感を学んだ」

- 医療従事者としての倫理観を持つことができた。
- 薬剤師として、患者さんの命に関わっていることを感じた
- 薬剤師として、患者さんに対して他の医療従事者に対してどのような態度が必要か学んだ
- 就活を通して「薬剤師とは」を深く、見つめ直すことができた
- 薬剤師として高い倫理観や使命感が身についた
- 実習を通して命が身近だと感じた

「個々それぞれの医療人としての将来像構築」

- 実務実習など体験学習も多く、将来の薬剤師像の形成ができた

6年制薬学教育を通して成長したこと



II A班

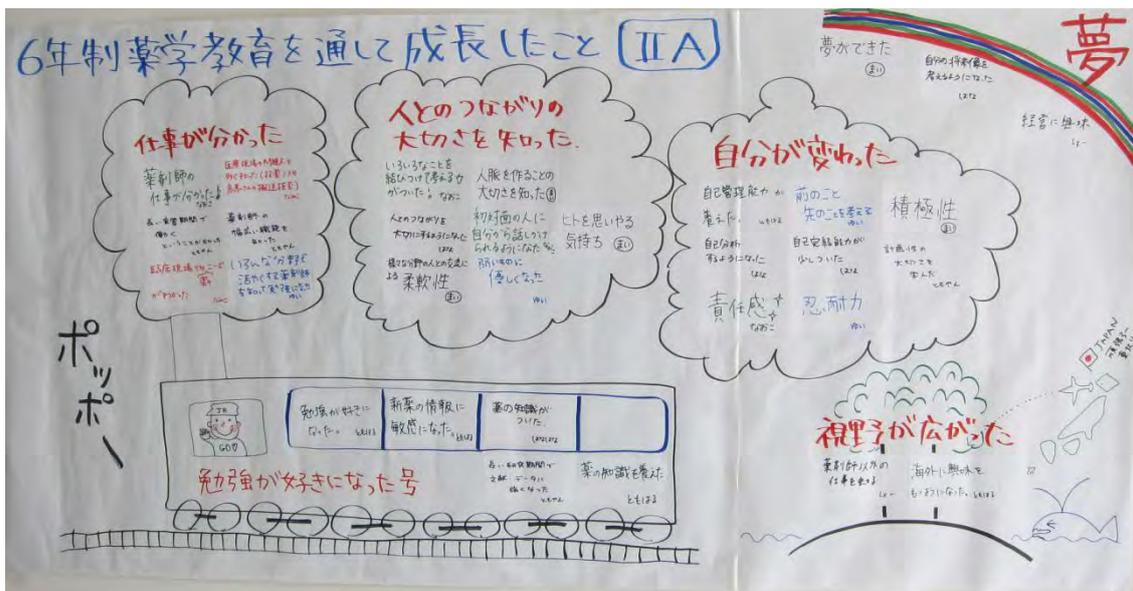
平成 18 年度入学より薬学教育が 6 年制に移行した。その 6 年制薬学教育課程が完成年度を迎えるにあたり、今回私たちは 6 年制薬学教育の一期生として、入学から現在までを様々な観点から振り返り、6 年制薬学教育の成果と課題について議論した。

- 議題 第 1 部 6 年制薬学教育を通して成長したこと
 第 2 部 6 年制薬学教育を通してもっと伸ばしたかったこと、やり残したこと
 第 3 部 これからの薬学教育に望むこと

結果を以下に示す。

第 1 部 6 年制薬学教育を通して成長したこと

私たちはまず、「6 年制薬学教育を通して成長したこと」をテーマに KJ 法を用いて意見を抽出し、整理した。以下に私たちの班の議論の経緯とプロダクトをまとめた。



画像：プロダクト

<議論の経緯>

私たちはまず、グループ内で出てきた意見を「勉強関係」「仕事関係」「交流関係」「身についた関係」「海外・薬剤師以外関係」「その他（夢）」の 6 つの島に分類した。

この 6 つの島のうち、「勉強関係」は大学での講義や実験を通して薬学を学んでいく基本的な姿勢が身についたという意見から「勉強が好きになった号」という列車に見立てた。この列車が走っているレ

ールは6年制薬学教育のカリキュラムを表しており、私たち一期生はこの列車の乗組員と言える。この島の中には、実習を通して“薬の知識がついた”という意見や、“新薬の情報に敏感になった”という自ら学ぶようになったという意見が見られた。また、6年制になり研究をする時間も増えたことで、薬学の知識以外にも文献やデータを読む力など幅広い能力を養うことができたという意見も挙がった。

次に勉強からの派生として、「仕事関係」と「交流関係」を位置づけた。この2つは座学ではなく、病院・薬局実習やその他の地域の人々との関わり、サークルや就職活動などを通して、自分の成長を実感できたという意見をまとめたものである。

このうち、「仕事関係」では薬剤師が想像以上に多分野で活躍していることに気付いたという意見が多くみられた。例として、行政やスポーツ選手のドーピングを防止するためのシャペロン*¹などが挙げられ、改めて薬剤師の職能の広さをグループ内で再確認した。また、実習を通して浮かび上がった臨床現場での問題点についても意見を共有した。これらを踏まえて、私たちは「仕事関係」の島を「仕事があった」と名付けた。

*¹シャペロン: アンチ・ドーピング活動の一つとして行われているドーピング検査に携わるスタッフの一員。ドーピング検査の際、検査対象選手への通知や付き添い・監視を行う。

一方、「交流関係」では薬学関係の人に限らず“様々な人と交流する”ことや、“自分から初対面の人に声をかける”など人脈を広げていくことの大切さを学んだという意見が挙がった。また、地域のお年寄りなど自分よりも“弱いものに優しくなった”など、薬学で学んだからこそ自分より弱いものの存在に気付く・気遣えるようになったという意見も見られた。そこで、私たちはこの「交流関係」の島を「人とのつながりの大切さを知った」と名付けた。

「身についた関係」では“計画性”や“自己管理能力”など、効率よく時間を使う術を得たという意見が見られた。これは6年制となり、勉強、実習、サークル、研究、アルバイト、就職活動等やるべきことが多くある中で、タイムマネジメントが重要だったということが窺える。その他に、“責任感”や“積極性”、“忍耐力”など今後社会に出たときに活かせる能力が培われたという意見も出た。病院・薬局実習をより充実したものにするために“積極性”などを持つよう後輩に伝えたいという意見も挙がった。これらの成長を私たちの班では「自分が変わった」という名前でまとめた。これは「仕事があった」「人とのつながりの大切さを知った」という成長を経た上で自然と自分の考え方や行動が変化したものと捉えることができる。

また、今までの流れとは別に“薬剤師以外の仕事”や“海外”に興味を持つようになったという意見も挙がった。これは、薬局などの店舗の経営に関心を持ったり、海外研修を通して日本以外に目を向けられるようになったりと、幅広く世界を見ることができるようになったということで、島の名前を「視野が広がった」とした。

これらの様々な成長を通して、私たちが最終的に行き着いたのは「夢を持てるようになった」という点である。6年間の薬学教育課程も残すところ8ヶ月足らずとなった今、自分が将来何をしたいのかを考え、その実現に向かって自ら行動出来るようになったということが、私たちIIA班の「6年制薬学教育を通して成長したこと」であるという結論に行き着いた。プロダクトには、私たちの先に広がる明るい未来を願って空に虹をかけた。

◆各カードに記載された意見と島の名前を以下に示す。

【勉強が好きになった】

- ・勉強が好きになった
- ・薬の知識がついた
- ・新薬の情報に敏感になった
- ・薬の知識を養えた
- ・長い研究期間で文献・データに強くなった

【仕事があった】

- ・薬剤師の仕事があった
- ・長い実習期間で働くということが分かった
- ・臨床現場での薬のニーズが分かった
- ・いろんな分野で活躍する薬剤師を知って勉強になった
- ・薬剤師の幅広い職能を知った
- ・医療現場の問題点を多く知った（投薬ミスや搬送拒否）

【人とのつながりの大切さを知った】

- ・いろいろなことを結びつけて考える力がついた
- ・人とのつながりを大切にするようになった
- ・初対面の人に自分から話しかけられるようになった
- ・様々な分野の人との交流による柔軟性
- ・人脈を作ることの大切さを知った
- ・弱いものに優しくなった
- ・ヒトを思いやる気持ち

【自分が変わった】

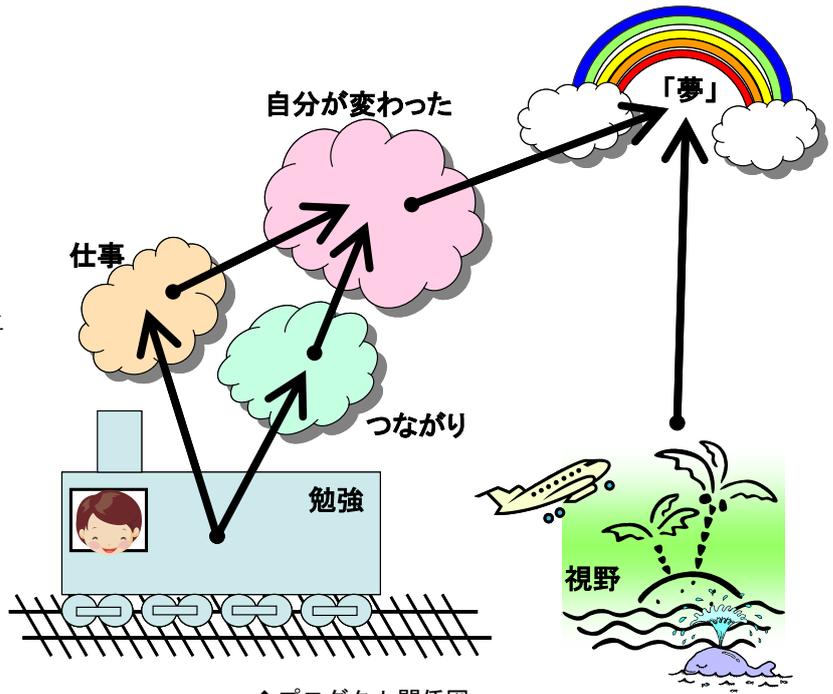
- ・自己管理能力が養えた
- ・責任感
- ・自己完結能力が少しついた
- ・積極性
- ・計画性の大切さを学んだ
- ・自己分析するようになった
- ・前のこと、先のことを考える
- ・忍耐力

【視野が広がった】

- ・薬剤師以外の仕事を知る
- ・海外に興味を持つようになった

【 「夢」 】

- ・自分の将来像を考えるようになった
- ・夢ができた
- ・経営に興味



Ⅱ B 班

議論の経緯

議論は 8 人のグループで KJ 法を用いて行った。各カードを書かれている内容でまとめると、(1) 目的をもって行動するようになった、(2) 薬剤師としての知識を身につけることができた、(3) 薬剤師の仕事や役割について分かった、(4) 理想の薬剤師像、(5) コミュニケーションの重要性、(6) 人の意見を聞くこと、(7) 命に対する倫理観、(8) 家族をより大切にしようと思った という計 8 つの島に分類された。

(1) については学習面だけでなく、何をするにも目的・目標をもつことで、最後までやり通す力が身についた、優先順位を決めて行動できるようになった、オン・オフの切り替えがうまくなった等の意見があがったので、それらもまとめて一つの島とし、島の中で矢印を用いて目的をもった行動からの発展型として表した。(2)、(3) については主に授業と実務実習を通して成長したことである。その議論の中で、実務実習を経て、改めて今まで授業を通して学んできた事の重要性を認識したり、緊張することの楽しさを実感したり、(4) 理想の薬剤師像の形成につながったという意見があがり、実務実習が貴重な経験であったことを再確認した。(5) は臨床現場だけでなく、日常生活におけるコミュニケーションの重要性に気づいたということである。そこから派生して(6) 人の意見を聞くことがよくできるようになった、相手の気持ちを感じとるようになった等の成長へとつながっていったという話になり、(6) 等の意見へ(5) から矢印を伸ばし、つながりを表すこととした。また、臨床現場で必要な知識と人間関係を作っていく力が身についたという意見があがり、それは薬剤師の仕事の理解とコミュニケーションの重要性の両方に関連するというので(3) と(5) の両方の島に含めた。(7) も実務実習を通して成長したことであり、それは薬剤師の役割を理解することで得られたものであるということで(3) から矢印を伸ばし、関連性を表した。また、その倫理観を得る事で、自分の周りの人々が健康であるという当たり前のことがとても大切なことであると気づかされたということで(7) と(8) 家族を大切にしようと思ったの島を矢印でつなげた。また、他にも入学時受け入れることが出来なかったこと理解できるようになった、自分の体調管理に気を使うようになったなど、価値観の変化や自己管理に対する成長があったという意見が出たので、それは個々の成長として捉え、島には含めなかった。

最後に、今回の貴重な意見交換の場を設けるにあたり、ご尽力頂いた関係者の皆様に深く御礼申し上げます。これからもこのような活動が続くこと、そして今回の意見が今後の薬学教育に生かされることを願っております。

KJ 法によるプロダクト



(1) 目的をもって行動するようになった

- 目的をもって学習するようになった
- 何をすることも目的をもつようになった
- 何をすることも目標や目的をもつ
- 自分で決めたことを最後までやり通す
- オンとオフのきりかえ
- 優先順位を決めて一つ一つ行動できるようになった

(2) 薬剤師としての知識を身につけることができた

- 薬や疾患の知識
- 薬や病気の知識

- 医薬品の知識
 - 動態が製剤等、入学前には考えもしなかった内容
 - 薬剤師には幅広い知識が必要だと感じた
 - 自分でよく調べるようになった
- (3) 薬剤師の仕事や役割について分かった
- 薬剤師の仕事の現状を学んだ
 - チーム医療での薬剤師の役割がわかった
 - 薬剤師になっても教育者としての意識が必要
 - 緊張することの楽しさについて
 - 臨床現場に必要な知識と人間関係を作っていく力 ※ (5) にも含まれる
- (4) 理想の薬剤師像
- 自分の理想の薬剤師像をみつけた
- (5) コミュニケーションの重要性
- コミュニケーション力
 - コミュニケーション力の大切さを知った
 - コミュニケーション能力の大切さ
 - 人とのつながりの大切さ
 - 人とよく話すようになった
 - 人間関係のむずかしさを知った
 - 他の医療スタッフとのつながりの重要性を感じた
 - 自分の意見の表現の仕方について学んだ
 - その場、その場での自分の立ち位置の取り方について学んだ
 - 臨床現場に必要な知識と人間関係を作っていく力 ※ (3) にも含まれる
- (6) 人の意見を聞くこと
- 他人の意見や経験談を聞くことの大切さを学んだ
 - 人の意見に耳をかたむけること

(7) 命に対する倫理観

- 倫理観について
- 生命に対する倫理観が成長した
- 薬剤師も命に関わっているということを強く感じた

(8) 家族をより大切にしようと思った

- 家族をより大切にするようになった
- 家族をもっと大切にしようと思った

(9) その他

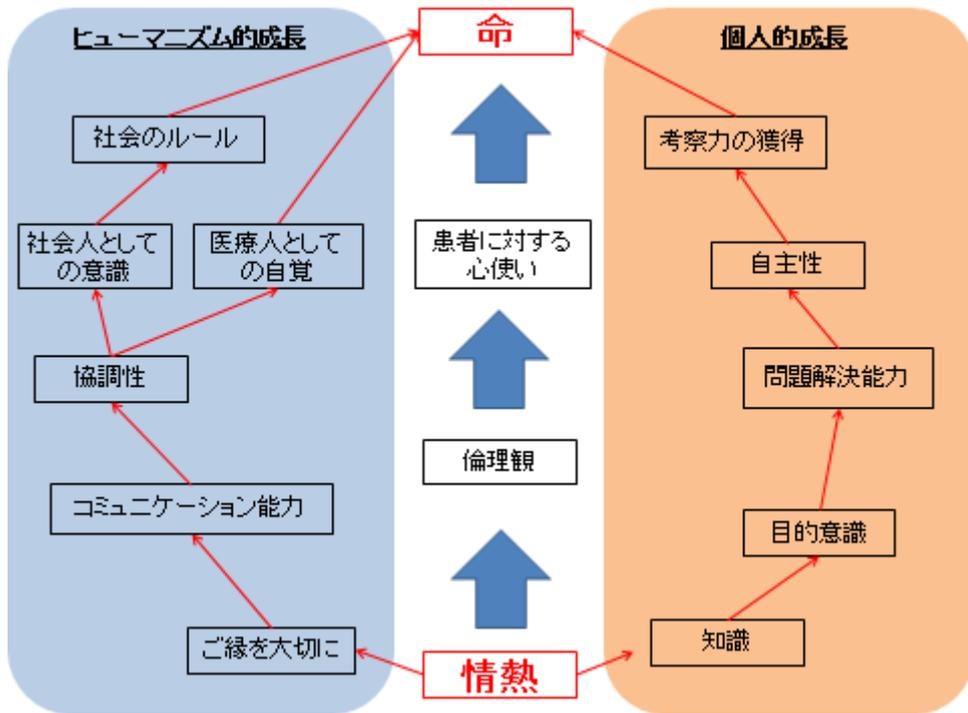
- 相手の気持ちを感じ取る
- 入学時受け入れることが出来なかったことが理解できるようになった
- 自分の体調管理に気を使うようになった

II C班

[議論の経緯]



プロダクト原本



プロダクト：島のつながり

ⅡC 班では成長した内容に関して、何故成長することができたのか、どこまで成長できたのかを明確にするために、上記のように「情熱」を基本とし、「命」へとつながる関連性を考えた。

まず、医療人、薬剤師として人の命を救いたいという「情熱」が、大学入学時から、大学で薬学を学ぶうちに、実習で患者さんと接して、平成 23 年 3 月 11 日の東日本大震災での惨状を目の当たりにした、といったそれぞれの理由により育まれたという意見が出た。個人個人で情熱を生じた理由は異なったが、学ぶことに対しての「情熱」がなければ成長はできないという考え、また、命を救いたいという「情熱」から、「倫理」「患者に対する気遣い・患者中心の医療の提供」について考えることができるようになり「命」の大切さについて再認識できたという考えが議論の結果一致したことから、「情熱」「倫理観」「患者への心遣い」「命」を薬学部六年間で学んできたことの根幹とした。

また、この根幹を成長させていくにあたって、個人の意識・知識的な成長と、人や社会との関わりを理解するヒューマンズ的成長の二通りの成長が重要であったと考えた。以下に各島内での意見とそのつながりについて詳細に示す。

◆個人的成長でのつながり

- ① 探究心をもって薬学知識の習得に励むうちに、自分は何のために勉強するのか、何のために存在しているのかを考えることができるようになり目的意識を持てるようになった。
- ② 幅広い知識と目的意識をもって、実習や卒業研究に臨むことで、その時々に必要なことを筋道立てて考えられるようになり、問題解決能力を育むことができた。また、目の前の患者さんに対して薬剤師としてどのようなことができるのかを考えられるようになった。
- ③ 知識面・意識面で成長したことから、自分の考えを持ちながら積極的に物事に取り組み、自分から行動を起こすという自主性の重要性について認識した。
- ④ 自主的に行動するにあたって、自分が患者や社会などにどのように貢献できるのか、どうやったら貢献できるのかを考えられるようになったことで、人の命の大切さを再認識し、自分が人々の命を救うため・守るために何ができるのかを考えるようになった。

◆ヒューマンズ的成長でのつながり

- ① 大学での友人、先生とのつながりや、実習先での患者、医療スタッフとのつながりなど、出会った人々との縁を大事にしたいと考えるようになった。
- ② 人とのつながりを大事にするには、人の数だけ考え方が存在すること、その考えを受け入れて相手の立場に立つこと、相手のことを考えて話すことなど、コミュニケーション能力が重要であることを理解し、実践できるようになった。
- ③ チーム医療やチームでの研究においてはコミュニケーション能力を持つだけでなく、その能力を生かして物事をチームで協調的に進めていかなければならないことを理解した。個人的な面で成長した「自主性」を持ちながらも協調的に物事を進める力を養えた。

- ④ 自分がチームの一員であると考えたときに、社会人としての意識、医療人としての自覚をもって行動する必要性を理解できた。また、そのことで必要な社会のルールに従って行動すること、医療・命の大切さについてより真剣に考え取り組む姿勢を身に着けた。

以上のように六年間の薬学課程において、情熱をもって学んできたことにより医療人として多角的な成長が促され、その結果として尊い「命」に対して自分たちができること、やらなければならないことを考えられるようになったと感じている。

今後社会に出たあとも、成長を続け「命」を重んじる医療人、薬剤師、そして教育者になりたいと結論付けた。

ⅡD班

第一部「6年制薬学教育を通じて成長した事」について、Ⅱ-D班では『チームの中でどう動くか』『チームをどう動かすか』の2つをメインにして討論しました。その基盤として、まず『知識の向上』があり、それと同時に『思いやりの心』『コミュニケーション能力の向上』の3つがあると考えました。それらが『積極性』につながり、やがて『医療人としての心構え』が芽生え、最終的に『チームの中でどう動くか』『チームをどう動かすか』につながっていくと結論付けました。以下はその詳細を原文のまま載せました。

『知識の向上』

- 薬についての知識がついた。
- 努力することの大変さを学んだ。
- 医療の大変さを知った。
- 一生勉強と思えるようになった。
- 日常でインテリな会話ができるようになった。
- 点の知識が線になった。
- 薬に対する知識を学んだ。
- 薬だけでなく病気についても考えるようになった。
- 学び続けることの大切さ、難しさに気付いた。
- 疑問をほったらかしにしなくなった。

『思いやりの心』

- 相手に理解してもらえるように話す技術
- 何が出来るか考えるようになった。
- 思いやりを持って人に接することができるようになった。
- 他人の立場になって考えることが出来るようになった。
その中の『もっと身近な人への思いやり』として・・・
 - 身近な人がどんな薬を飲んでいるのか分かる。
 - 周りの人を大事に思うようになった。
 - 家族って大事だなと改めて感じた。

『コミュニケーション能力の向上』

- たくさんの人と触れ合って人間として成長できた。
- 礼儀正しくなった。
- 人と仲良く話せるようになった。
- 人とのコミュニケーションのとり方について考えるようになった。

『積極性』

- 現場を知れた。
- 積極的に行動に移せるようになった。
- 自分の意見をはっきり言うことが大事だと思うようになった。

『医療人としての心構え』

- 薬剤師になるための心構えが出来た。
- 医療の担い手としての自覚ができた。
- 世の中で、どのような所で薬剤師が活躍しているのか知れたし見ることが出来た。

『チームの中でどう動くか』

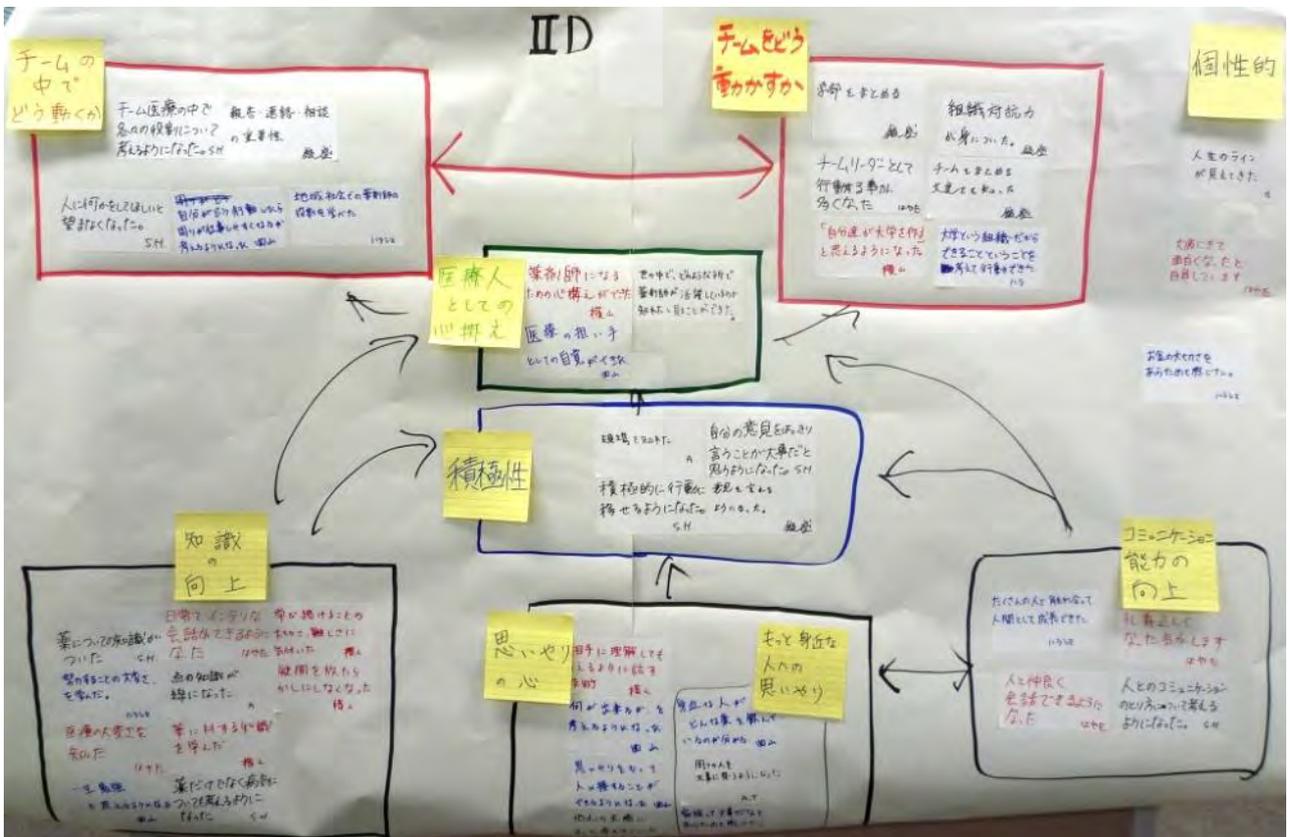
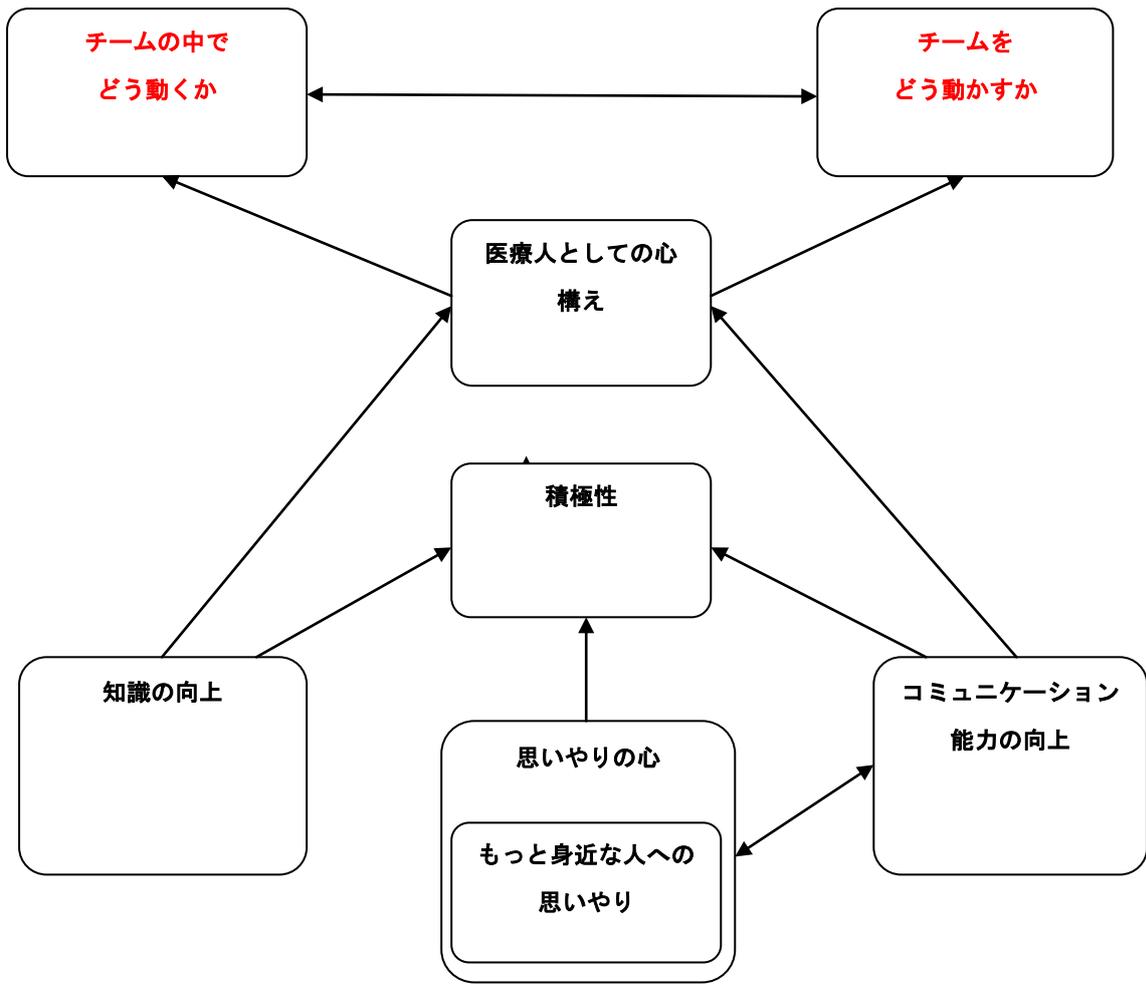
- チーム医療の中で各々の役割について考えるようになった。
- 報告・連絡・相談の重要性
- 人に何かしてほしいと望まなくなった。
- 自分がどう行動したら周りが仕事しやすくなるか考えるようになった。
- 地域社会での薬剤師の役割を学べた。

『チームをどう動かすか』

- 学部をまとめる。
- チームリーダーとして行動することが多くなった。
- 「自分たちが大学を作る」と思えるようになった。
- 組織対抗力が身についた。
- チームをまとめる大変さを知った。
- 大学という組織だから出来るということを考えて行動できた。

その他の意見として『個性的』というグループを作りました。

- 人生のラインが見えてきた。
- 大阪に来て面白くなったと自負しています。
- お金の大切さを改めて感じた。



第二部

「6年制薬学教育を通して、
もっと伸ばしたかったこと、
やり残したこと」



第二部作業説明

第二部



第一部では、
薬学部で過ごした5年数ヶ月を振り返って、
「**6年制薬学教育を通して成長したこと**」
をKJ法で整理しました。

グループ討論の中で

知識・技術・精神面で何が成長したかを具体的に実感しました。

第1回全国学生ワークショップ

でも、その一方で...

大学でもっと伸ばしたかったことや、やり残したこと
があるんじゃないでしょうか？



第1回全国学生ワークショップ

大学でもっと伸ばしたかったことや、やり残したこと

第一部と同じように内容をKJ法で整理してみましょう。



第一部のフロダクトの「島」（成長したこと）との関連を考えてもいいですね。

第1回全国学生ワークショップ

作業説明



- 作業時間 / 70分
- フロダクト / 模造紙で作成
- 昼食 / 12:45~13:30
- フロダクト展示（昼食時間） / P会場（この会場）
- 集合時間 / 13:30（この会場に）
- 発表 / 各グループ4分（B→C→D→Aの順）、
総合討論 / 10分
- 司会進行係、記録係、発表者、報告書担当者を決めてから、作業を始めて下さい。

第1回全国学生ワークショップ

I A班

6年制薬学教育を通してもっと伸ばしたかったこと、やり残したこと (KJ法によるプロダクト)

第一部に続き、第二部では「6年制薬学教育を通してもっと伸ばしたかった事、やり残した事」について KJ 法を用いてグループ内で話し合った。勉強面、プライベート面を問わず、まずは自由に思いついたことを書くこととした。ある程度意見が出揃ったところで、司会が全ての札を読み上げ、大きく“遊び関係”“実習関係”等のグループ分けを行い、更にそれを細かい島にグループ分けをしていった。これらの作業を行ないながら議論をしていると、「なぜそういった不満がでてきたのか。」「不満ばかりを並べても仕方がないのではないか。」「学べたからこそやり残した、と気付いたこともあるのではないか。」といった意見がでてきた。そこで、“もっと伸ばしたかった事、やり残した事”というのは、理想像があるからこそ感じることができるのではないかと、という意見があり、“理想に向かって、でも届かなかったこと”を表現する為に、山の頂点に理想像を描き、そこに登っていく途中経過にそれぞれの島を配置することにした。

次に、小さな島に分類している中で、“個人の努力次第で何とかなっただかもしれないこと”と、“個人の努力も必要ではあるが、それだけでは実現が不可能なこと”に分けられるのではないかと、という意見がでてきた。そこで、小さな島を“個人的にやり残したこと”、“個人の努力のみでは不可能なこと”に二分することにした。更に、“個人の努力のみでは不可能なこと”を“制度上の問題”“学習面の問題”に分けて考えることとした。

“個人的にやり残したこと”は、山の一番下に配置することにした。これは、アルバイトをしたかった、等の個人的な欲求も重要なことであり、様々な楽しみや好奇心があるからこそ、上を目指そう、という気持ちにもなってくるのではないかと、考えたからである。

また、線を引くことはしなかったが、“制度上の問題”に分類された島を山の左に配置し、“学習面の問題”の島を山の右に配置した。理想像はそれぞれが描いているものであるから、敢えて具体的に言語化することは避け、山の頂点に理想像として表現することとした。

以下に、カードに出てきた意見を島ごとに分類して示す。

(◆：小さな島に付けられたタイトル)

個人的にやり残したこと

◆ 「教養を身に付けておけば良かった」

- ・ 教養を身に付けておけば良かった。
- ・ 専門書以外の書籍をもっと読んでおけばよかった。
- ・ 専門の勉強ばかりで、英会話など他の勉強があまりできなかった。
- ・ 英語の勉強をしておけば良かった。
- ・ TOEIC の得点を上げたかった。

◆ 「人間性の成長」

- ・ もっと人として隙を作りたかった。
- ・ 学会スタッフで接遇を積極的に体得したかった。
- ・ 学園祭にもっと積極的に参加したかった。
- ・ 社会に出た時の人間関係の重要性をもっと早いうちから気付けたら良かった。
- ・ 人見知りを直したい。

◆ 「アルバイトをしたかった」

- ・ シフトのバイトをしてみたかった。
- ・ もっと色んなバイトを経験したかった。
- ・ バイトとかしてみたかった。
- ・ アルバイトをもっと頑張れば良かった。

◆ 「部活・サークルをしたかった」

- ・ 研究が忙しくて、途中でサークルを休んでしまった。
- ・ 部活に入部すればよかった。
- ・ サークルに入れなかった。
- ・ 4～6年でも部活に入りたかった。
- ・ サークルの立ち上げが出来なかった。
- ・ 大学でサッカーをしたかった。

◆ 「旅行に行きたかった」

- ・ 海外旅行に行きたかった。
- ・ もっと旅行したかった。
- ・ 旅行！もっと色んな地域の文化や食べ物に触れて楽しみたかった。
- ・ 北海道に行きたかった。
- ・ 海外、国内旅行をもっとしておけば良かった。

◆ 「遊び足りなかった」

- ・ 遊び足りなかった。
- ・ 葉加瀬太郎のコンサートに行きたかった。
- ・ もっと早くにラジオ映画の面白さを知っておけばよかった。
- ・ 適度に遊んでおけば良かった。
- ・ 勉強ばかりの時期、あんまり楽しくなかった。

◆ 「交友関係を広く持ちたかった」

- ・ 研究室の後輩の指導をもっと徹底させたかった。
- ・ 他大学と交流したかった。
- ・ もっと他の大学と知り合う機会が欲しかった。
- ・ 低学年時における、人とのつながりが少なかった。
- ・ 交友関係をもっと大切にすれば良かった。

個人の努力のみでは難しいこと

制度面

◆ 「制度が整備されてなかった（長期実務実習）」

- ・ もっと患者さんと接する機会を持ちたかった。
- ・ 実習でもっと患者さんと関わりたかった。（順番を入れ替えました）
- ・ もっと服薬指導をしたかった。
- ・ 現場（病院、薬局）でしか出来ないこと（患者さんとの会話等）をしたかった。
- ・ 色々な病院に実習に行きたかった。
- ・ 実習後に現場で学んだ事と、薬理などを結びつけて学びたかった。
- ・ 学校薬剤師の仕事についても実習したかった。
- ・ 病院実習で他の医療スタッフと関わりたかった。

◆ 「研究をもっと積極的にしたかった」

- ・ もっと研究する時間が欲しかった。
- ・ 学会にいとけば良かった。
- ・ もっと学会発表したかった。
- ・ 論文を読む力をもっとつけたかった。もっと読むべきだった。
- ・ 臨床論文をもっと読みたかった。
- ・ 論文を出したい。

◆ 「制度が整備されていなかったからできなかった（講義・学内実習）」

- ・ 解剖を見たかった。
- ・ 病態についてもっと学びたかった。
- ・ 薬ばかりで、臨床のことを学ぶ機会が少ない。

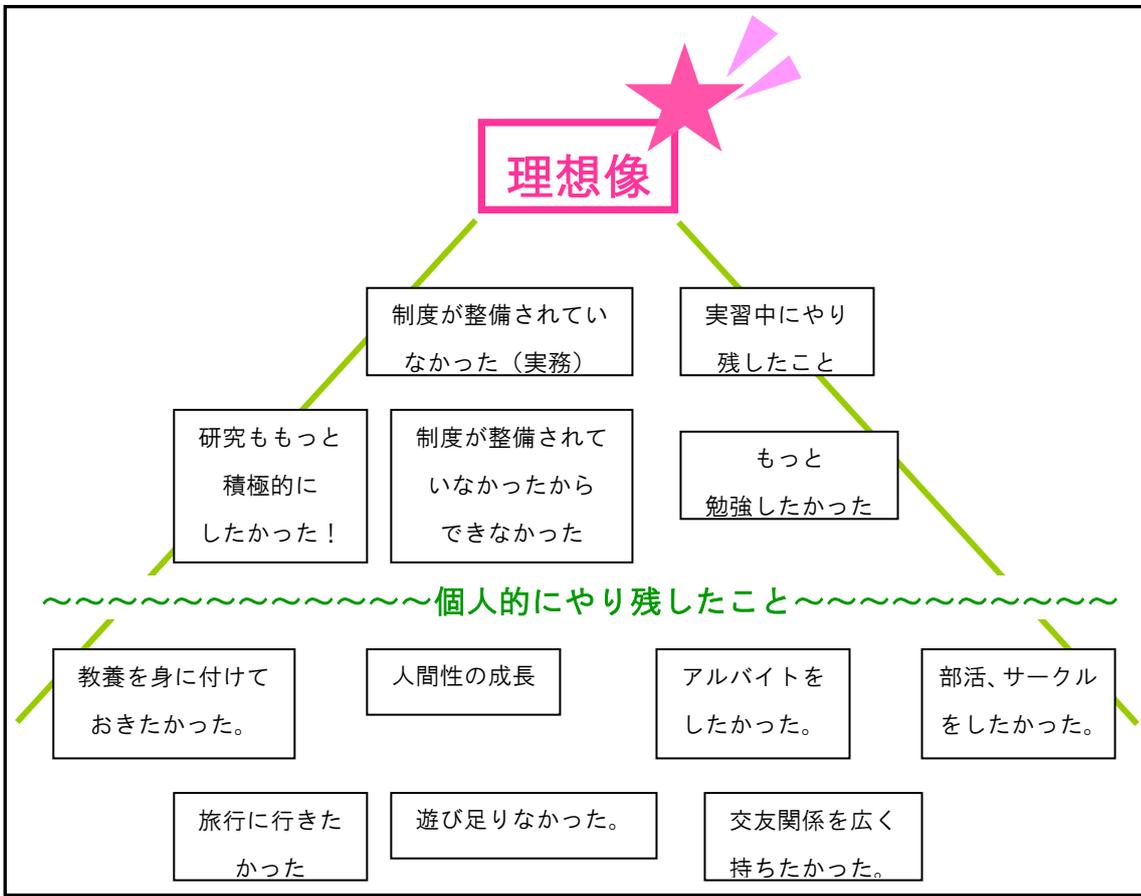
学習面

◆ 「実習中に自分がやり残したこと」

- ・ 実習で学んだことを、学問とより強く関連付けたかった。
- ・ 処方解析をもっとできるようになりたかった（実習中に）。
- ・ 実習に行く前の実務的な技能をもっと持っとくべき？
- ・ 実習へ行っている間に勉強する時間が減ってしまった。

◆ 「もっと勉強したかった」

- ・ 1～3年で勉強しすぎて、4～5年で勉強をさぼって学力が落ちた。
- ・ 覚える勉強じゃなくて、活かせる勉強をしたかった。
- ・ 医療系の勉強をもっとしたい。
- ・ 実習（学内の）をもっと真面目に受ければ良かった。
- ・ 研究室の専門以外の基礎知識の習得。
- ・ もうちょっと物理が分かるようになりたかった。
- ・ 1～3年における学問をもっと理解できるようになりたかった。
- ・ 基礎の勉強をもっとしておけば良かった。
- ・ もう少し実践的な薬物動態学を身に付けたかった。
- ・ 基礎薬学を楽しく学びたかった。
- ・ 薬学の専門知識を伸ばしたい。



プロダクトの概略図



画像：6年生薬学教育を通して、もっと伸ばしたかった事、やり残した事、のプロダクト

上記の内容を、自由な意見を出し合って議論することができた。プライベート面でもやり残したことを自由に言い合うことができ、そのことによって個人の努力のみでは達成することが困難な項目が明らかとなった。また、第二部で“やり残した事”をそれぞれが自由に挙げていくことによって、他大学との共通点や相違点に気付くことができ、第三部のテーマである“6年制薬学教育に望むこと”に関して、“薬学全体としてどうあるべきか”という視点からも議論を行なうことができた。

I B班

(KJ法によるプロダクト)

第1部では、6年制薬学教育を通して成長した点をKJ法により抽出した。様々な意見が出た結果、「自己啓発するようになった」、「社会人としての一步を踏み出すことができた」、「薬剤師としての将来を考えるようになった」、「探求心が向上した」、「コミュニケーションの大切さを知った」、「人の死を実際に見たことにより、命の尊厳の高さを再認識した」、などの島を分けることができた。

第2部では、第1部で抽出された上述の成長点を基に6年制薬学過程を通して「もっと伸ばしたかったこと、やり残したこと」についてKJ法により抽出する作業とそのデータの島分けの作業に取り組んだ。まず、「成長の結果、必要なもの」と、「もっと伸ばしたかったこと」の2つを大きな名札として分類を行った。「成長の結果、必要なもの」では、今後薬剤師として必ず必要なものであると考え、患者や医療従事者の考えを知るという内容などがこの項目に入った。「もっと伸ばしたかったこと」では、普段の生活から「人間力を高めるもの」という島と、薬学部ならではの「Medical specialistとして足りないもの」という島の2つの小さな島に細分する事が出来た。さらに「Medical specialistとして足りないもの」では、「薬学の知識で足りないもの」、「薬学以外の知識で足りないもの」、および「実務実習で取りこぼしたもの」というさらに小さい島を作り、内容を整理した。一方、文殊カードの中には「Medical specialist」の島には該当するが、細分化した島に組み入れることが難しかったカードが3枚（「暇な時間があってもつたいなかった。」、「実務実習で研究室が短かった。」、および「薬学教育を学生としてもっと積極的、主体的に受けるべきだった。」）あった。このため、これらの3枚のカードは細分化した島の中には入れずに独立したものとして取り扱った。

議論を進めるにあたり、私たちの感覚では議論を煮詰める時間が短く、様々な意見について深く追求するまでの時間がなかった事が心残りであった。しかし、多くのメンバーと議論することで、個々人には今までにはなかった考えや意見に触れる事ができ、自分の中での改革に役立った。また、与えられた時間が足りないくらいであった故に、集中した議論やプロダクト作成が行なえたとも感じられ、その意味で有意義な時間を過ごすことができた。

以下に、各文殊カードの内容と分類した島のタイトル、およびプロダクトを示す。

6年制薬学教育を通して「もっと伸ばしたかったこと、やり残したこと」

成長の結果必要なもの

- ・ 海外で活躍している特殊な仕事をしている人の話を聞く。
- ・ 医師や看護師がどんな勉強、仕事をしているかをみる。学べば視野が広がっていいと思う。

人間力を高めるもの

- ・ 薬局アルバイトとしてみたかった。
- ・ 色々なアルバイトをやりたかった。
- ・ 夜中のバイトをしておけばよかった。
- ・ 読書
- ・ 体力づくり
- ・ もっとボランティア活動をしておけばよかった。
- ・ 学生生活を有意義に過ごすことができたような気がする。
- ・ 趣味や新しい習い事を始める時間がなかなかとれなかった。
- ・ 資格を取る努力をすれば良かった。

Medical specialist として足りないもの

薬学以外で足りないもの

- ・ 英語がもっと話せるようになりたい。
- ・ 外国人ともっと話せるようになりたい。
- ・ 薬学以外の科目ももっと勉強したかった。
- ・ 選択科目がもっと欲しかった。
- ・ 薬学以外も勉強したかった。
- ・ 解剖（ヒト）をしてみたかった。
- ・ 心理学など色々な勉強をしてみたかった。
- ・ 経済に関する知識が不足している。

実務実習で取りこぼしたこと

- ・ 実習で患者さんの情報についてもっと知りたかった。
- ・ 服薬指導をする機会がもっと欲しかった。
- ・ もっと充実した早期体験学習を受けたかった。
- ・ 病院・薬局以外の実習をやりたかった。
- ・ オペを見ていない。

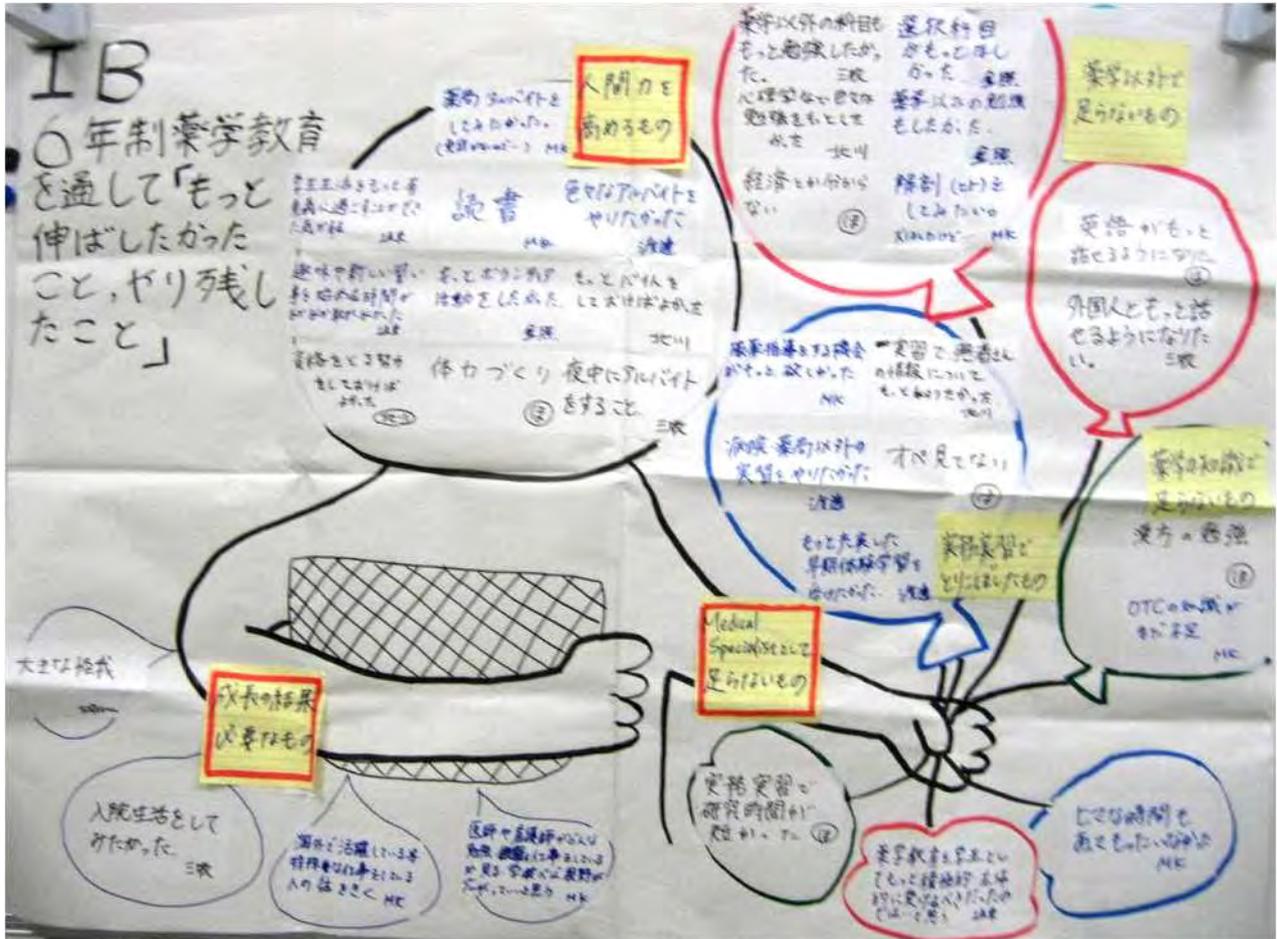
薬局の知識で足りないもの

- ・ 漢方の勉強
- ・ OTC の知識がまだ不足

独立

- 暇な時間があってもつたいなかった。
- 実務実習で研究室が短かった。
- 薬学教育を学生としてもっと積極的、主体的に受けるべきだった。

プロダクトの全容



I C 班

(KJ法によるプロダクト)

私たち I C 班は「6年制薬学教育を通して、もっと伸ばしたかったこと、やり残したこと」というテーマに沿って KJ 法を用い、それぞれの意見を出し合った。また、それらの意見に対して討論した結果、第一部で完成させたポスター（テーマ：6年制薬学教育を通して成長したこと）の内容と関連づけて、これらの意見を7つの島に分けることができた。各意見を討議でまとめる際には、やはり薬学部における基本的な薬学的知識や実習による修学時間の重要性から、薬学以外のことに対して時間を割く余裕がなかったことに対する意見が目立った。また、各実習や大学によって個々でもっと伸ばしたかったと感じることが異なっていた。このことから、これからの6年制薬学教育では各大学において特色を出すだけでなく、その内容の統一性についても議論されるべきなのではないかと感じた。

以下に各島の名札とそれらに属するカードを挙げる。

(1) 幅広い知識

- ・ 医薬品経済学など薬学とは少し離れた視点
- ・ 薬学以外のこと全般
- ・ 薬局経営など経営的感覚の取得
- ・ 社会についてもっと知っておいた方が良かった。
- ・ 論理的な考え方

(2) 臨床実習

<未経験>

- ・ いろんな薬局、病院で実習したかった。
- ・ バイタルをとれるようにもっと学びたい。
- ・ ドラッグストアの実習
- ・ 治験をみたかった。

<不足>

- ・ 勉強会にもっと参加したかった。
- ・ 実習で患者さんともっと接したかった。
- ・ もっと患者さんと接する。
- ・ 批判的な見方
- ・ 実践的な知識
- ・ 診療報酬・調剤報酬の勉強
- ・ 実習内容の充実
- ・ 多くの症例に触れる。
- ・ 病院や薬局についてはわかったが、企業やドラッグストアについてももっと知りたかった。
- ・ 医療従事者との会話

- ・ 服薬指導
- ・ 抗菌薬、抗がん剤の具体的な使用方法

(3) 学校

- ・ 国家試験対策
- ・ 臨床現場との関わり
- ・ 1年のときから薬学に関連のあることを学びたかった。

(4) 研究

- ・ 色々な研究に関与してみたかった。
- ・ 研究

(5) バイト・遊び

- ・ アルバイト
- ・ 色々なバイト、旅行
- ・ 海外旅行
- ・ 遊び

(6) 語学

- ・ 英語力、English!!
- ・ 留学、語学力の強化
- ・ 異文化との交流

(7) 交流

- ・ 他大学・学部との交流
- ・ 他学部との交流
- ・ 他学部学生(大学)との交流
- ・ 多職種との関わり
- ・ 他大学との交流。

2. 議論の経緯

まず、『幅広い知識』において私たちは6年間の殆どを現場で迅速に対応できるように基本的な薬学的知識の習得に充てられてきた。結果として薬剤師の職能を発揮する上で必要な知識を身に付けることができた。しかし、その一方で「医薬品経済学など薬学とは少し離れた視点を学びたかった。」「社会についてもっと知っておいた方が良かった。論理的な考え方を持てるようになりたかった。」などの意見もあった。これは実習を経験した後で薬剤師にも薬局経営や院内製剤の在庫管理などをする上で経営的な感覚を養うことが重要であると感じたためであった。一医療人として薬学的知識も重要であるが、社会では組織として患者により良い医療サービスを提供するために、医療経済学などの知識を習得する

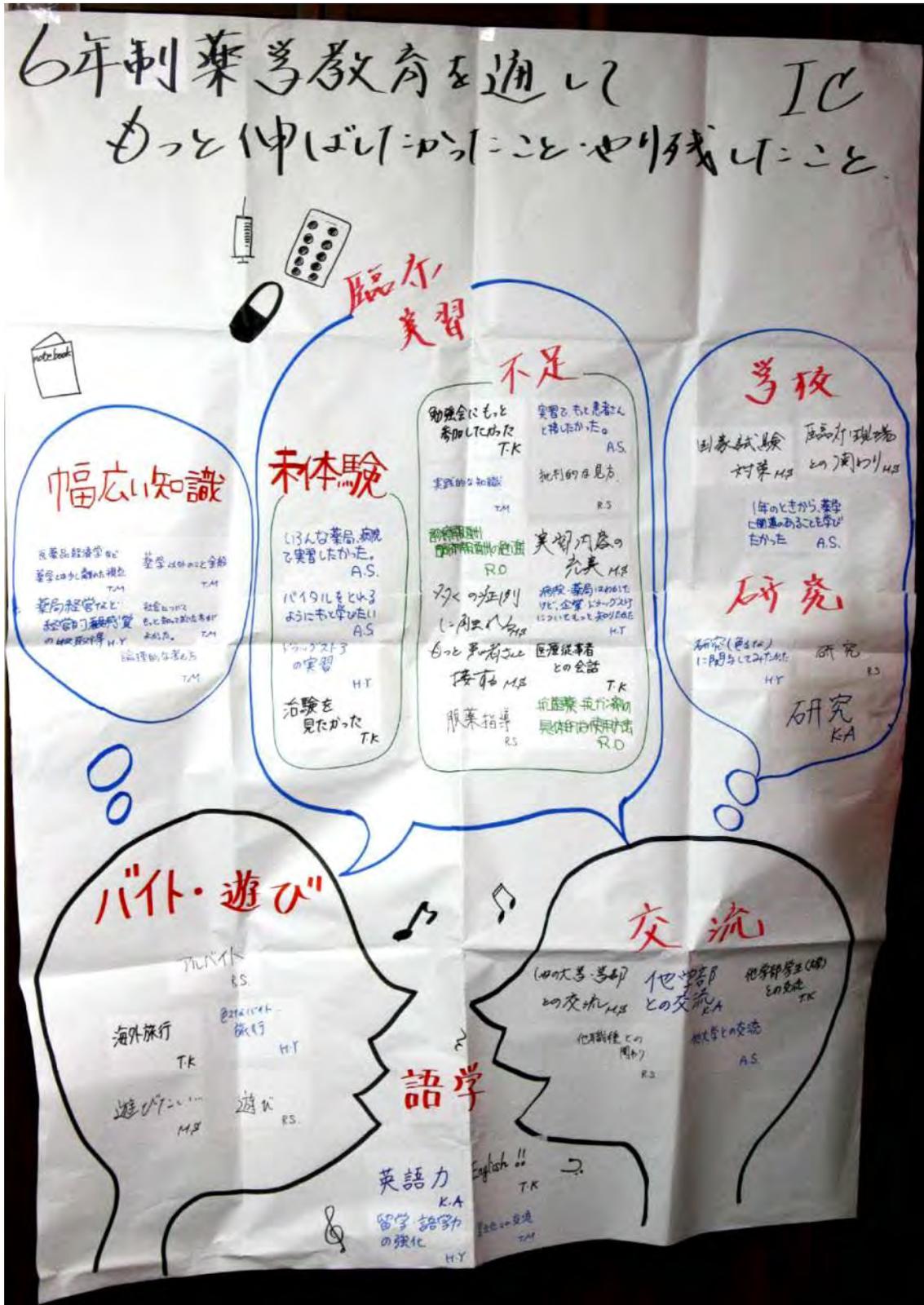
こともまた重要であると私たちは考えた。また、勉強だけでなく社会の仕組みや論理的な思考を身につけたかったという意見もあった。これらの意見は、第一部での『幅広い知識』の項目の中で主に皆が感じた不足している経験として挙げられた。

次に、『臨床実習』という一つの大きな島から、臨床実習で経験したかったが出来なかったこと<未経験>の部分と、実際に実習で経験したが<不足>していると感じた部分についてそれぞれ意見をまとめた。まず、未経験には「いろんな薬局、病院で実習したかった。」、「バイタルをとれるようにもっと学びたかった。」、「治験をみてみたかった。」などの意見が挙げられた。また、実習で不足していると感じたものには「勉強会にもっと参加したかった。」、「実習で患者さんともっと接したかった。」、「もっと多くの症例に触れたかった。」、「他の医療従事者ともっと会話をしたかった」など各実習先において改善して欲しいという意見が挙げられた。このような意見は各大学や実習先によってそれぞれ十分であると感じている者と、もっと伸ばしたかったと感じている者がそれぞれであった。例えば、バイタルもとれるように大学で予め一人一人に聴診器が配布され血圧の測定を行ったり、実習先で採血を行ったりといった経験をした者に対して、あまりそういった内容に触れることがなかったという者もいた。このように各大学や実習先によって習得できることに差があり、6年制教育カリキュラムには、より教育内容の統一性が必要だという話が出ていた。また、実習先の選択権を学生に持たせることによって、より実習先による経験の差異を改善できるのではないかと、また、実習に対する動機付けが明確になり、より効率的に主体性をもって実習に取り組むことができるのではないかと意見も挙がった。これらの意見は第一部の『能力』という項目に対して主に不足していると感じた意見であった。

次に『学校』と『研究』では主に各大学において「もっと国家試験対策をやってほしい。」、「もっと早い段階から（1年から）臨床の現場に沿った講義を行ってほしかった。」、「もっと研究をしたかった。」という意見があり、これも実際に実習を経験したことによって学校で学んだことと臨床で学んだことにギャップを感じ、あまり実践的に使えなかったという意見であった。一方で、学校の講義で学んだ基盤があつてこそ、実習で経験したような実践的な技術や論理的思考を十分に活用できるのではないかと意見もあった。また、国家試験対策や実習が忙しくあまり研究ができなかった大学では、もっと研究を深めたかったという意見があり、これらには各大学によって国家試験対策に重点を置く大学と逆に研究に重点を置く大学で大きく意見が異なっていた。この議論を通して、本来の幅広い職業選択が可能となるようなカリキュラムを全ての薬学生に保証し、その中で個々が自分の志望に沿った職業選択（研究、薬剤師、MR等）ができるようにするべきではないかと感じた。

次に『バイト・遊び』、『語学』、『交流』では前述のように薬学生の多忙ゆえに、なかなかアルバイトや遊び、留学、他大学や他学部との交流する機会を設けることが難しかったという意見が挙がった。アルバイトや遊び、他大学や他学部との交流、異文化交流などはこれから私たちが社会人となったときに求められるコミュニケーション能力の強化に繋がるものであり、勉学が忙しくても積極的にボランティア活動や国際交流に参加していくことが大切であるという議論がされた。また、異文化交流や英語力は様々な最新の医学的情報の共有や取得、また外国の患者に対する服薬指導など自らの自己成長や自己能

力を最大限に生かすために重要であるため、このような国際的な経験を養う場も設けることができたらいよいよ私たちは感じた。これらの島は第一部にある『能力』の特にコミュニケーション能力や『幅広い知識』、『自己成長』にも関連付けて私たちが不足であったと感じたものであった。



I D班

私たち I D班は「6年制薬学教育を通して、もっとのびたかったこと、やり残したこと」について、K J法を用いて意見を出し合い、1枚の模造紙にまとめた。

まず、いくつかの島を作り、I部で議論した成長したこととの関連性を考えた。しかし、全体の意見から、成長したこととの関連性よりも、むしろ、どこでやり残したのかを重要視した方が良いという結論に至り、大学のカリキュラムとしてやり残したことと、大学外でやり残したことの2つに分類した。そして、全体の意見から、早い時期からモチベーションを高く持ちたかったという結論に至り、今後もモチベーションを高めていきたいとまとめた。

以下に、各島のプロダクトを示す。

大学のカリキュラムとしてもっと伸ばしたかったこと、やり残したこと

大学内でもっと伸ばしたかったこと、やり残したことは、大きく3つに分類した。意見の多くは長期実務実習を通して感じたものが多く集まった。

特に、現場に出るまでに学びたかった実践的な知識は、大学という教育現場で学んだことと、実務実習で学んだ臨床現場とのギャップが原因ではないかという意見が出た。

6年間のカリキュラムを通して、薬剤師としてだけではなく、一人の医療人としてもっと幅広いことを学びたかったという意見が多く、カリキュラムとして組み込まれていても良いのではないかという意見も出た。

■現場に出るまでに学びたかった実践的な知識

- ・治療ガイドラインにより踏み込んだ薬学的知識
- ・薬学に関する法律や経済面
- ・ディスカッションの場にもっと参加したかった
- ・言いたいことを上手く伝える能力（ディベート講義を組み込む）
- ・現場に通用する問題解決能力
- ・教科書通りではない応用力（OSCEではマニュアル化し過ぎていた）

■他職種ともっと関わりたかった

- ・医師に、どのような薬剤師を望むか聞いてみたかった
- ・歯-薬間のつながりがそこまで学べなかった
- ・医師や看護師の職業を体験してみたかった
- ・医療従事者との話し合いの場が少なかった
- ・現場で働いている方の意見をもっと吸収したかった
- ・他の医療従事者についてもっと知りたかった

■大学のカリキュラムでもっとやりたかったこと

- ・もっと研究がしたかった
- ・他の薬局で実習したかった
- ・病院実習（長期間行いたかった、11週間では短すぎた）

■孤立

- ・薬剤師以外で免許が必要な職種を体験見学したかった

大学以外でもっと伸ばしたかったこと、やり残したこと

大学以外でもっと伸ばしたかったこと、やり残したことは、大きく4つに分類した。その内容は、自分次第で行うことができたものが多く、自分自身の反省点が多かった。全体として、パーソナリティーの向上のための事項が多く、視野をもっと広げたかったという意見にまとまった。

■薬学以外の知識をもっとつけたかった

- ・資格取得
- ・薬学以外の勉強をもっとしてみたかった
- ・薬学以外の知識をもっと伸ばしたかった
- ・薬学部、勉強ばかりだった

■英語力をもっとつけたかった

- ・海外の薬学六年制教育体験
- ・外国の薬学と日本の薬学の違いを見たかった
- ・国際協力+英語力
- ・英語の教育
- ・英語力（外国人の患者さんも来られるかもしれないから）
- ・海外教育をして視野を広げたかった
- ・留学（外の世界を見たかった）
- ・海外留学
- ・大学で学ぶこと以外のこと（英会話など）

■他学部と交流を持ちたかった

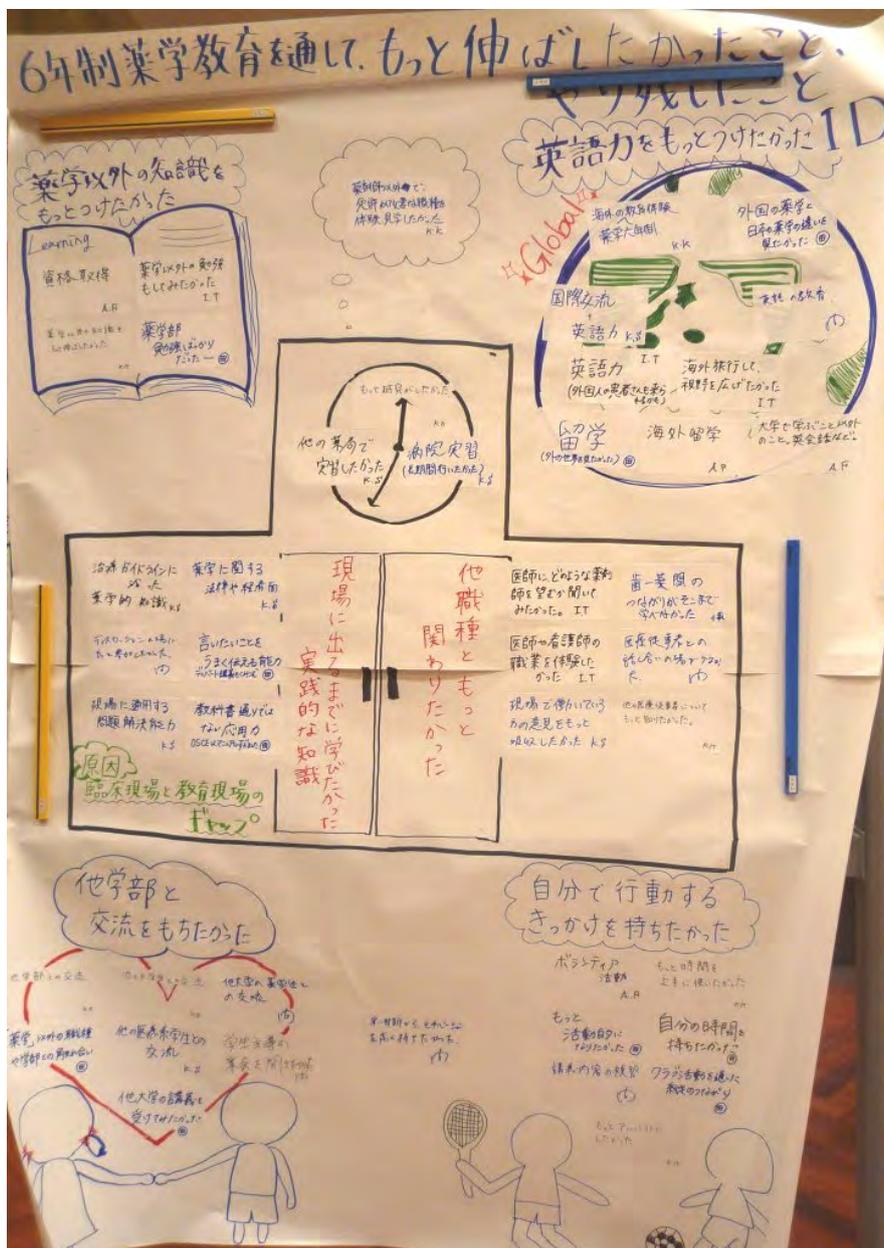
- ・他学部との交流
- ・他の大学生との交流
- ・他の薬学生との交流
- ・「薬学」以外の職種や学部との触れ合い
- ・他の医療系学生との交流
- ・学生主導の集会を開きたかった
- ・他大学の講義を受けてみたかった

■自分で行動するきっかけを持ちたかった

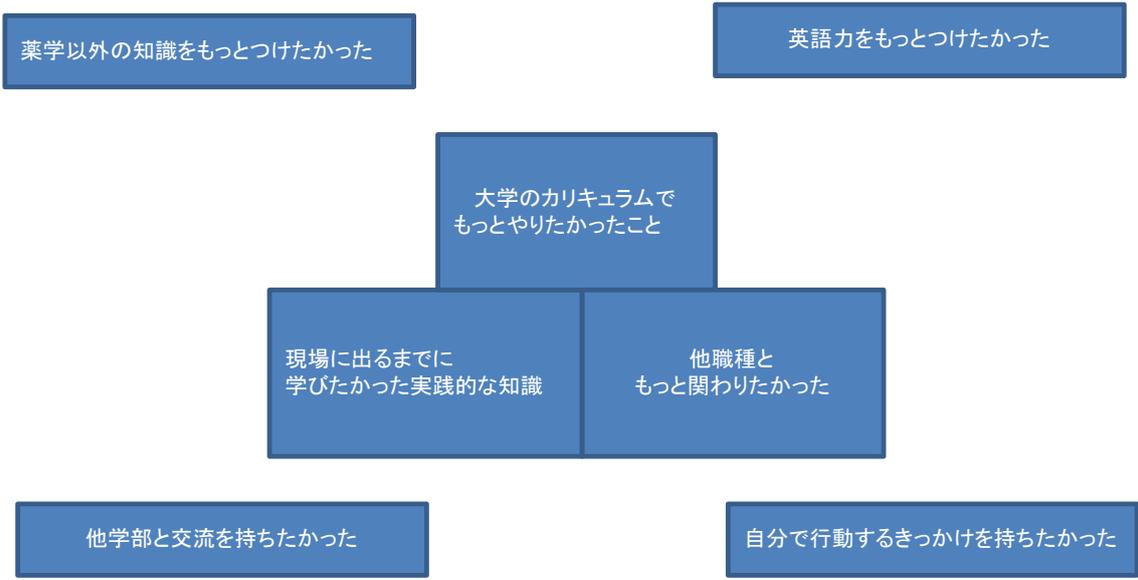
- ・ボランティア活動
- ・もっと時間を上手に使いたかった
- ・もっと活動的になりたかった
- ・自分の時間を持ちたかった
- ・講義内容の復習
- ・クラブ活動を通した縦のつながり
- ・もっとアルバイトがしたかった

■孤立

- ・早い時期からモチベーションを高く持ちたかった

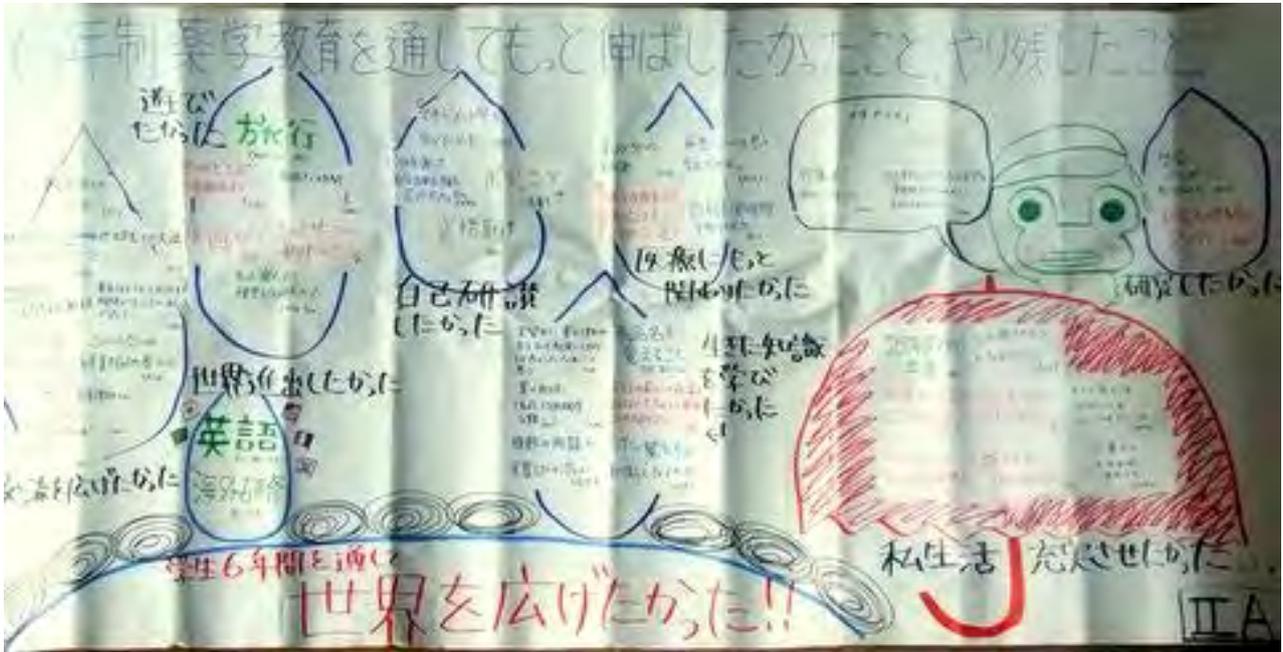


<関連図>



II A班

「6年制薬学教育を通してもっと伸ばしたかったこと、やり残したこと」について KJ 法を用いて意見を抽出し、整理した。以下に、我々の班の議論の経緯とプロダクトをまとめた。



画像：プロダクト

<議論の経緯>

私達の班では「6年制薬学教育を通してもっと伸ばしたかったこと、やり残したこと」について9つに意見を分類した。

まず多く挙げられたのは【交流を広げたかった】という意見であった。他大学の薬学部や薬学部以外の学生間での交流、薬剤師、ドクターやその他医療従事者、製薬会社で働く人といった社会人との交流、小学生に覚せい剤の危険性を伝える等といった地域住民との交流を広げることで人脈を広げたいという意見が挙げられた。

次に【生きた知識を学びたかった】【医療にもっと関わりたい】【自己研鑽したかった】【世界進出したかった】【研究をしたかった】といった学びや経験に関するやり残しの意見が多く挙げられた。知識的な面では、商品名を知っていれば実習中もスムーズに理解が得られたのではないだろうか？また、友人や家族から薬について質問される時は商品名で聞かれる場合が多く、商品名を知らないと直ぐに返答できず歯がゆさを感じることもあった、中でもドラッグストアで購入できる薬に対する質問が多く、OTC についてもっと学びたかった等の意見がでた。実習に関しては、実習施設によってシステムや取り扱う医薬品に差があるため、可能であれば複数の実習施設で実習を行い生きた知識を学びたいという意見も挙げられた。薬だけでなく診断・検査・病態学など、臨床に近い知識を学び医療に深く関わり、将来医師と対等に意見を言い合えるだけの知識をつけたかったという意見も挙げられた。

また、日本の医療だけにとらわれず、海外研修等を通じて世界の医療を知り、視野を広げていくべきだという意見や、医師と対等に議論するため、あるいは海外の患者さんに服薬指導できるようになるためにも英語をもっと学べば良かったといった医療の国際化に視点を置いた意見も出た。

【遊びたかった】【私生活を充実させたかった】という意見も数多く挙がった。遊びを含む様々な経験が豊かな人間をつくり、コミュニケーションの中身にも幅を広げることができて患者さんと良い関係をつくる手助けにもなるのではないかと結びつけた。

今回6年制薬学教育でもっと伸ばしたかったことや、やり残したことを挙げてみると多くのやり残しがあるという感想が挙がった。6年間の薬学教育を通じて、医療人として深い知識を養いたかったことはもちろん、一人の人間として世界観を広げたいという思いが強かったのではないかという結論に達した。

◆各カードに記載された意見を以下に示す。

【交流を広げたかった】

- ・他学部、他大学との交流
- ・サークルを作ればよかった
- ・社会人の方ともっと話をすればよかった。
- ・薬剤師さんともっとお話する時間をもっとほしかった
- ・地域の人達との触れあい
- ・こういう会への積極的参加
- ・ドクターや看護師さんとの交流

【生きた知識を学びたかった】

- ・複数の施設で実習をしたかった
- ・商品名を覚えておけばよかった
- ・テスト前の一夜漬け勉強ではなくちゃんと勉強しておけばよかった
- ・OTC薬をもっと勉強したかった
- ・薬の勉強をもっと勉強しておけばよかった

【医療にもっと関わりたかった】

- ・診断や検査や病気のことをもっと学びたかった
- ・薬以外の勉強
- ・病態についてもっと学びたかった
- ・他科の勉強内容を知りたかった

【自己研鑽したかった】

- ・ボランティア活動に参加したかった
- ・様々な資格を取得したかった
- ・マネジメント学を学びたかった
- ・バイトを通して自分自身の幅を広げたかった

【世界進出したかった】

- ・英吾をもっと学びたかった
- ・海外研修に参加したかった

【研究したかった】

- ・研究の時間が足りない
- ・学会に出たかった、研究の成果を形にしたかった

【遊びたかった】

- ・旅行
- ・夜遊び
- ・もっと遊んで視野を広げたかった
- ・もっとサークルやりたかった
- ・自由な時間がほしかった
- ・自分がどこまでお酒を飲めるか

【私生活を充実させたかった】

- ・本をたくさん読んでおけばよかった
- ・趣味を作ればよかった
- ・料理ができる女になりたかった
- ・日記をつけておけばよかった
- ・北海道マラソンに出場
- ・色んなスポーツをしとけばよかった
- ・一人暮らしをしたかった
- ・体を鍛えておけばよかった

【その他】

- ・6年生のカリキュラムを学、学部のたくさんの人に知ってほしかった
- ・お金がかかる
- ・感謝を形にしたかった

Ⅱ B 班

《議論の経緯》

まずはじめに、KJ法で挙げたカードを 1) 日常生活に関するもの、2) 大学内での生活に関するもの、3) 1)および2)の両方に当てはまるもの、の大きく3つに分類した。

1)の日常生活における反省点に関しては、もっと視野を広げるべく時間を有効に使えば良かったという結論に至った。2)の大学内での生活に関するものでは、実習内容に関する要望が多く挙げられた。また、研究期間が不十分だったという意見もあり、研究を通して発表・質問・問題解決能力をもっと高めたかったという声が聞かれた。2)に関しては、カリキュラム等の関係でやり残す形に終わってしまったものも多く、改善が必要だと感じた。3)に関しては、とにかく自分の勉強不足・他人との交流不足を悔やむ声が多かったように思う。

第1部で挙げた成長した点との関連を考えると、これらの課題は成長したからこそ見えてきたものであった。例えば、コミュニケーション能力が身に付いたからこそさらなる向上の為にもっと人との交流をすべきだったと気づけたし、薬剤師の仕事内容を理解したからこそ、自分の知識不足・勉強不足を実感したのであり、事前にもっと勉強しておくことで、実習等でより深い知識を得られたのではないかと気づくことができた。

《カードの分類》 (◆：島の名前)

1) 日常生活

◆もっと視野を広げたかった

- ・接客業等の色々なアルバイト
- ・一人旅、海外旅行
- ・読書

◆その他

- ・奨励賞をとりたかった
- ・「薬学部やるな！」といわれるようになりたかった

2) 大学内

◆実習への要望

- ・他職種（ドクター、コメディカル）の話を聞きたい
- ・在宅医療の体験がしたい
- ・服薬指導件数が不十分
- ・実習期間や場所を選択したい
- ・地域に根付く病院、薬局での実習をしたい
- ・もっと現場で実習をしたかった

ⅡC班

<議論の経緯>

本テーマに関して KJ 法を用いて、各メンバーの意見を整理した。様々なカードが出されたが、我々はまず「視野を広げる」というカードに注目した。その理由として、我々一期生が 5 年次の病院・薬局実習を通して、薬剤師として最低限必要なスキルが身につけていないことを実感すると同時に、薬学には直接関連がないものの一人の人間として足りない面も多いということに気づかされたためである。本カードはその他の全てのカードを総括しており、本プロダクトの根底に存在するキーワードに選ばれた。

次に、「視野を広げる」以外のカードを以下の 2 種類に大別した。

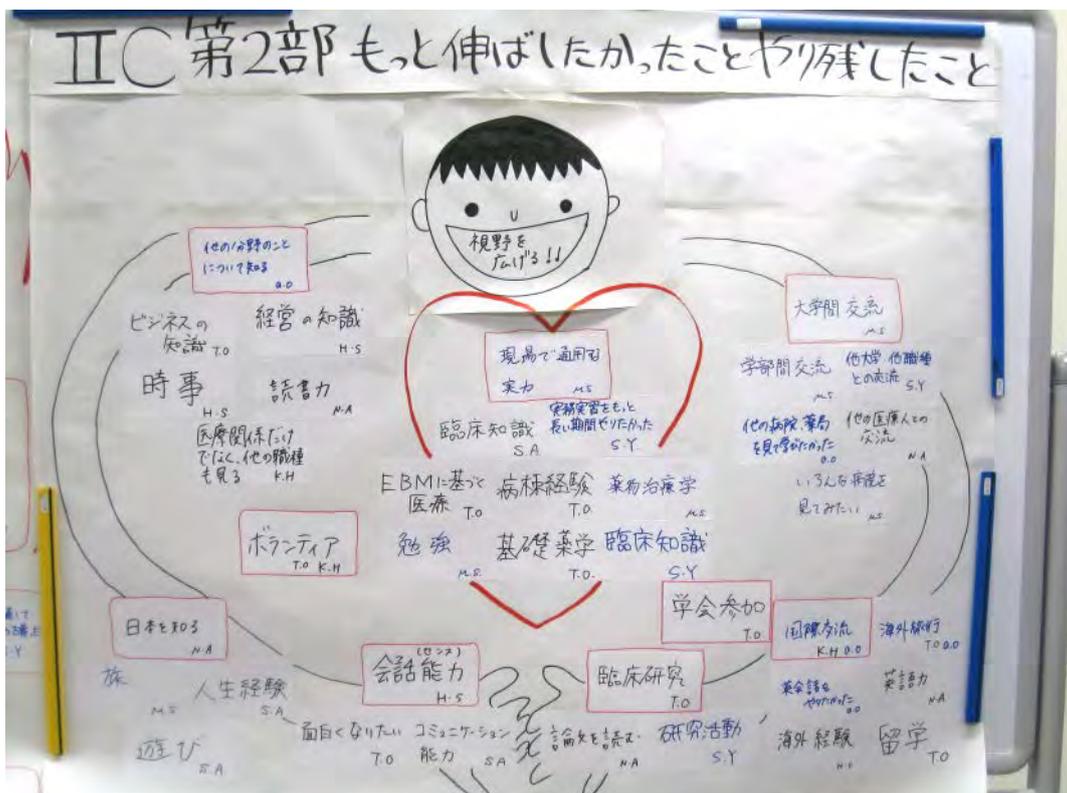
①臨床現場で通用する実力

②薬剤師としてではなく、一個人として足りないと感じたこと

上述したように、②を満たすことも重要であるという意見が多かった。しかしながら、将来臨床現場で活躍する薬剤師として働く上では、①のスキルを身につけることが最優先の課題であり、②のスキルは補足的に身につけるべきである、という見解でメンバーの意見は一致した。こうした議論のもと、プロダクトを作成した。

<プロダクトについて>

プロダクトの構造としては、最重要であると位置づけられた「臨床現場で通用する実力」を中心に、その他身につけたかった項目が含まれる島を周囲に配置した。プロダクトの絵は、やりたいことが多すぎて抱えきれないという思いから、両腕を使っても抱えきれない様子を表現している。



以下に、各島のカードとその解説を示す。

(1) 視野を広げる

| カード | 解説 |
|--------|---|
| 視野を広げる | <ul style="list-style-type: none"> ・薬剤師として必要な薬学のスキルに加えて、日本や世界ではどのようなことが起こっているのか等薬剤師の枠を越えて様々な分野に適応できる能力・知識が必要であるため。 |

(2) 現場で通用する実力

| カード | 解説 |
|-----------------|---|
| 臨床知識 | <ul style="list-style-type: none"> ・座学では学べないこともたくさんあった。 |
| 薬物治療学 | <ul style="list-style-type: none"> ・患者様の治療のためには必須なため、薬剤師として知識の幅を増やし続けることは必須。 |
| 基礎薬学 | <ul style="list-style-type: none"> ・臨床薬学の知識だけでは、薬剤師の専門性が活かせない。医薬品を構造式、物性からわかっていることが前提にあつてこそ、他の医療従事者からも信頼されるのではないか。 ・基礎と臨床をバランスよく学び、かつそれらを結びつけて考えることが必要。 |
| 実習をもっと長期間やりたかった | <ul style="list-style-type: none"> ・他の病棟も経験してみたかった。 ・病棟実習中に東日本大震災が起これ、残念ながら実習が中断してしまったため、他の学生よりも病棟経験が少ない。 ・もっと多くの患者様とふれあい、症例を経験したかった。 |
| 病棟経験 | |
| EBMに基づく医療 | <ul style="list-style-type: none"> ・患者様になぜその医薬品が適用されるのか、その根拠を知ることが重要だと気づいた。 ・患者様にもっとも適した情報を収集・選択することの大変さを知った。 |
| 勉強 | <ul style="list-style-type: none"> ・実習を通して、勉強をすることが好きだと再認識できた。 ・薬剤師として働いていく上で、自己研鑽し続けることは重要である。 |

(3) 学会参加

| カード | 解説 |
|------|--|
| 学会参加 | <ul style="list-style-type: none"> ・臨床現場で活躍する薬剤師の先生方を相手に緊張することなくプレゼンできる能力をつけたかった。 ・どの病院の先生が、どのような研究をされているのか興味があった。 ・他の病院の先生方と関わるきっかけが欲しかった。 |

(4) 大学間交流

この島に関しては意見が多く、活発な議論が展開された。

特に、地域によって大学間の交流の有無に格差がある事実が明らかになった。

<例>

- ・K大学…学内には医療系の学部が全て揃っているため、部活やサークルを通じた繋がりだけではなく、「チーム医療演習」といったカリキュラムも組み込まれている。加えて、関東圏内に薬科大学が多く、他大の薬学生と交流しやすい。
- ・T大学…同じ大学の分校が近くにあるにも関わらず、ほとんど交流がなかった。就職活動を始めて、やっと他大の薬学生がどのような教育を受けてきたかを知った。
- S大学…県内に薬科系大学が一つしかなく、地域的にも他大の薬学生と交流しにくい。また、実習でもほとんど交流する機会がなかった。
- N大学…薬科系大学が近くになく、大学間交流が難しい。もっと同じ志を持っている情熱のある仲間と意見交換したかった。互いに切磋琢磨したかった。

| カード | 解説 |
|--------------------------|---|
| 学部間交流 | ・他大学の薬学生がどのような教育を受けているのか、知らない部分が非常に多かった。 |
| 他大学・他職種との交流 他の医療人との交流 | ・薬学以外の医療系大学に通う学生から見た薬剤師像を知りたかった。 ・他大学との交流を通して、自己を振り返ることが出来、互いに切磋琢磨できる。 ・薬剤師は他職種からどのようなことを求められているのかをもっと知りたかった。 |
| 他の病院・薬局を見て 学びたかった | ・実習先の病院・薬局とは別の医療機関で見学や実習をやってみたかった。 |
| いろんな病院を 見てみたい | ・1つの薬局だけではなく、異なる病院(医院)の処方もいろいろ見てみたく2~3つの薬局で実習してみたかった。 ・様々な医療機関を見ることで、視野を広げることにも繋がると思う。 ・多くの症例に触れることが出来、そこから多くのことを学び取ることが出来る。 ・病院の規模、地域での役割の違う病院、在宅医療などを行っている薬局でも実習したかった。 |

(5) 国際交流

| カード | 解説 |
|------------|--|
| 留学 | ・海外の薬剤師の仕事や医療制度について、現地で学びたかった。 |
| 海外経験 | ・海外の文化に触れてみたかった。 |
| 海外旅行 | ・海外に行くことで日本のよさを改めて知ることができると感じたため。 ・今後はグローバル化が進んでいくので、海外の状況把握もこれからは重要なことだと思う。 |
| 英会話をやりたかった | ・将来海外での研修があった時のためにも、身につけたい。 |
| 英会話 | ・大学病院では、海外の患者様の治療に携わることもあるため、英会話能力は最低限必要である。 ・今後はどのような場面においても英語力は最重要課題となっていくと思われるので、身に付けるべきことだと大学生活及び実習を通して感じた。 |

(6) 臨床研究

| カード | 解説 |
|-------|---|
| 研究活動 | ・将来、病院薬剤師として臨床研究を並行して行うための基礎を築きたかった。 |
| 論文を読む | ・実習を経験することで改めて海外の最新の医療を知ることの重要性を感じた。医師に対して処方提案などするためには日ごろから最新の論文を読む必要性を感じた。 |

(7) 会話能力

| カード | 解説 |
|-------------|--|
| コミュニケーション能力 | ・患者様から知りたい情報を得るための1つの手段としてもっと上達させたい。 ・他の医療従事者や患者様との信頼構築のため。 |
| 面白くなりたい | ・患者様との信頼関係を構築するためにも必要である。 |

(8) 日本を知る

| カード | 解説 |
|------|---|
| 旅 | ・イギリスでの海外研修の際、日本の文化について尋ねられて、答えられなかった。 |
| 人生経験 | ・医療とは関係のない分野の話で、信頼関係が構築されることもあることを知った。そのため、国内の文化を知ることが非常に大切だと感じた。 |
| 遊び | |

(9) 他の分野のことについて知る

| カード | 解説 |
|-------------------|--|
| ビジネスの知識 | ・将来病院の薬剤部の管理職になった際に、求められる能力だから。 ・病院のコスト削減に貢献できることは、病院内のスタッフからの評価の向上に繋がるから。 ・薬剤師の立場から医療費削減に貢献できることは、診療報酬・調剤報酬の観点で薬剤師の仕事を評価する上で重要なことである。 |
| 経営の知識 | |
| 時事 | ・医療を取り巻く政治の情報を仕入れることは、社会人になる上では必須条件であるため。 ・医療は常に変化するため、最先端の知識を吸収し続ける必要がある。 |
| 読書力 | ・色んな知識を吸収しておくことが、コミュニケーションの向上にも繋がる。 |
| 医療関係だけでなく、他の職種も見る | ・医療関係以外の職種に目を向けておくと、患者様の背景を理解しやすくなり、信頼関係の構築に繋がるのではないかと。 |

(10) ボランティア

| カード | 解説 |
|--------|---|
| ボランティア | ・学生という身分ではあるが、可能な範囲で被災された方々に貢献したかった。 ・被災地での活動は今後の糧になると感じたため。 |

Ⅱ D班

KJ 法によって 6 年制教育を通じてもっと伸ばしたかったこと・やり残したことについて話し合ったところ、大きく「学習面」と「課外活動面」とに分けられた。KJ 法を通して出された意見と各島についてまとめる。

★ 課外活動面

☆ ボランティア

- ・ ペットボトルキャップをワクチンと交換する運動
- ・ 被災地支援（トラックによる物資運送など）
- ・ 地域貢献

☆ 部活・サークル

- ・ 野球部に入っておけばよかった
- ・ サークルに入っておけばよかった

☆ つながり

- ・ 縦、横のつながりをもちたかった
- ・ 他大学、他学部との交流をとりたかった

☆ 人を楽しませたかった

- ・ 学校を盛り上げたかった
- ・ 俺も学校を盛り上げたかった

☆ 娯楽

- ・ 食べ歩き
- ・ USJ
- ・ 北海道観光
- ・ 自分の時間を持ちたかった
- ・ スキューバダイビング

また、島に分類できないかった意見として以下のようなものが挙げられた

- ・ 忍耐力
- ・ 就職するにあたっての会社内情などの知識

★ 学習面

☆ 実習関連

- ・ 病院実習、特に服薬指導
- ・ 複数の実習施設の比較（施設間の差が大きかったため）

- ・ 実習後の教育（実習生同士、担当教員、指導薬剤師などを交えた話し合いの場を持ち、実習のフィードバックを行いたかった）

☆ 6年生の薬学教育としての勉強

- ・ 6年制っぽい勉強
- ・ 国家試験以外の勉強
- ・ 症例研究（ディスカッション）
- ・ BLS の勉強
- ・ 実用的な勉強
- ・ 新しい情報に敏感になること
- ・ 処方意図を読み取る力がつけること

また、6年制の薬学教育としての勉強自体だけでなく

- ・ 知識をつなげる
- ・ 勉強したことを実践につなげる
- ・ 知識のアウトプット

といった意見も出された。

これらの意見は6年制の薬学教育としての勉強の島へは分類しなかったが、関連のある意見として位置づけた。

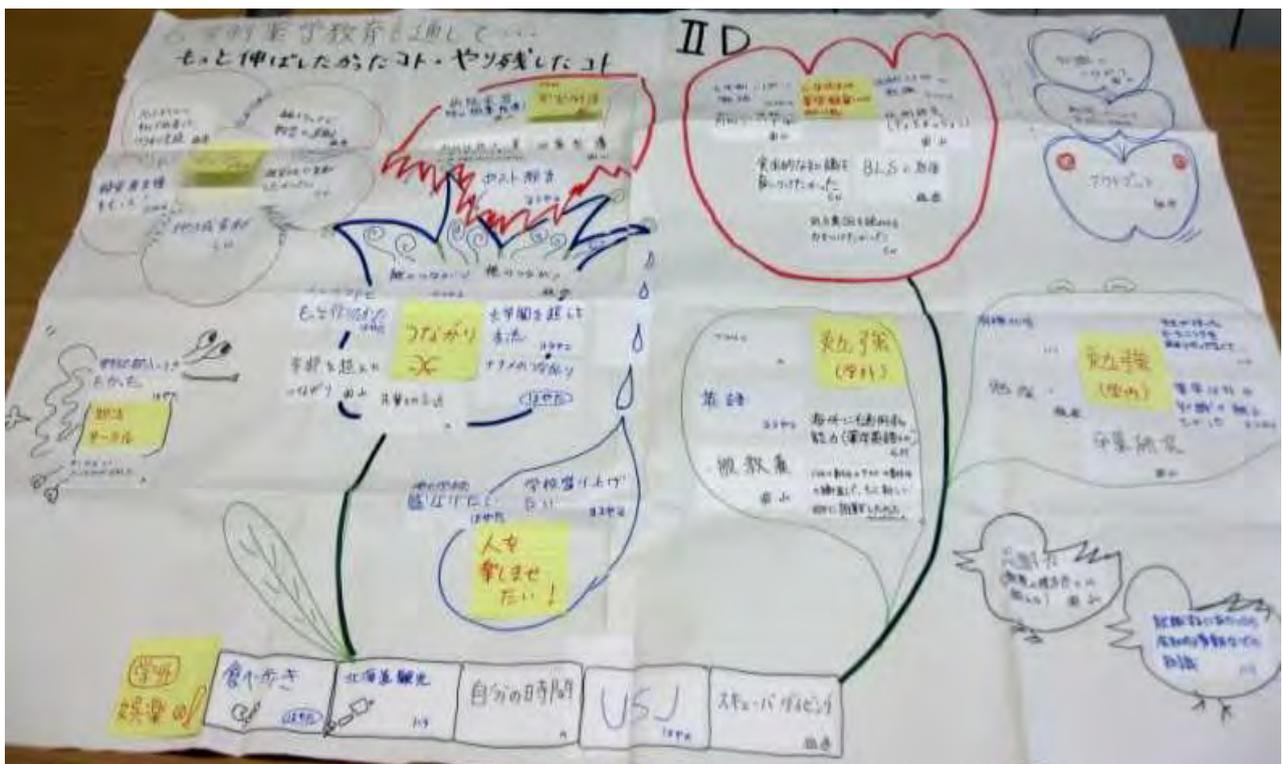
☆ 勉強（学内）

- ・ 薬学以外の勉強
- ・ e-ラーニング（先生が作ったもの）
- ・ 卒業研究

☆ 勉強（学外）

- ・ TOEIC、英語
- ・ 一般教養
- ・ テスト⇒夏休み⇒テスト⇒春休み⇒……だったので、何か新しいことに挑戦したかった

★ プロダクト



課外活動の面では意外に娯楽でやり残したことがたくさん出されたが、それだけ薬学部だと自分のやりたいことに充てる時間が取れないことなのだと実感した。もちろん遊んでばかりではいけないが、勉強やその他の活動をするにあたって息を抜くことは必要であり、花を育てる際の肥料のような役割をしているということになった。(そこでプロダクトでは娯楽から花が咲いている図にまとめることとした。)

また、ボランティアや部活・サークルなどの課外活動を経験することでつながりが作られ、こうした活動を通して薬剤師として必要となるコミュニケーション能力も養えるのではないかと話し合われた。メンバーの中には実際に先日の東北地震でボランティア活動をおこなった者がおり、具体的な活動内容の話も聞け、有意義な SGD とすることができた。

勉強面では 6 年制になったにも関わらず、6 年制っぽさが感じられる授業が少ないと多くのメンバーが感じていることが印象的だった。『4 年制から 6 年制に伸びた分は、国家試験の勉強のためではない。もっと臨床に根ざした分野の勉強についてしっかりと学びたかった』といったような高いモチベーションをもった意見が出されたことも印象深かった。しかし、中には症例検討会のような授業を熱心におこなっている学校や、チーム（医学部・看護学部・薬学部・その他の学部）で症例研究をするチーム医療を模擬体験できるプログラムを行って大学などもあり、各大学の取り組みについて知ることができた。

学外での勉強に関しては、薬学以外の学習を通して社会生活へ向けてのスキルアップについて話し合うことができた。中でも英語に関しては、薬剤師として働きたいメンバー、企業に就職して働きたいメンバー、それぞれの立場のメンバーがその必要性を感じていた。

以上のように同じ過程を経てきた同期の中でも異なった経験をつんでおり、大学間をまたいだ話し合いの場をもてとても有意義な時間を過ごすことができた。このような場を与えていただき、ありがとうございました。

第三部

「今後の6年制薬学教育に望むこと、
生涯学習に望むこと」



第三部作業説明

日本薬学会第1回全国学生ワークショップ
「6年制一階生として薬学教育に望むこと」
平成23年8月4日(木)大阪大学中之島センター

第三部

「今後の6年制薬学教育に望むこと、
生涯学習に望むこと」

第一部・第二部の復習

テーマ

- 6年制薬学教育を通じて成長したこと。
- 6年制薬学教育を通して、もっと伸ばしたかったこと、やり残したこと。

様々な意見

KJ法

情報を徹底して収集

↓

語るところを聞く

↓

情報の整理

KJ法による情報の抽出と整理

The diagram illustrates the KJ method where information is organized into clusters. Each cluster is represented by a blue circle containing several cards with colored dots (red, blue, or green). Each cluster is labeled with a name tag (名札). One card, located at the bottom left, is labeled as an 'isolated card' (孤独なカード) because it does not belong to any of the clusters.

さて、第三部では

過去と現在

島の名札 = 整理された情報

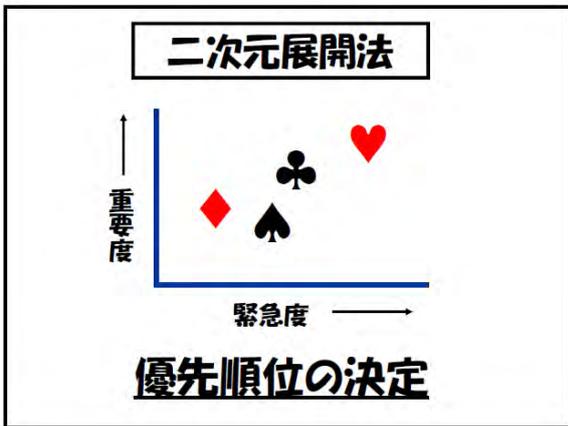
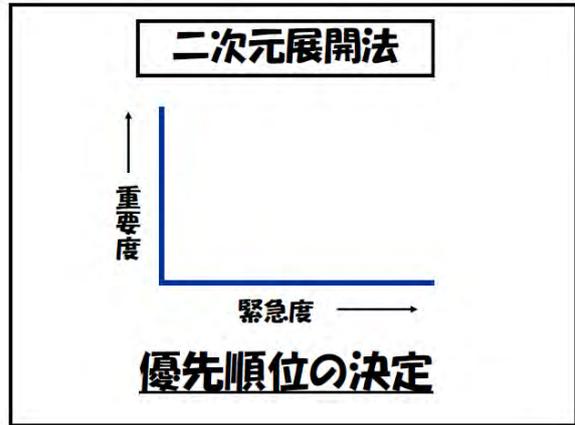
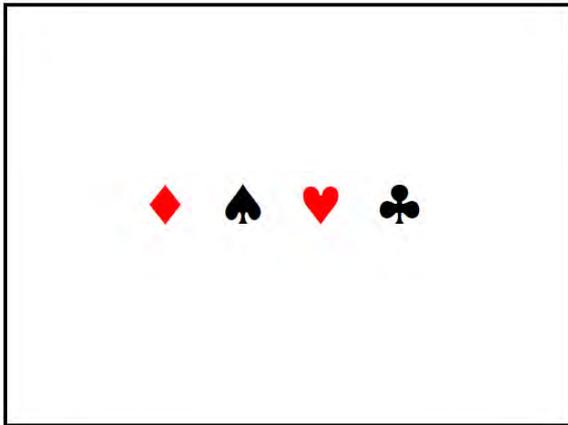
↓

未来

これからどうする?
行動・提案

アクションプラン作成のプロセス

1. 情報発信の優先順位決定
2. 各課題についての方策の検討



これからの作業

1. KJ法で抽出された 問題点 = 鳥の名札をカードに転記
2. 二次元展開
 - 1. 2を併せて15分程度で行う
3. 各課題についての方策の検討 (2P合同、パ7ポで発表)

これからの作業

- 第一部・第二部を踏まえて討議し、提案しましょう。
 - 6年制卒の一期生として取り組んでいきたいこと
 - 先輩、リーダー、ロールモデル、先駆者として取り組みたいと思うことを、箇条書きに
 - 今後の6年制薬学教育に望むこと、生涯学習に望むこと
 - 大学教員へ、先輩へ、社会などへ、各々を箇条書きに

これからの作業

討議は、ホワイトボードで

発表は、パ7ポで(2P会場)

**第一部・第二部のまとめ：
島の名札を紹介(代表的なもの)**

第一部

- ○○○…
- ○○○…
- ……
- ……

第二部

- △△△…
- △△△…
- ……
- ……

**6年制卒の一期生として
取り組んでいきたいこと**

- ○○○
- △△△
- □□□
- ……
- **自分たちが、先輩、リーダー、ロールモデル、先駆者として取り組みたいと思うことを、箇条書きに**

**今後の6年制薬学教育に望むこと、
生涯学習に望むこと**

- ○○○
- △△△
- □□□
- ……
- **より大きな視野から、
大学教員・指導者、後輩、社会などへの
メッセージを箇条書きに**

これからの予定

14:10 SGD(70分)

15:20 2P会場(10F)へ移動・休憩
(荷物をすべて持って)

15:30 発表と総合討論(80分)

発表 5分、質疑 3分(64分)

総合討論 15分

発表順: IC、IIC、ID、IID、IA、IIA、IB、IIB

I A班

KJ法は用いずにブレインストーミングにより討論の導入を行い、ある意見に対して他の人が意見や感想をぶつける形式で内容を膨らませた。自由に論議を行える環境にした事で、どういう意図で意見を述べているのか、他の人がどのような考えを持っているのか理解することができ、より深いディスカッションができた。

6年制卒の1期生として取り組んでいきたいこと

<医療現場において>

◆ 薬剤師としての専門性を高める

- ・ 認定薬剤師、専門薬剤師の資格を取得する（感染制御、がん、漢方、栄養 etc.）
- ・ 薬学に留まらない幅広い知識（食生活との関連も含めてアドバイスできる薬剤師）
→薬剤師の地位向上につなげたい。必要とされる職種へ！

◆ 薬剤師の仕事、必要性を明確にする

- ・ 専門性を活かした服薬指導で患者さんへのアピール（相互作用、栄養関連 etc.）
- ・ 他の医療スタッフとの連携強化（カルテの情報共有 etc.）
- ・ 薬剤師側から積極的に医療に参加（患者さんの検査値など考慮した処方提案 etc.）

→患者さんや他の医療スタッフに薬剤師という職を認識されるために病棟活動を積極的に行い、数をこなすだけでなく、質の高い医療を供給することが必要！

調剤するだけ、薬を渡すだけという印象を自ら変えていく！

→職能を活かすことで点を稼げるような調剤報酬点数の改正、薬剤師領域の加点
薬剤師の増員へ繋ぐ！

◆ チーム医療への参加

- ・ 今はまだ病院によってチーム医療における薬剤師の地位に差がある
→専門性を活かすことで他の医療スタッフからの信頼をあげる！

（Ex. 医師から最適な処方を求められる）

◆ 研究ができる、論文が書ける薬剤師

- ・ 研究生活において多角的な物事の捉え方、分析能力、忍耐・精神力が養われた
- ・ 大学病院などにおいて臨床研究がしたい
- ・ 学会発表を積極的に行いたい

→4年制卒（旧課程）薬剤師との差別化を図る！

薬剤師は仕事内容や必要性を他の医療スタッフや患者さんに伝えきれていない部分があるように感じる。そこで、薬剤師の職能を理解して必要としてもらうために、まずは自ら専門性を高めることに尽力する必要があると考える。その専門性を活かすことで薬剤師の職能をアピールし、地位向上（必要と

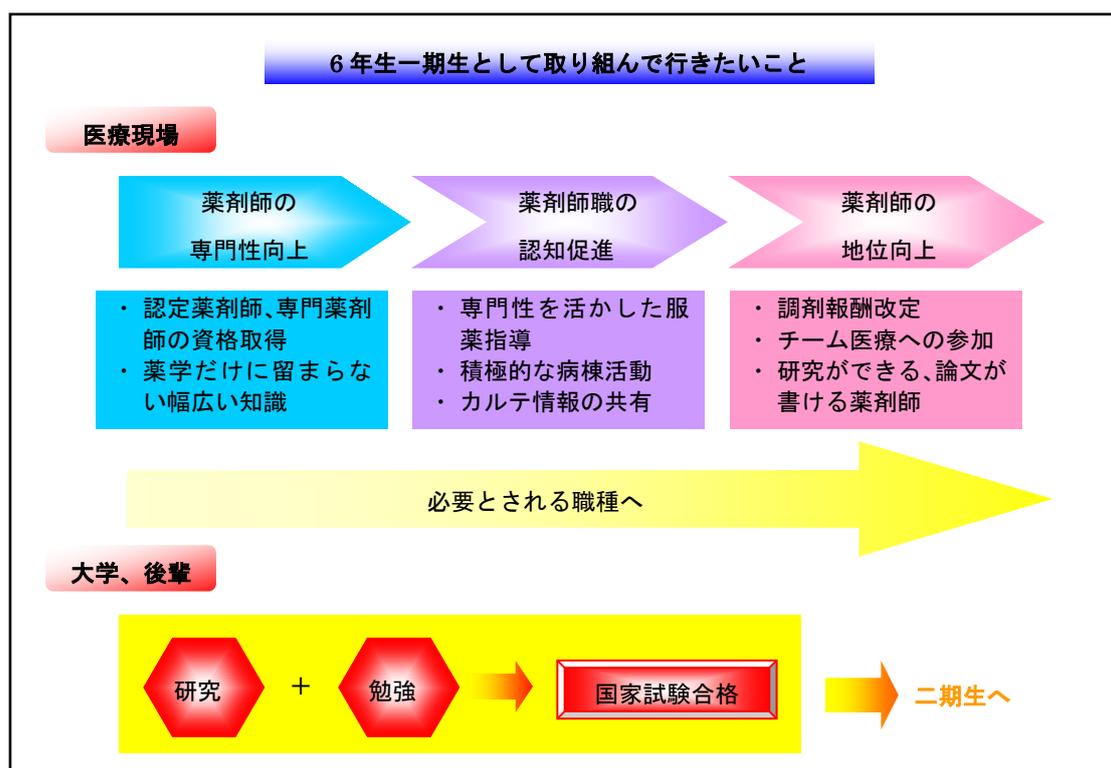
される存在)につなげていきたい。このことが結果的に調剤報酬の改定、薬剤師の増員に結びつけば望ましい。また、旧課程と比較して研究生活が長いことを活かし、研究ができる・論文が書ける薬剤師を目指す。現在、臨床研究を踏まえた論文における医師の存在は大きい様に感じるが、そこに薬剤師も積極的に関与していくことで、更なる医療の発展に貢献したい。それは、長期実務実習を体験し、臨床に基づいた視点を持つ6年制卒だからこそ早期に取り組めることであると考えている。

<大学、後輩に対して>

◆ 手本となる姿を示したい

- ・ 最終学年である6年目を国家試験対策だけの1年にしたくない
- ・ 研究もしっかり行ったうえで、国家試験に合格する
→やればできる姿を後輩に見せる、前例をつくることで励みにしてもらいたい！
→質の高い6年制薬学生を輩出するきっかけにしたい！

前例がないために、私達の進んだ道の大筋が後輩の進む道になるだろう。したがって、私達が学業や研究に対し妥協した姿を見せれば、後輩もその程度で良いと捉えてしまう可能性が高い。そうならないためにも全力で取り組む姿勢を示し、6年制教育に存在している様々な可能性を後輩に残したい。



今後の6年制薬学教育に望むこと、生涯学習に望むこと

<教育に関して>

- ◆ 6年制になった意味をもっと明確化すべき
 - ・ 6年目が国家試験対策だけの年では何のための6年制か納得できない
 - ・ 低学年の講義からもっと国家試験を意識した内容を盛り込むことはできないのか
 - ・ 国家試験合格は当たり前のことであるべき
- ◆ もっと研究がしたい
 - ・ 大学によって研究できる期間に差がある
 - ・ 希望者には卒業発表以降も研究する機会を与えてほしい
 - ・ 研究と国家試験対策は両立すべき
 - ・ 旧課程との差別化にもつながるはず
- ◆ 1期生として感じたこと、考えたことを伝える機会がほしい
 - ・ 今回のような話し合いが行われていることを同学年すら知らないのは問題
 - ・ せっかく話し合っても伝える機会がなければ意味がない
 - ・ 実務実習についての報告を後輩にすることで後輩のモチベーションをあげたい
 - ・ 後輩の不安解消にもつながるはず

現状で感じられる旧課程と新課程の明確な違いは長期実務実習の有無に留まる。実習期間以外が国家試験対策と研究だけでは6年制の意義はあまり感じられない。また、国家試験対策に重きを置き過ぎれば、国家試験に合格できればそれで良いという考え方を学生に持たせかねない。質の高い薬剤師を生み出すためにも、国家試験合格を最大限の目標にするのではなく、当たり前クリアすべき事として捉えたい。そのために、低学年時から国家試験を意識した講義を取り入れてはどうかという意見が出た。

また、研究に関しては学生間でモチベーションの差は大きいだろうが、6年制卒の大きな特徴と言える部分であるためなおざりにすべきではないと考える。研究職を希望する学生もいるため、そういった学生には卒業発表後も研究を続ける機会を与えてほしい。研究と国家試験勉強を両立するためにも、低学年から国家試験を意識した授業は意味あるものとなるのではないだろうか。

さらに、後輩にも同様にこのような考える機会を与えてほしいと思う。私達の進んだ道をそのまま辿るのではなく後輩自らにも考えてもらいたい。そして、大学側にはその意見に耳を傾けていただき、さらに良い方向へと導く手助けをしていただきたいと思う。そのためにも、まずは私達が考えたことや感じたことを後輩に伝える場を大学側には設けていただきたい。

<実習に関して>

- ◆ 実習受け入れ先の決め方
 - ・ 大学によって決め方が統一されていない（希望調査の有無 etc.）
 - ・ どのようにして決めたか学生に説明がない大学がある
 - ・ 統一されていないと学生の不平不満を生む原因になる→モチベーション低下

◆ 実習内容の統一

- ・ 学校薬剤師、漢方、OTC 研修、在宅医療が学べない実習先がある
- ・ 特に薬局では差が激しい
- ・ 全員がコアカリキュラムを満たせるようにしてほしい
- ・ 都道府県の薬剤師会、病院薬剤師会で差が出ないようにしてほしい

→学べない内容がある場合は特別研修のような形で他施設へ学びにいけるように地域や薬剤師会で連携をとってほしい

◆ +αの実習

- ・ 最低限のレベル（コアカリキュラム）は足並みをそろえてほしいが、それ以上は何もしないというのはモチベーションの高い学生にとってはもったいない
- ・ 1週間ひたすら調剤というようにマニュアルにこだわらず、早めに習得できた学生は先に進ませてあげてほしい
- ・ 複数の実習先で経験したい

→ボーダーラインを下げることは質の低下に繋がるのでやめてほしいが、余裕のある学生には臨機応変に対応していただきたい

◆ 実習中のフォロー

- ・ 指導薬剤師によってはほったらかしにされることがある
- ・ 大学側は受け入れ先に一任しすぎではないか
- ・ 研究室の教員によって差がある
- ・ 学生同士で意見交換する場がほしい（刺激になる→モチベーションアップ）

→ふるさと実習を行う学生も多く、実習中に在籍している大学に集まるのは困難実習エリアごとに集まることはできないか

近隣の大学や薬剤師会などでそういう場を主催できないか

◆ 実習後のフォロー

- ・ 実習内容を定着させるような授業がほしい
- ・ 実習後に臨床系の授業があれば理解も深まるし、楽しく学べそう
- ・ 実習後に空白の時間があつた

→実習後にそのまま研究に戻るのではなく、実習内容をフィードバックする機会を

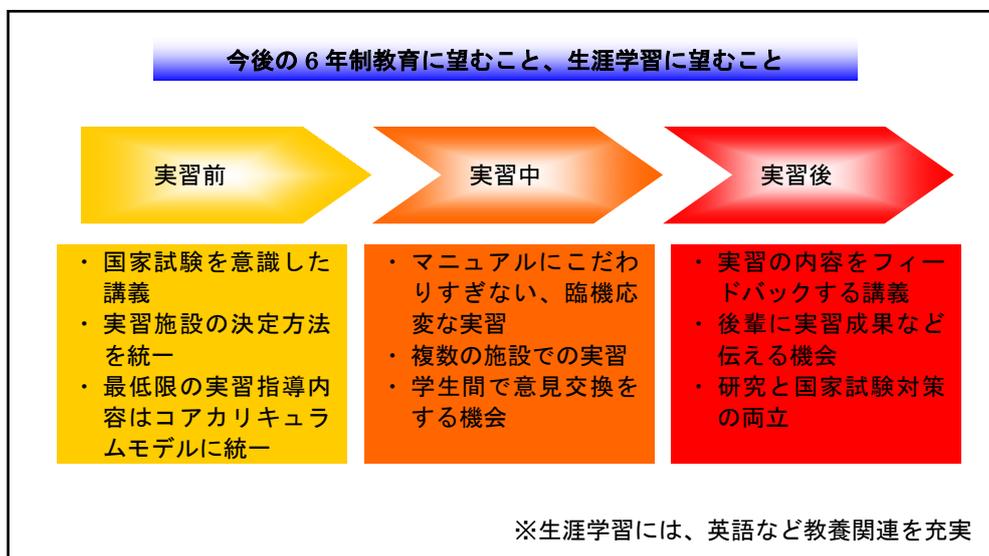
→医療薬学分野の更なる理解を望める

実習における1番の問題点は受け入れ先によって実習内容に差があることと感じる。それにも関わらず、国家試験では実習内容が重視される。最低限、コアカリキュラムは満たすことができるように薬剤師会や受け入れ先には連携を取っていただきたい。また、実習先の決め方も大学により大きく異なっている。大学側の一存で決められてしまう場合もあれば、成績順の希望制という大学もあった。どの決め方がベストかという結論には至らなかった（希望制の場合、希望が通らなかった学生はモチベーション

を維持できるのか etc.) が、大学側には事前にきちんと説明していただきたい。

また、実習中は環境が閉鎖的になる所も多々あるため、複数の実習先で経験したい、他の学生と意見交換する場がほしいとの意見がでた。実習先の雰囲気や経験は将来の就職希望にも影響を与えるため、複数の実習先で経験することは視野を広く持つために有用であると考え。そして、実習中に他の学生と意見交換する場を設けることで、他の実習先の進行具合や実習に対する学生の姿勢を知ることができ、刺激になるのではないかと思う。

実習後に関しては、どの大学もそのまま研究室に戻るパターンが多く、実習内容のフィードバックは行われていないようだった。せっかく学んだことを大学内で共有すること、後輩に伝えることも必要ではないだろうか。また、実習後は臨床に基づいた考えが養われているため、それを失わないためにも決まりきった国家試験対策ではなく、知識を応用し定着させるような授業（処方解析 etc.）があれば、6年制ならではの色も強まるのではないかと感じる。



◆6年制卒の一期生として取り組んでいきたいこと

6年制薬学部先輩、リーダー、ロールモデル、先駆者として、各々が今後どのようなことに取り組んでいきたいと考えているかを意見として出しました。各々の考えは、第一部「6年制薬学教育を通して成長したこと」、第二部「6年制薬学教育を通してもっと伸ばしたかったこと、やり残したこと」をふまえた上でのものとなりました。議論は、①残りの学生生活の間に取り組んでいきたいこと、②今後の人生において取り組んでいきたいことの2つに分けて進行されました。

以下、プロダクトと議論の経緯を示します。

①残りの学生生活の間に取り組んでいきたいこと

- ・ボランティア活動に参加→参加しやすいような環境にしていきたい。

薬学生は医学生や看護学生に比べボランティアに参加する機会、実際の参加共に少ないのではないかと、という意見から、先の震災に関連して、一般的な学生ボランティアとしてではなく、薬学生として出来ることはないだろうかという議論に至りました。薬学生として震災の現場で力になれることは少ないかもしれませんが、他にI型糖尿病の小児患者に対するボランティア活動など、様々なボランティア活動があるにも関わらず、そこに参加している薬学生はほとんどいないという状況であると確認できました。私たちは、薬学部の6年制移行における利点として、従来よりも2年間長く大学に在学し、長期実務実習において臨床経験を積むことができることに加え、ボランティア活動にも多く参加できることが挙げられるのではないかと考えます。更に、ボランティア活動に関する情報がより得やすいような環境にしていきたい、という意見も挙がりました。

②今後の人生において取り組んでいきたいこと

- ・仕事に責任をもちたい。

「結婚退職」や「ドラッグストアのパートタイマー」という薬剤師の働き方を、私たちは疑問視しました。働き方には様々な働き方があり、医療現場の第一線で活躍する薬剤師も存在します。薬学教育を6年制とすることにより、薬剤師の活躍の場をより一層広げるのであれば、仕事に対する責任感が芽生えない限り、従来の薬剤師よりレベルアップした薬剤師は育たないのではないかと、という意見が出ました。今後は病院に限らず、地域医療における薬剤師のレベルアップも求められると考えます。病院、調剤薬局、ドラッグストアなど、勤務先に関わらず、全ての薬剤師のレベルアップなしには、6年制移行による成果は現れないのではないかと、という意見に至りました。全ての薬剤師が仕事に対し責任や誇りをもつことにより、医療現場における薬剤師の活躍の場は多いに広がると考えます。

- ・「極(究)める」ことを極めたい。そして、薬剤師の仕事の幅を広げたい。

卒業研究や実務実習での取り組みにおいて、分からないことをどこまでも追究しようとする自己啓発は、何かを極(究)める力になり、足りないものを見つけ、補おうとする力になっていくと考えます。また、「薬剤師の地位向上」とはどのようなことか、という議論に至りました。私たちにとっての「薬剤師の地位向上」とは、先にも挙げたとおり、全ての薬剤師が責任感や誇りをもつことにより初めて達成されるものであり、1人の特に秀でた薬剤師の存在で達成されるものではないと考えます。薬剤

師の仕事内容が多岐に渡るからこそ、個々の薬剤師が其々の領域・現場で「極まった存在」になることが重要であるという意見になりました。例として、「介護のできる薬剤師」になるのではなく、「薬剤師が介護の領域で活躍し、更にそこに薬学の知識が発揮される」と挙げられるように、薬剤師の職能を広げるために、逆に薬剤師の力を補助的に使うことも有効なのではないかと考えます。

- **社会にもっと知らせたい。どうすれば、知らせられるか。**

先の震災時、各報道で取り上げられた医療関係者は主に医師、看護師でした。震災の現場における薬剤師の活躍が報道されたこともありましたが、一般的に、社会における薬剤師の認知度はまだまだ低いと考えます。そこで、6年制卒業薬剤師が誕生する今後は、各々が責任をもって様々な業界で活躍することにより、社会における薬剤師の認知度を上げていきたいという結論に至りました。

- **自分たちの成長は後輩に還元していきたい。**

具体的な意見として、今回のワークショップの報告会を各大学で行う、卒業後に出身大学で後輩のための勉強会を開催する、また、病院・薬局薬剤師を進路として選択した場合はいずれ指導薬剤師として後輩の指導にあたるなどが挙げられました。6年制教育の更なる発展のためにも、6年制卒業薬剤師による6年制薬学生の育成が必要であると考えます。

◆今後の6年制教育に望むこと、生涯教育に望むこと

第一部、第二部を振り返り、今後の6年制教育に望むことについて、各々自由に意見を挙げました。上記の項で挙げた、「6年制卒の一期生として取り組んでいきたいこと」と重複する部分もありました。以下、プロダクトと議論の経緯を示します。

- **進路に関して、広く選択肢を持たせてほしい。**

6年制教育に移行した現在も、「薬学部だからといって薬剤師になることが全てではない」という教育を行っている大学があるという意見が挙がりました。私たちはこのような発言のない教育を求めたいと思います。これは、優秀な薬剤師を育成したいという国の方針を、優秀な薬剤師を育成するはずの教育機関が混乱させてしまっているという矛盾であり、私たち学生にとっては大きな疑問です。薬学生の進路は多岐に渡っているはずなのに、その全てを知ることなく、選択肢を狭められている気がしてなりません。今後、大学教育において進路に関する様々な情報を「見せて」頂きたい、また、自発的に自分の進路を決めることは決して無駄なことではないという意見が多く挙がりました。

- **処方箋に病名を載せる(制度化する)。**

昨今耳にするようになった「いずれ薬剤師にも処方権を与える」という話は素晴らしいという意見の一方で、薬剤師は処方権だけを獲得しても何もできないという意見も挙がりました。薬剤師全体のレベルが処方箋を書けるレベルに到達していると考えられます。しかし、それ以前に、「病気の内容を聞くのみに止まらない服薬指導を受けることができる」という意味で患者にとってプラスになる、「処方箋への病名の記載」を制度化してほしいという方向へ議論が進行しました。

・薬学生全体のレベルアップ→薬学生全体のモチベーションのアップにつなげる。

旧4年制度との差を付けるためにも、6年制の薬学生全体のレベルアップが必要になると考えます。一部の大学で学生発案の実務実習報告会を行っていたように、学生全体の自発性を積極的に伸ばす必要があります。受動的に学ぶのではなく、積極的・自発的に学ぶことにより、社会に出てからのより一層の活躍が期待でき、また、後輩に対しても良い手本となることができるという結論に至りました。

・博士課程の充実(卒後の環境整備)

いずれ、薬剤師にも臨床研究の実績により、博士課程後期の学位が取得できるような環境を与えてほしいという意見が挙がりました。

・今後も全国学生ワークショップを開催してほしい。

今回の第1回全国学生ワークショップは、とても有意義な時間となりました。大学ごとに特色があり、その環境の中で約5年半を過ごすことで、その大学で受けた教育による「価値観」をもつようになり、そのような価値観を持った学生同士で意見交換をすることは、学生のレベルアップ、モチベーションアップにもつながると考えます。今後も、今回のような全国学生ワークショップを開催し、参加学生が大学へ戻ってフィードバックを行う、という循環が築かれることを望みます。

◆終わりに

薬剤師の仕事とは、主に「確認する」ことであると思います。「確認する」ことは、とても簡単なこと、誰にでも出来るようなこと、と考えられてしまいます。しかし、私たちは実務実習を通じて、鑑査や調剤は100%の精度をもって達成されなければならない仕事であること、「確認する」という仕事が誰にでもできる仕事ではないことを学びました。実務実習を経験した学生誰もが自らの知識不足を痛感し、また、知識を十分に備えた薬剤師に一種の憧れをもったことと思います。

薬剤師は「おばあさんの海外旅行の付添人」に例えられます。病気と付き合う長い旅の不安を少しでも解消するための相談役のような存在を表す例えです。旅をするおばあさん本人または他人から見て、「そのような付添人は必要ない、目的地(治療・治癒)まで一気に連れて行ってくれる人(医師)だけ居れば良い」という意見もあるかもしれません。しかし、この付添人の必要・不要を決めるのは、そのおばあさん本人であると考えます。薬剤師の助言により、治療に対する疑問や不安を解消しながら治癒に向かうことは、更なる複雑化が予測されるこれからの医療現場において必要なことであると思います。

これから薬剤師として歩んでいく中で、6年制一期生という自覚をもち、責任と誇りをもった薬剤師を目指して頑張ろう、と皆の意識が高まったワークショップになりました。

最後に、このような貴重な機会を下さいました関係者の皆様に深く御礼申し上げます。

IC班

「6年制卒の一期生として取り組んでいきたいこと・今後の6年制薬学教育に望むこと」というテーマに対して各自が意見を出し合い、ホワイトボードにまとめていった。また、第一部・二部でまとめた内容と関連付けることができるか議論し、以下のような内容にまとめていった。

<まとめた内容>

◆ 6年制卒の一期生として取り組んでいきたいこと

- ・ 臨床での問題点を見つけ、解決していこうとする薬剤師になる
- ・ 指導薬剤師となって、学生のニーズに合った実務実習をしていきたい
- ・ 臨床で学んだ知識・技術を企業での研究・開発に活かしていく
- ・ スペシャリストである前にジェネラリストに
- ・ 発言のできる薬剤師に
- ・ 薬剤師の職能を周りに積極的にアピールしていく
→薬剤師の必要性を知ってもらう&職能の拡大
- ・ 薬剤師の社会的立場をよりよく変えていく
- ・ 応用的知識を身につけたい
- ・ 自己研鑽(勉強会に参加する等)
- ・ 多職種と関わるができる環境

◆ 今後の6年制薬学教育に望むこと

[実務実習の改善]

→より積極的に取り組める実習になる

- ・ 期間の見直し
- ・ 病院、薬局を選びたい、数ヶ所回りたい
- ・ 施設機関でできる実習内容の提示
- ・ 個人個人の進路も考慮した実習先の選択を可能に
- ・ 実習の時期の見直しが必要では?
- ・ 実習内容の均一化

[病態についてもっと知識を高めたい]

[研究をもっと重視するべき]

→データ解析、情報収集能力、論理的解決能力

<議論の経緯>

我々の班のメンバーは進路先が多岐に亘っていたこともあり、様々な視点からの意見をまとめることができた。6年制薬学教育を受けた我々が医療現場に出た時に、「自分の立場で何ができるか」を皆が真剣に考え、意見を出し合い、取り組んでいきたいことをまとめていった。また、現状の6年制薬学教育において不足している点や必要ないと感じた点について意見を出し合い、今後の6年制薬学教育に望むことをまとめていった。以下に具体的な議論の経緯を示す。

◆ 6年制卒の一期生として取り組んでいきたいこと

最初に意見として出たのは「指導薬剤師となって、学生のニーズに合った実務実習にしていきたい」というものだった。第一部・二部を通じて、実務実習の内容はより学生個々にあったものにするべきだという意見が出ていた。このことを踏まえて三部では、実習先において学生に最も近い存在である指導薬剤師が、学生の意見を可能な限り尊重した指導を実施するべきだという意見がでた。これは6年制薬学教育を経験した者だからこそ感じる点であり、後輩がより良い実習内容を受けるためにも、我々が積極的に指導薬剤師の資格を取り、より学生の視点に立った実習を提供していくべきだと意見がまとまった。

次に「薬剤師の職能を積極的に周りにアピールしていく」という意見がでた。臨床現場において薬剤師はまだまだチーム医療に参加できておらず、他職種に対する関わり方が不十分であるという意見から、どのようにすれば薬剤師が必要とされるのかを話し合った。その結果、

- ・ 多職種が薬剤師に対して求めていることを積極的に知ろうとする
- ・ 薬剤師の職能をより広げていく

ことが重要であるという意見が出た。そしてこれを実現するためには、多職種に薬剤師の職能をアピールしていく積極性と、それを裏付ける十分な知識と技術を身に付ける(=自己研鑽を常に怠らない)ことが重要であるということで意見がまとまった。

◆ 今後の6年制薬学教育・生涯教育に望むこと

最も意見が飛び交った議論に「実務実習の改善」があった。第一部・二部を通じて、自分にとって非常に興味のある分野が実習先では学べなかった等の意見が出ており、実習内容に不満を感じている学生が多いという意見が出た。これを踏まえて、我々は実務実習の改善が必要であると考え、具体的な対策案を話し合った。意見として、

- ・ 個々の進路希望を尊重した上での実習先、実習期間の決定
(例：薬局1ヶ月+病院1ヶ月→残り3ヶ月は自由に割り当て)
- ・ 実習先の施設情報の開示
- ・ 実習時期の見直し(3期は就職活動に不利である)

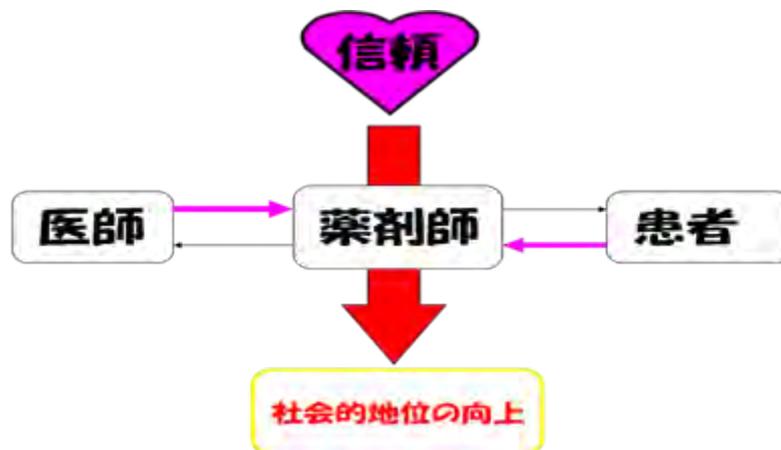
などが出た。

また、学校教育の一環として研究をより重視すべきだという意見が出た。6年制薬学の人間が社会に出た時に、データ解析能力や情報収集能力、論理的解決能力が求められることは必至である。その期待に応えるためにも、研究は非常に重要であるという意見が出た。しかし、一方で大学によって研究指導に関して格差があり、これを如何に解決していくかが今後求められるという意見にまとまった。

このように、6年間を通じて自分たちがやり残したことや不満を感じたことを、今後の6年制薬学教育にどのように還元していくかをまとめることができた。また、6年制薬学教育を受けた我々が社会に出た時に、「自分の立場で何ができるのか」を話し合い、お互い理解し合えたことは非常に有意義であった。

最後に、このような全国薬学生ワークショップ開催に関わり、貴重な経験をさせて頂いた関係者、各大学の教員の皆様に深く御礼申し上げます。ありがとうございました。

1. 6年制卒の1期生として取り組んでいきたいこと



私たちの班では、取り組んでいきたいこととして「信頼される薬剤師とは」を主軸とし、将来どのような薬剤師が活躍できるのかということについて意見を出し合った。

上記の表が私たちの考える薬剤師と医療従事者、患者との関係図である。

◆ 医師からの信頼を得るためにはどうすればよいか（図：医師→薬剤師）

● 医師に対し処方提案、情報提供ができる薬剤師

患者へ薬を処方する際、精神疾患や慢性疾患の場合、処方薬を減らすことはほとんど行われず、薬を On していく医師が多いように思うことから、薬の専門家である薬剤師が医師に薬剤のきちんとした情報提供を行うことで「いらぬ薬」を減らすことができるのではないかと考えた。医師と薬剤師が連携をとることで、処方の適正化を図ることができると考える。

● チーム医療に貢献できる薬剤師

薬剤師がチーム医療において医師や他の医療従事者と対等な立場で意見を述べ合うことができる位置へ到達できればよいのではないかと考えた。

薬物治療は患者の QOL を考える上で重要なことであり、ICT や NST では薬剤師が患者の治療方針を医師から相談される場面を目にし、薬剤師としてのやりがいを感じた。

● 薬物治療以外でも医療人としての役割を果たせる薬剤師

例えば、バイタルチェック、採血、予防接種、心臓マッサージなどの心肺蘇生法。

最近では薬局薬剤師が在宅訪問した際や服薬指導でベッドサイドへ行った場合などに、バイタルチェックを行い、患者の状態を知る薬剤師がいる。薬剤師も聴診器を持つ時代だと感じ、検査値で医師と患者の状態について意見交換ができると考える。

採血に関しては TDM を行う際に自ら採血でき、検査機関へ検体を送ることができれば患者の結果を迅速に知ることができると考える。

◆患者から信頼される薬剤師になるにはどうすればよいか（図：患者→薬剤師）

● 薬育できる薬剤師

患者のコンプライアンス、さらにアドヒアランスを向上させるためには、「服薬の大切さ」や「のみ忘れた場合の対処法」など治療の本筋ではない部分で患者の「為になる」補足情報の説明を行うことが大切ではないかと考えた。

● ベッドサイドへ足を運ぶ薬剤師

薬物治療は患者にとってわからないことが多いうえに、医師と違い薬剤師が病棟に常駐している場合は少ない。薬物治療において簡単なことであれば、看護師による説明が行われている場合が少なくない。薬の専門家として患者さんに相談していただければ易い環境作りが大切であると考えた。

● メンタルケアができる薬剤師

薬局の場合、患者との距離が近い。既出のベッドサイドへ行く回数を増やす利点と同様で、患者一人一人の病気、治療に関する不安を取り除くために、きめ細やかな服薬指導を行うことや、その方に合わせた情報提供書を作成することがよいのではないかと考えた。

● Do 処方の権利を持つ薬剤師

慢性疾患患者の病院へ行く身体的負担を軽減できると考えた。

● 介護ができる薬剤師

最近の調剤薬局ではケアマネージャーの資格を持ち、在宅医療時、薬剤師とケアマネージャーの二足の草鞋である薬剤師が多い。近年の高齢化で薬剤師の活躍の場が広がるのではないかと考えた。

これらの医師と患者からの信頼を得ることで、薬剤師の社会的地位が向上するのではないかと考えた。ここでいう薬剤師の社会的地位の向上とは「患者、また医師から必要とされる薬剤師になること」であると考えた。

2. 今後の6年制薬学教育に望むこと、生涯学習に望むこと

◆大学教員へ

● 臨床に結びつく教育の強化

学校教育において薬理と薬物治療など学問を細分化して学習したが、臨床では二つを同時に結び付けることが必要であった。

実践に即したカリキュラムを制定（専門医による総合的な病態把握ができる力を身につける講義など）してほしいと思う。

● 多職種との合同実習（体験学習）の実施

スムーズなチーム医療の連携を図るために学生の中にそれぞれの職種の仕事内容等を理解し、意見交換することが大切ではないかと考えた。

- 学生のやりたいことに合わせた実習機関、実習内容の選択
実習先によっては門前や専門が違う場合がありどうしても知識の均等化が図れない場合がある。自分で医療機関を選択することができれば、実習に対するモチベーションの向上にもつながり、就職活動も円滑に行うことができるのではないかと考える。
- ディスカッションする機会の増設
文系と違い薬学部自体にディスカッションをする機会があまりなかったという意見が大多数だった。今回のワークショップを通して、意見交換をすることで自己の刺激になったり、価値観が変わったりしたので今後、意見交換の場を増やすことが大切ではないかと考える。
- 実習内容に対する教員の把握と理解
臨床現場と教育現場でのギャップを埋めるためにも、教員にも実習内容を理解していただき、その内容に合った指導をしてほしいと思う。
例えば抗がん剤におけるレジメンの授業の実施など。
- 国家試験勉強以外の教育制度の充実
6年制の最後の1年は国家試験の勉強をするために伸びたわけではないという意見があった。薬剤師として臨床現場で即戦力になるために学んでおきたいことなどのカリキュラムを制定してほしいと思う。
- 研究に対するカリキュラムの制定
学校によってバラバラな研究に対する概念を一致させてほしいと思う。

◆後輩へ

- 英語を学習しておくべし
薬局に外国の患者が来た場合の服薬指導は英語ができないといけないことや米国と日本の薬学部の違いを見ておきたかったことなど、第2部で「やり残したこと」として意見が一番多かったものが「英語」や「海外留学」だった。
また研究室や進学する場合でも論文発表は英語で行うことが必須であるし、公用語として「英語」が言語として一般的であるため学んでおいて損はないと考える。
- 他学部や他大学の学生と交流できる場へどんどん足を運ぶべし
自分の価値観が変わるし、薬学部にはない広い世界を見ることができる。将来自分が「薬剤師として何ができるか」を考える場合においても、また違う観点で「薬剤師」ととらえることができると感じた。
- 時間を有効につかうべし
長いようであつという間だった6年間。勉強も遊びも要領よく時間を使うことで何十倍も楽しい学生生活ができると考える。

- 早いうちからモチベーションを高くもつべし
基礎科目である「薬学的知識」が十分にあれば実習において自分の自信につながる。つまり臨床現場で自分の知識を生かし、応用が利くようになり実習自体も楽しく充実した日々を過ごすことができる。
「自分のやる気次第」で同じ環境同じ学問を受けていたとしても充実度や達成感は全く違うものになる。意味のある時間を過ごすためにはやはりモチベーションは大切であるとする。

◆社会へ

- 病院における診療報酬の点数の付け方を改善してほしい
ベットサイドへ行く回数を増やすためのメリットになると考える。
- 認定薬剤師のメリットを増やしてほしい
現在の認定薬剤師制度では活用できているとは言い難い。認定薬剤師の資格に応じて報酬をつけることで薬剤師の勉強することに対する関心が深まり、薬学的知識の薬剤師全体での向上が望めるのではないかと考える。
- 薬局薬剤師に認定薬剤師制度を導入してほしい
保険薬局に「プライマリーケア」ができる薬剤師を配置することで患者のトータルケアを行うことができ、また保険薬局の薬剤師の仕事に対するやりがいにつながるのではないかと考える。

Ⅱ A班

<議論の経緯>

今回のグループ議論は KJ 法ではなく、与えられたテーマに関して自分の意見を自由に述べながら意見をホワイトボードにまとめ、スライドを作成し Power Point による発表を行った。

私たちは第一部と第二部で議論した内容を振り返り、それらをもとに 1 つ目のテーマの「6 年制卒の一期生として取り組んでいきたいこと」について議論した。このテーマでは、現時点においてできること、社会に出てからできることの 2 点について議論した。続いて 2 つ目のテーマの「今後の 6 年制薬学教育に望むこと、生涯学習に望むこと」について議論した。ここでは 6 年制薬学教育において、大学と指導薬剤師、後輩、社会に望むことの 4 点に重点を置いた。

詳細を以下に示す。

1. 6 年制卒の一期生として取り組んでいきたいこと

まず第一部と第二部で議論した内容を振り返った。第一部では、6 年制薬学教育を通して視野が広がり、自分が変わり、“夢”を持てるようになったという結論を得た。また第二部では、6 年間でやり残したこととして、“世界を広げなかった”という結論を得た。6 年間を通して様々な知識・考え方を身につけることにより自分の夢を思い描く様になったが、その中でもより自分の世界を広げていくことが必要であり、6 年間における反省点であると考えた。したがって、世界を広げていくためにも、更には社会全体としてよりよい医療を目指していくためにも様々な人々と交流する必要がある、今後取り組んでいきたいこととして“交流会を実施する”という意見が今回の議論の中心となった。そこで、現時点で自分たちにできることと、社会に出てからできることの大きく 2 点に重点を置き、議論を進めた。

◆現時点で自分たちにできること

はじめに「後輩との交流会を実施する」という意見が上がった。私たちは 6 年制一期生であり、同じ境遇の先輩からの意見をもらうことができず、やり残したことも多々あるため、まず自分たちの反省点を後輩に伝えていくべきだと考えた。次に今からでもできることとして、「人脈を広げる」という意見が上がった。今までの 6 年間を通して、人とのつながりの大切さを学んだ。残り学生生活もわずかではあるが、今のうちにより広い人脈を持つことにより、社会に出てからどこにいても情報交換できるルートをつくるべきであると考えた。

◆社会に出てからできること

ここでは「実習に関してフィードバックを行う」という意見がでた。私たちは 6 年制カリキュラムの初めての病院・薬局実習を経験した。これより私たちは多くを学ぶことができたが、今後改善していくべき点も多く見出すことができた。長期の実務実習はまだ始まったばかりであり、実習先も大学も社会全体としてもどう取り組んでいけばいいのか不明瞭の部分も多くあるように感じる。したがって社会に

出てから、学生ではなく薬剤師として、自分たちの経験をもとにフィードバックを行っていくべきではないかと考えた。

また、実習だけでなく、「企業や薬剤師、学生、教員を含め全体で交流会を実施する」という意見がでた。薬剤師間や学生間などでも交流会を実施し、情報交換をしたりモチベーションを高めあったりすることは必要であると考えた。しかし学生・教員を含め、医療にかかわるすべての職種の人々全体で交流会を実施することにより、お互いの理解をより深め合うことができ、仕事への取り組み方も変わり、社会全体としてよりよい医療を築いていけるのではないかと考えた。

最後に、6年制薬学教育の目的や、また薬学部が6年制になった事実さえもまだ社会にはほとんど知られていない。「薬剤師の地位向上」のためにも、まずは6年制薬学教育について社会に知ってもらう必要があると考える。そのためにも心構えとして、自分たちが“一生一期生”であるとの自覚をしっかりと持ち、6年制薬学教育がどう医療に貢献するか、態度で示していくことが必要であると考えた。

2. 今後の6年制薬学教育に望むこと、生涯学習に望むこと

第一部から今までの議論を通し、自分たちがやり残したことやできなかったことが多く見えてきた。そこで今後6年制薬学教育と生涯学習に関して望むことを、大学と指導薬剤師、後輩、社会の4つに分類して議論した。

◆大学の先生方へ

まず6年制薬学教育のカリキュラム、講義内容など大学に望むことに関して意見をまとめた。大学では薬学に関する専門知識を多く学んだが、それらをもっと深めたいというものと、専門知識以外の知識を身につけたいという内容のもの、また講義以外にも、他大学間での交流や海外研修を望むという内容に分かれた。

今まで学んだ知識を深めたいという内容に関して、具体的には「検査値、画像解析等の臨床に近い講義を望む」という意見が出た。6年間の講義で専門知識を学んだが、知識だけでは臨床で役に立たない。検査値や画像解析等の臨床に近い講義を実施することにより、臨床をより理解でき、生きた知識を得ることができるのではないかと考えた。また先進国では、薬学部でも聴診器や血液採取などに関する授業も組み込まれている。日本で薬剤師の職能の幅を広げるためにも、そのような先進国を念頭に置いた授業を実施していくべきではないかと考えた。

また専門以外の知識を身につけたいという内容に関して、具体的には「英語、経営を学びたい」という意見がでた。今後の国際社会においてもやはり薬学教育の一環として英語を学ぶべきだと考えた。他に薬学部を出てから経営にかかわっていく人々は多くおり、また直接経営にかかわらずとも、薬剤師も幅広い視野を持つべきだと考え、経営・マネジメント学を薬学教育の一環として入れていくべきだと考えた。

講義以外の内容として、「大学間での情報交換を望む」、また「海外研修をやれる機会を数多く望む」との意見が出た。全国の大学では、講義や実習、研究などへの取り組みが大きく異なる。ましてや、海外と比較すると異なる部分はさらに多い。様々な大学・海外との情報交換や研修を実施する機会を設け、よりいい部分を取り入れて発展させるべきだと考えた。

6年制薬学教育の本当の意味での完成はまだまだ先である。私たちには、4年制の時代には作ることはできなかった時間がある。その時間の使い方こそが、今後の「薬剤師の地位」を決める大きな要因の一つになると考えている。しかし、6年制としての教育に費やすべき時間の大半を国家試験対策に使っている大学もある。特に、合格率や経営的な面も考慮しなければならない私立薬学部でその傾向が強い。

医療現場の先輩方や世間に、4年間で学んでいたことを6年かけて学んだだけの「ゆとり薬剤師」と呼ばせないために、薬学教育が何故4年制から6年制に移行したのか。その明確な理由を、学生だけでなく大学教員も学び、理解する義務があるのではないかと思われる。

◆指導薬剤師の先生方へ

実習を経験して、多くを学んだが改善点も多くあるように感じた。その中でも指導薬剤師に望むことをまとめた。ここでは、一緒に学ぶ姿勢を持ってほしい、指導薬剤師には指導に専念してほしい、実習生を邪魔扱いしないでほしい、柔軟に対応してほしい、また具体的に実習生の部屋をつかって欲しいなどの意見が出た。

実際の実習では普段の薬剤師業務と兼任して指導を行っているところがほとんどであり、手術見学やチーム医療など大学ではできないとても貴重な経験をさせてもらっている学生がいる一方で、日常業務の忙しさのため学生を押し付けあったり、ほったらかしにしたり、学ぶ意欲の高い学生を鬱陶しがったりと、満足できない実習だったという感想を持つ学生も少なくない。

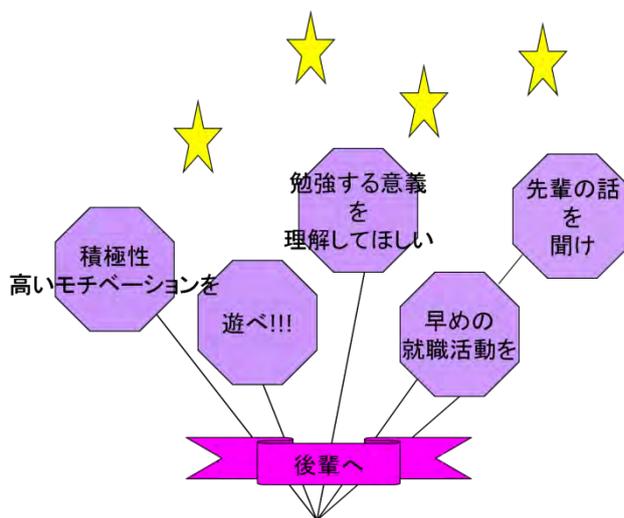
したがって、もっと指導薬剤師の数を増やし交代制にするなどの対策をとり、実習期間中は指導に専念してほしいという意見にたどりついた。



◆後輩へ

先ほど自分たちが取り組んでいきたいこととして、後輩との交流会を実施するというところを取り上げた。ここでは後輩自身に望むことをまとめた。一番に「高いモチベーションをもってほしい」という意見が中心になった。具体的には、先輩の話聞いてほしい、勉強する意義を理解してほしい、遊びもしっかりするべきだ、早めに就活をするべきだなどの意見が出た。特に勉強や遊びに関しては、ただ勉強

をするだけではなく、6年という長い期間を通して様々な人と積極的に交流し、アルバイトやサークル、遊びにも力を注ぎ、豊かな人間性を養ってほしいという意見もあった。他のことにあまり時間がとれなかった4年制とは違い、自分で時間をつくることにより様々な経験ができることも6年制の特徴の一つであると考えた結果である。他にも自分たちが6年間で悔いていることと、薬学部のレベルが低くなっているのではないかという現状を踏まえた意見が多く出た。



◆社会へ

今後6年制薬学教育や生涯学習に望むこととして様々な意見が出たが、大学・指導薬剤師・後輩のいずれでもない意見も多く出た。それらを社会へ望むこととして意見をまとめた。まず先ほど大学や指導薬剤師へ望むこととして意見をまとめたが、それ以上に大学教員や指導薬剤師自身も、情報交換や学ぶ機会を設けてほしいとの意見がでた。他に、就職活動と実習の両立が大変難しかったため、企業側も実習先・大学側も、実習生の就職活動について理解、支援してほしいという意見もあった。また、大学によっては実習費が学費に組み込まれていないこと、学会の費用が支給されない大学もあることなど、お金に関して統一してほしいなどの意見も出た。



この中でも特に就職活動と実習の両立について以下のような意見が出た。

実際に、Ⅲ期の実習生が就職活動のため実習を多く欠席したことにより、実習が打ち切られてしまったという話を聞いた。6年制薬学部生の中には、研究を迫及したい者、企業で活躍したい者なども多くおり、将来が薬剤師のみに狭められているわけではない。しかし彼らの就職活動は実務実習と期間が重なり、必然的にどちらかが疎かになってしまうことが多いように思われる。実務実習での経験は、将来どの道に進むとしても必ず役に立つ貴重な経験であり、また実習を休むことは実習先に失礼であることも承知している。しかし企業が就職活動を実習中に行う限り、夢を叶えるために実習が疎かになってしまうことも仕方がないことだという意見がでたことも事実である。この対策として、実習開始の時期をCBT終了後の4年次の終わりに早め、全国的に就職活動が本格化する5年の冬には全ての実習を終えるという0期を設けるのはどうかと提案したい。

最後に、この第三部では薬学教育に望むことについて議論したが、いずれもまだ薬剤師、また6年制薬学教育の必要性を、社会に理解してもらえていないために出てきた願いのように感じた。やはり自分たちにできることとして、まず自分たちが“一生一期生”であるとの自覚を持ち続け、理解してもらい、社会全体を少しずつ変えていくことが大切であると考えた。

一生一期生

だよ♡

<プロダクト>

1. 6年制卒の一期生として取り組んでいきたいこと

- ・ 後輩との交流会を実施する（他大学含めて）
- ・ 人脈広げどこにいても情報交換できるルートをつくる
- ・ 6年制の実習を通して実習先、大学、社会にフィードバックを行う
- ・ 全体で交流会を実施する（企業、薬剤師、学生、教員）
- ・ 薬剤師の地位向上

2. 今後の6年制薬学教育に望むこと、生涯学習に望むこと

【大学へ】

- ・ 専門知識以外に英語、経営を学びたい
- ・ 大学間での情報交換
- ・ 海外研修をやる機会を数多く
- ・ 検査値、画像解析等の臨床に近い講義を

【指導薬剤師へ】

- ・ 一緒に学ぶ姿勢を
- ・ 指導薬剤師は指導に専念してほしい
- ・ 実習生の部屋をつくって欲しい
- ・ 邪魔扱いしないでほしい
- ・ 柔軟に対応してほしい

【後輩へ】

- ・ 積極性～高いモチベーションを～
- ・ 勉強する意味を理解してほしい
- ・ 先輩の話を受け
- ・ 遊べ!!!
- ・ 早めの就職活動を

【社会へ】

- ・ 指導薬剤師の教育～勉強する機会を～
- ・ 学費、実習費、就職活動

Ⅱ B班

午前中の第一部、第二部において6年間の薬学部生としての生活のなかで、成長したことと、やり残したことが挙げられました。そして、それらの事実をふまえて6年制卒の一期生として取り組んでいきたいこと、今後の6年制薬学教育に望むこと、生涯学習に望むことについて話し合いました。

まず、6年制卒の一期生として取り組みたいこととして以下のような意見が出ました。

- ◆ 自分の経験を踏まえた後輩の指導
- ◆ 学んだ倫理観を生かして患者さんに関わる
- ◆ 薬剤師の職域を広げる
 - 検査オーダー、バイタル測定、採血、静注
 - 学校薬剤師（小・中学校への働きかけ）
- ◆ 薬剤師の活動を報告する（積極的に学会などで発表する）
- ◆ 薬局での簡易検査を実施できるようにする（かかりつけ薬局をつくる）
- ◆ 新しい情報を幅広く、積極的な収集をする（論文、学会など）

実習を終え、その重要性を感じた今だからこそ、病院や薬局など現場でしか経験できないこと（手術の見学や検査の見学、服薬指導）を重点的に実習できるような環境を作っていきたいといった意見が出ました。他にも、長期の実務実習で命の大切さや、当たり前だと思っていた日常がとても有難いものであるということを実感したので、それを常に心に留めながら、患者さんに関わっていききたいという意見も出ました。

薬剤師の職域を広げていきたいという意見には、血液検査や肝機能検査などの検査のオーダーや、バイタル測定、ワーファリン使用量決定のための採血や、静注ができるような環境を作っていきたいという気持ちも込められています。そして、薬局で簡易検査を行うことによって、より一層患者さんにとって身近な存在になり、さらに信頼されるかかりつけ薬局になることができるのではないかと思います。大学によっては、静脈注射や採血の練習をする授業が組まれています。今よりも職能を広げるためには、薬剤師がどのような活動をしているかを医療関係者だけでなく、一般の人も含めた世間の人々に知ってもらわなければいけないと考えました。今まで、薬剤師の業務をアピールする機会があまり無かったように思います。薬剤師がいるから安心して薬が飲める、薬をオーダーできるということを感じてもらえてこそ、職域を広げていくことができるのではないのでしょうか。

他にも、新しい情報を幅広く積極的に収集し続けることも薬剤師の職域や認知度を上げるために必要だと考えました。新しい知識の習得は医薬品のことだけでなく、疾病の病態についてや検査値、治療法についても同様で、薬剤師として医療に携わっていく姿勢を保ち続けなければいけないと思います。

次に、今後の6年制の薬学教育に望むこと、生涯学習に望むことでは以下のような意見が出ました。

- ◆ 4年制と6年制の相違点を明確にしてほしい
- ◆ 社会のニーズを知りたい（今後の薬剤師に何が求められているのか）
- ◆ 早期体験学習を充実してほしい（参加型実習、臨床現場の生の声を聞けるような機会を増やしてもらいたい）
 - 大学生活の早いうちから社会の現実を学んでおきたい
 - 社会の薬剤師に対するニーズを知ることもでき、将来のビジョンを描きやすい
- ◆ 実習の中で、他職種、他学部との関わりを持ちたい（視野が広がる）
- ◆ 薬薬薬連携の推進（薬剤部・薬局・薬学部）
 - 生涯学習をしやすい環境の形成
- ◆ 実習では、現場でしか見られないものを見学したい（手術、検査、透析など）
- ◆ 医療経済、薬剤経済について学ぶカリキュラムを取り入れてほしい
 - 将来薬局を開業したい人にプラスになる
- ◆ 進路の選択肢を広げてほしい（6年制＋博士号→臨床薬剤師へ）
- ◆ 認定制度を統一化してほしい（ベースラインの向上、それに伴うレベルアップ）

実際6年間学んできましたが、私たち自身が6年制になってどう変わったの？と尋ねられることもしばしばあります。6年制は4年制と比較して実務実習が長くなり、より現場を見てきたという自覚があります。しかし、長期の実務実習を経験したからといって薬剤師としてすぐに働く学生ばかりではありません。企業への就職や大学院に進学する人もいます。さらに大学院卒業後も、研究職に就くばかりが進路ではありません。進路は様々であり、その選択肢を狭めず、可能性を広げて欲しいという意見が出ました。また、早期体験学習をもっと充実してほしいという意見もありました。この早期体験学習はどの大学でも行われているようですが、その多くが、病院と薬局を数時間見学する程度ということでした。薬のピックアップは少し勉強をすればできることなので、実際に医薬品に触れるということを学生の早い時期にできると良いのではないかと思います。実際に患者さんの体内に入る医薬品に触れることは、学生にとって大きな衝撃です。さらに、臨床現場の生の声を聴く機会というのは、大学内でのイベントであると億劫さが先立ってしまい、後からその機会の貴重さに気付くことも少なくありません。臨床現場で、現場の先人の声を聴くという緊張感のある機会を増やしてもらいたいと思います。

さらに、実習では手術や検査部を見学するといった現場でしか体験できないことを取り入れてもらいたいということが挙げられました。実習施設によって対応できない部分もあると思いますが、施設間で連携をとって「実習」の機会だからこそ体験できる内容を増やしてもらいたいと思います。

また、他職種や他学部、他大学との交流をする機会を増やしてもらいたいという意見も出ました。他職種との連携の大切さは実習をしていた間に痛感しました。さらに、今回のようなワークショップに

参加すると他の大学ではどのようなことが行われているか、社会は私たちに何を求めているかを知ることができます。このような機会は自らの視野を広げるためにも有用であるため、積極的に行ってもらい、参加したいと思います。

大学での授業では、医療経済や薬学経済についてのカリキュラムを充実させてほしいと考えます。経済学は、一見薬剤師とは関係ないように思われますが、将来的に薬局を開設する人も居るだろうし、医療費の削減が叫ばれる中、経済のことを何も知らないのは薬剤師の品格を下げてしまうのではないのでしょうか。

さらに、大学の薬学部、病院の薬剤部、調剤薬局の3者による薬薬薬連携を確立してもらいたいと思います。現在、病院の薬剤師と調剤薬局の薬剤師の間には、所属する団体が違うなどの理由から大きな隔りがあると感じます。大学の薬学部とのつながりも薄いように思いました。実習に対しての見解が異なっていたり、理解が少なかったりということは実習をして一番感じたことです。薬薬薬連携の強化は実習だけではなく、卒後教育の充実にも繋がると考えます。

また、現在の薬剤師の認定制度は認定の主体が様々な団体にあるため、統一化してもらいたいと思います。認定薬剤師となることは、モチベーションも向上するし、薬剤師の仕事の認知を向上させることにもつながり、薬剤師にとって目標にすべきことだと考えます。しかし、認定制度がバラバラであると認定のための条件が異なってしまうので、楽に認定がとれる方へと流れてしまう危険もはらんでいます。認定制度の統一化を図ることで、認定薬剤師のベースラインが向上し、薬剤師として提供できるものもレベルアップし、薬剤師ひいては医療の向上に役立つことができるのではないかと考えました。

これからの薬剤師、薬学教育を担っていくのは一期生である私たちだという自覚をもって、今までの貴重な体験や経験を生かし、これからも積極的に関わっていきたいと思います。

Ⅱ C 班

<ディスカッション内容>

テーマⅠ. 六年制卒の一期生として取り組んでいきたいこと

テーマⅡ. 今後の六年制薬学教育に望むこと、生涯学習に望むこと

以上の2つのテーマについて、第一部、第二部でのプロダクトを基に、議論した。

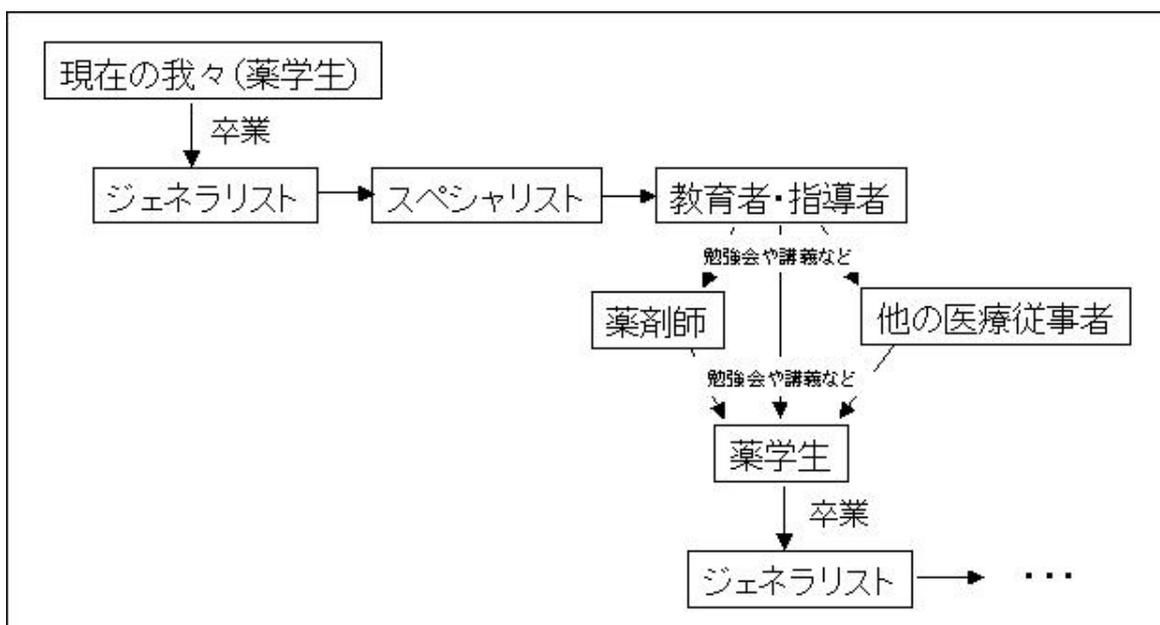
テーマⅠ「六年制卒の一期生として取り組んでいきたいこと」

■ 六年制になった意味を理解し、分かってもらえるよう行動する

まず、我々は薬学部が六年制になった意味を再確認した。議論をしていくと、実際、六年制になった意味をきちんと理解した上で、六年間、薬学を学んできたわけではないということが分かった。このことから、まず、六年制一期生である我々が、六年制になった意味をしっかりと理解し、それを四年制卒の薬剤師や後輩（六年制二期生以降）、また、他の医療従事者にわかってもらえるように努力し、薬学部六年生にしてよかったと思われるような行動をとっていくことが重要であるという意見で一致した。

■ ジェネラリスト→スペシャリスト→教育者・指導者へ

上記のことを踏まえ、そのためには、我々六年制一期生が薬剤師の仕事幅広くこなすことのできる「ジェネラリスト」になり、その後特定分野の「スペシャリスト」へと成長し、最終的には臨床現場で活躍している薬剤師が日常業務と並行して大学に出向いて講義を行ったり、勉強会を開くことで、体験談や即戦力になる情報を伝達する「教育者・指導者」になることが必要であると感じた。



■ その他

他にも、六年制一期生として団体を作り、他大学や学年・学部を越えて交流を深めることにより、情報の共有や医療従事者としての意識の向上を目指すといった意見もでた。

今回のワークショップを通して他大学の学生同士と交流することで、地方の薬学部と都心の薬学部とでは実習内容なども地域によって少し異なる部分もあることがわかった。日本全体の医療をよりよくしていくために、都心で行われている先端医療と地方の地域医療の両面から薬剤師として医療に貢献していきたい。

また、新薬の開発が進み日々医療は進歩しているため薬剤師として「生涯勉強」ということを忘れずに、この後のⅡで述べる実務実習の貢献にも積極的に携わっていききたいと思う。

テーマⅡ「今後の六年制薬学教育に望むこと、生涯学習に望むこと」

第二部で我々は「臨床現場で通用する実力を身につける事」が一番重要であるという結論に至った。このことから、実務実習での学習の見直しが必要ではないかという意見が出た。そこで下記に我々が行った実務実習の問題点を挙げる。

～実務実習の問題点～

- ① 実習場所や実習期間が選べない
- ② 実習場所によって実習内容が違う
- ③ 他の医療系学部比べて、医療従事者としての意識が低い
- ④ 指導者の意欲に差がある

①や②に挙げた問題点は関連しており、議論をしていると平等に実習を行えていないことがわかった。例えば、抗がん剤の調製を実際に行った人もいれば、練習だけの人もいた。このように実習内容にズレが生じてくると、実際の薬剤師の仕事がどのようなものであるかがわからず、我々の将来に大きな影響を与えることにもなりかねない。

そこで、六年制薬学教育の実務実習に望むこととして、「我々が将来何になりたいかをふまえた上で支援してほしい」という意見で一致した。薬学生の中には薬剤師を目指す人もいれば、そうでない人もいる。薬剤師を目指す学生が十分な実習を受けることができなかつたり、企業を目指す人が実習と就職活動の期間が被ってしまうことがあった。このことから教育者には、教育者同士の交流会などを行い、実習内容の統一と教育者の質と意識の向上を望むとともに、大学には実習先のローテーションや実習期間の選択など、進路希望調査をして学生一人一人のニーズにあった実習を行ってほしいと願う。

また、③の問題点のように看護や理学療法などの、他の医療系学部では「自己に足りないものは何か」ということを考えるために、二年次や三年次から実習を行っているの、実習時期が遅い薬学生と比較

して問題提起・課題解決能力が早期に身につけており、医療従事者としての意識が高いという意見が出た。このことに関しては、一年次に行われる早期体験学習で臨床現場に触れる機会を多くしたり、二・三年次に2週間程度の実習を行える機会を与えることが効果的ではないかという意見が出た。また、四年次のCBTやOSCEの問題レベルの向上（例えば、四年制の国家試験レベルの問題）を図り、医学部の研修医のようにライセンスを取得し実際に薬剤師として働くためには、臨床研修が必須という形にしたほうが六年間という長期間で良いモチベーションを保てるのではないか、という意見も出た。

④に関しては、議論を通して指導薬剤師のモチベーションに差があることがわかった。その中でも、教育意識の低い指導者がいることの背景として、薬学部が六年制になった意義が浸透していないことに原因があるといった意見が出た。また、現場の看護師が看護学生に厳しく接しているように、我々六年制の薬学生が「将来の同僚」と見なされていないことも事実である、といった意見も挙がった。この点に関しては、我々六年制卒の薬学生が日本薬学会のような大きな組織と共に六年制の意義を提唱していくことで改善を図る必要があると考えられた。

そして、本ワークショップに参加させていただくことで、大学を越えた情報や考え方の共有を行い、医療従事者としての意識が向上し、学びたいという思いが強くなった。これからも、このような意見交換をできるような機会を増やし、大学だけでなく、学部や学年を越えたワークショップの開催を切に望む。

最後に、今回のワークショップ開催に関わり、貴重な経験をさせて下さった関係者の皆様に深く御礼申し上げます。

IID班

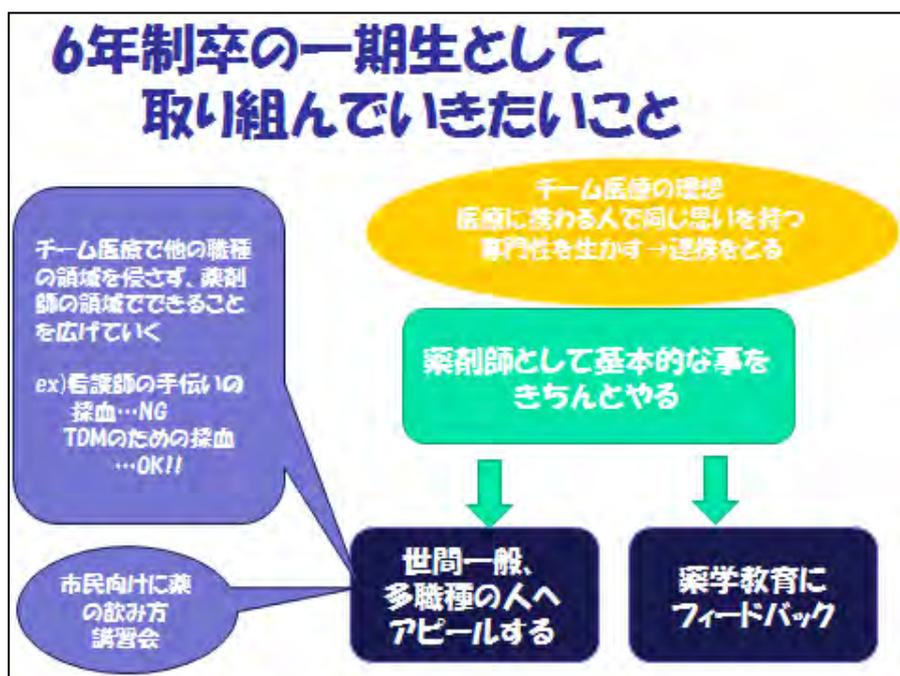
第1部及び第2部の内容をふまえ、第3部では、「6年制卒の一期生として取り組んでいきたいこと」「今後の6年制薬学教育に望むこと、生涯学習に望むこと」をテーマにディスカッションを行なった。更にディスカッションの内容をPower Pointを使用してプロダクトとして作成した。

各テーマのディスカッション内容については以下の通り。

① 「6年制卒の一期生として取り組んでいきたいこと」

卒業後に薬剤師として働くに当たり、IID班メンバーからは“医療チーム”の中でどのように活動して行きたいか、またどのように活動して行くべきか、といった点について積極的な意見交換がなされた。6年制を卒業し、これまでよりも2年間のアドバンスがあるからには現状を変えていきたいという考え方が多く、例えば採血や、バイタルサインのチェックを行えるようになることが薬剤師の職域を広げ、自分たちの地位向上にもつながるのではないかとの意見が出た。一方、医師や、看護師等のコメディカルが現在行っている専門領域に足を踏み入れ過ぎてしまうことは、患者に対するリスクを高めるだけでなく、チームの和を乱しかねない。もっと慎重になるべきではないかとの意見もあった。

これらの議論から、まずは薬剤師として当たり前の業務、例えば、調剤やDI、薬剤管理指導業務といった仕事を、ルーチンワークとして取り組むのではなく、常に問題意識を持ちながら取り組んでいくことから始めて行くべきだとの結論に至った。当たり前のことを当たり前になすことが実は一番難しく、それらを確実に実施していくことこそ、6年制教育を受けた我々が第一にクリアすべき課題だろう。また、医療チームの中で活動する際には「薬剤師でもできる業務」ではなく「薬剤師だからこそできる業務」に重点をおいて活動することで、他職種の領域を侵すことなく、且つより活動的に活躍できるのではないかとの意見が挙がった。



② 「今後の6年制薬学教育に望むこと、生涯学習に望むこと」

薬学教育に望むこととして、実務実習に関する話題が多くを占めた。中でも共用試験（CBT、OSCE）が実務実習においてあまり役立たなかった、共用試験のレベルを指導薬剤師の先生に理解してもらえず学生との間にギャップが生じていた、実習先によって学べる内容に差がありすぎるといった意見は多くのメンバーに共通しており、中には実務実習にも関わらずあまり実務が出来なかったという人もいた。他に、実習日報や週報が大学間で違うことに戸惑った、実習先の希望が通らなくて残念だった等の意見が挙がっており、実務実習のソフト面、ハード面でのより一層の整備の必要性が明らかになった。

また大学での授業に関しては、コミュニケーション能力やディスカッション能力の向上を目的に、今回のワークショップのような参加型の授業を積極的に取り入れてほしいという希望があった。

生涯学習に望むこととしては、医薬品に関する講習だけでなく、服薬指導や情報収集のための英会話講座など、幅広いスキルアップを狙った勉強会があるとより良いのではないかとの意見がでた。また、薬剤師だけでなく、他職種も含めたワークショップのような参加型の勉強会を取り入れていくことで、知識の向上だけでなく、職種間や施設間での情報交換の場を同時に設けることができるのではないかと考えた。

| 薬学教育 | 生涯学習 |
|---|------------------------------------|
| CBT、OSCEが役に立たない →実習で何もさせてもらえない →実習受け入れ先がレベルを把握していない | 新薬についての勉強 英語(薬学英語) →マニュアルを置く |
| 実習の日報週報のフォーマットを統一してほしい | ワークショップ勉強会 →施設間、職種間の情報交換 |
| ワークショップ型の授業 | イベントの催し方講座 |

第3部のディスカッションは、自分が将来目指す薬剤師像について、メンバーそれぞれが改めて考える機会となった。6年制になったことで、果たして何か変わったのか、また自分たちに何かを変えることができるのかと思悩む場面もあり、本来のテーマから脱線してお互いが熱くなってしまう時間帯もあったが、今回のワークショップで初めて出会ったにも関わらず、本音をぶつけ合って意見交換できたことは、参加したメンバー全員にとって貴重な財産となったに違いない。



参加者印象記



班名 I A 氏名 橋田 真裕

この度は大変貴重な経験をさせて頂き、誠にありがとうございました。参加させて頂いたワークショップでは、様々な大学の方々と活発な討論を行うことができ、有意義な時間を過ごすことができました。このワークショップを通じて、私が一番印象に残っていることは、同じ6年制の薬学教育といっても、各大学でその内容にかなりの違いがあることです。討論では皆さん、自分の受けてきた薬学教育を前提に話されていましたが、所々で食い違うことがありました。例えば、私の大学では全員が同じ病院、同じチェーンの薬局で実習を受けるため、実習内容にそれほど個人差は生まれません。しかし、同じ大学でも病院や薬局が違うことで個人差が出るという問題を知り、各大学の背景を理解した上で薬学教育を考えなければならないと実感しました。6年制に移行して、どんなメリットがあるかを示す実績データは当然ありません。しかし、基礎薬学に加え、臨床薬学、実務実習と豊富な薬学的知識を学ぶ機会は確実に増えています。6年間の薬学教育を通じて、薬剤師の活躍する幅が広がること、今後、幅広い薬学の知識、経験を活かして活躍できる人材が育成されていくことを心から願っています。

班名 I A 氏名 戸原 侑希子

私は第三部の全体発表と総合討論を終え、6年制薬学教育に対する考えが今までよりさらに深まりました。

現状の問題として、薬剤師は何をしているのか患者さんに理解していただけていないということがあります。6年制一期生として、調剤室にこもりつきりになるのではなく、もっと病棟業務に積極的に参加することで、患者様に薬剤師という職業の役割を理解してもらえないのではないかと考えました。また、専門性のあるチームへの参加や、認定薬剤師の取得などに力を入れていきたいとも考えました。そして、医者、看護師などとチームを組むためには情報交換が大切なので、薬剤師の服薬指導歴などもカルテにはさみ、情報を共有していきたいと考えました。

また、6年制薬学部の卒業後の進路は幅広いものであるということの後輩に伝えていきたいと考えました。病院、薬局にとどまらず、製薬会社、卸売、公務員、博士課程など、様々な可能性が広がっていることを示していきたいと思います。そして、それぞれの分野で5ヶ月間の実務実習経験を活かして活躍していきたいです。

班名： I A 氏名 長井 宏文

私はワークショップ形式の集会には初めての参加でありましたが、同じ班の学生をはじめ参加された全ての学生のモチベーションが非常に高く、薬学生として6年制の教育について真剣に考え、より良くしていこうとする姿勢に共感しました。そして、私自身も参加するからには何かを得て、自分の大学に持って帰ろうという気持ちで1日を有意義に過ごすことができました。

「6年制一期生として薬学教育に望むこと」を大きなテーマとして討論しましたが、特に締めとなる第三部では「一期生として取り組むこと」、「薬学教育に望むこと」について、鋭い見識を持って考察された具体的な意見が出し合われていたことで、改めて自らの役割を認識することができました。また、これらの意見を真摯に受け止めていくことが、薬剤師として働いていくことの意義に繋がるのではないかと感じています。

今回のような日頃得ることのできない経験を生かし、残りの学生生活と併せて、薬剤師として生涯働いていく上で高いモチベーションをもって日々研鑽していく姿勢を貫きたいと思います。また、このような姿を後輩に示していけるように頑張りたいです。

最後になりましたが、このような貴重な機会を与えて下さった、諸先生方に深く感謝いたします。

班名 IA 氏名 松村 敦子

他大学の学生と討論する機会は滅多にないので貴重な経験になったと感じています。大学によってカリキュラムも実習対応も異なるため、お互いの話を聞くことで参考になるものがあったり、欠けているものが見えてきたりしました。まだ1年目ということで、実際に過ぎてから見えてくる問題点もありますが、それを改善しようと思う熱意がすごいなと感じました。みなさんの自分の意見をしっかりと述べる姿勢にとっても刺激を受け、もっと自分も頑張らないといけないという励みになりました。

スケジュールは正直なところ、かなりきつかったです。休憩時間もなく次の議題に入っていくので、普通の話が学生間でできなかったのは少し残念に思います。他の班の方とは自己紹介も当然していませんので、全体の質疑応答では発言しづらい部分も個人的にはありました。けれど、あっという間に時間が過ぎてしまい、とても楽しく参加させていただきました。今回の内容が少しでも今後の改善および発展に役立つことを願うと同時に、このような機会を設けて下さった関係者の皆様に深く御礼申し上げます。

班名 IA 氏名 中村 健志

このように全国の薬学生が集まる事はありません。大学間の付き合いなども多くない学部だと思えます。同じ境遇の学生と出会い、討論・発表することで、お互いに刺激し合う事ができとても有意義なワークショップだったと思います。班のみんなと話をすることで、それぞれがみな異なる考え方を持っているという事を感じる事が出来ました。薬剤師として大切にしている部分、患者さんや医療スタッフに対するコミュニケーションを大切にしている人や、薬剤師として専門を所得する、論文を書くなど能力を重要視している人、いろいろな考えを聞くことで、今までの自分には無い新しい可能性を模索するいい機会を得ることが出来ました。自分の中の世界だけでは狭すぎていつかは通用しない時が来ると思えます。そこを打開していくためには、やはり新しい事を受け入れ、自分の糧として行く事が大切なのではないかと感じる事が出来ました。

六年制の薬学部として果たさなければならない最低ラインは国家試験合格だと思っています。しかし、そこで満足してしまっていては、これから薬剤師として生き抜いていくことはできないと思います。向上心を持ち、自らを高めていく、この気持ちを大切にしていきたいです。

六年制薬学部の一期生として、僕たちはこれから四年制が六年制になった事の意義を示していかなければなりません。しかし、それは個人の頑張りだけでは足りないと思います。同期の薬学生に会うことは、今回のようなワークショップなどが無いと難しく、全ての学生が全国の学生と関係を持つ事は非常に大変なことです。今までにない道を切り開いていくのは今想像している以上に大変なことだと思います。関わりを持った学生として、これを同期や後輩にしっかりと伝え個人ではなく、大きな集団として頑張っていきましょう。

最後にこのような機会を作ってくださった日本薬学会の方々や派遣してくださった大学の先生、また、全国学生ワークショップで出会う事が出来た学生のみんなに感謝の意を表したいと思います。ありがとうございました。

班名 IA 氏名 吉田 啓太郎

H23年8月4日に行われた日本薬学会第1回全国学生ワークショップに参加させて頂きました。集まった学生の熱い志のせいか、想像以上に暑くなった大阪で、活気あふれる討論が交わされた場だったと、強く印象に残っています。作業に関しては、平田收正先生、徳山尚吾先生のお陰様で円滑に進められたと思います。本当にありがとうございました。

会場に着いた時は、とても学生には見えないオーラを纏った方々がいて、同じワークショップに参加される同年代の方なのか分からずに戸惑った覚えがあります。私が配属したIAは、全員が対等に意見を言い合えたのですが、仲良くなり過ぎて多少話が逸れやすかったです。

参加者は、全てを伝えきれなかったと思いますが、私自身がもっと精進していかなければならないなど思われた意見が多くあり、更に、私と同年代の方々と交流を深める事ができたのは、非常に大きな収穫でした。今回のワークショップで得た繋がりを大切にして、今後の励みにさせていただきます。

最後になりますが、ワークショップに参加する機会を与えて下さった諸先生方、今回のワークショップを主催して下さった松木則夫先生を始め、日本薬学会薬学教育の諸先生方に心より感謝申し上げます。

班名 IA 氏名 米田 尚子

今回、このようなワークショップに参加でき、大変有意義な時間を過ごすことができた。六年間大学で学んだこと、やり残したこと等を自由に話し合うことで、新たな自分の課題に気付くことができた。また、初めて出会ったメンバーとすぐに討論ができる、ということも、自分の成長を感じさせてくれるものであった。

“六年制薬学教育を通して、もっと伸ばしたかったこと、やり残したこと”、について話し合うことは、楽しく討論をしながらも、六年間を振り返って反省する点多かった。しかし、こうして自分に向き合い、またメンバーの意見を聞くことで、残りの半年間を有意義に過ごす為の課題や、今後薬剤師として、また一社会人としての課題に気付くことができた。特に、第三部では「自分達が前例になっていくのだから、精一杯やりたい。」「後輩に、“この程度努力すれば良い”とか“頑張っても無理なんだ”とは思われたくない。」という意見があり、六年間の学生生活で、どこか慣れてしまっ、日々の課題をこなしたり、試験勉強をするだけの毎日になってはいないか、と考えさせられた。このワークショップでの思いを忘れず、初心に戻り、気持ちも新たに、頑張っていきたい。

班名 IB 氏名 金照 智弓城

全国の国立・私立薬学部から、学生が一箇所に集った今回のワークショップに参加させて頂けた事をととても有り難く感じております。

自分の通う学校の中からでは出て来ないような貴重な意見や考え方を、他大学の学生から学ぶ事ができ、視野を大きく広げる事ができました。同じ薬学部でありながら、学校の方針、学生の目標、生活サイクルなどには、共通点や相違点が沢山有るという事を直に知ることができました。

第三部の総合討論では、薬剤師の地位を向上させるために、という議題が出ましたが、これに対する話し合いが金銭に関する意見に終始してしまい、具体的な改善策等について意見を出し合う事が出来なかったことは非常に残念でした。時間が無い事がこんなにも残念に思ったのは久しぶりでした。それだけこのワークショップが、私にとって刺激的で価値のあるものだったのだと思います。

全国の薬学部から学生が集うという事は、多くの支えがあって成り立つ事で、簡単な事ではないと思いますが、今後とも是非続けていって頂きたいと思います。

班名 IB 氏名 粗 恭子

とても印象的だったのは学生のやる気と実行力です。

司会や発表者などの役割が次々に決まり、あっという間に発表資料が作られ、アイデアを出し合いながら切磋琢磨する姿は、参加していた私自身も圧巻されました。班員が互いに協力しあい、それぞれの得意分野で力を発揮できた事は「チーム」を大切にしてきた6年制教育の成果ではないでしょうか。よく、近年若者が衝突を避けるため自分の意見を言えなくなっていると危惧されていますが、全くそういった場面は無かったように思えます。それは、相手の意見を聴く姿勢、さらにはアサーションを全員が態度教育で学び取ってきたからだだと思います。討論中に「薬剤師の地位向上」という話題が何度か登場しましたが、今回のように発言できる薬剤師が増えれば、自ずと信頼を得ることが出来ると思います。制度の改正なども必要だと思いますが、こうして今出来ることを積み重ねていくことも重要であると改めて気がつきました。

『6年制一期生として薬学教育に望むこと』というテーマで一日活発な討論を行い、全国から集まった同級生と意見交換ができたことは、とても良い経験になったと思います。

参加していた学生は6年制になったのだからこうありたいという目標や高い意識を持っている人がほとんどだと感じました。私はまず、授業や研究に追われる学生生活の中で、そういった意識がだいぶ薄れてしまっていたことに気づきました。卒業前に、他大学の同級生から良い刺激を受けたことや、これまでの大学生活について振り返り、将来を考えることができたことは、私にとって、非常にプラスになったと思っています。

また、学年が上になるにつれて、薬学教育について思っていることがあっても、普段の生活の中で、友達とこのような話をする機会も無くなっていたうえ、学生の声として正式にまとめて発信することはなかなか難しいことだと思います。だから、今回のようなワークショップという正式な議論の場を設けてもらったことはとてもありがたいことだと感じました。

そして何より、参加して良かったと思うのは、これから社会に出て頑張ろうという全国の一期生の仲間が出来たことだと思います。

全国学生ワークショップは2回目でしたが、全国の同学年の薬学部生と話ができるのは本当に良い機会になりました。

自分だけでは思いつかないような意見を聞き、他の大学の様子を知ることができて、自分の視野を広げることができたと思います。

最後の総合討論でも、たくさんの方が手を挙げていらしたので、もっと多くの意見を聞いてみたかったです。

私も総合討論で意見したいと思っていたことがありました。

薬学部の4年制課程についてです。

薬学部には6年制課程だけでなく、4年制課程もあります。

薬学研究者養成のための4年制課程ではありますが、私の友人の中には、編入など、様々な事情から4年制薬学部に進学・在学し、大学院に進学して薬剤師国家試験受験資格を得ようと思っている人、あるいは最初は薬剤師になるつもりはなかったが、あとから薬剤師になりたいと思ったという人もいます。

現状では4年制課程からでも、薬剤師免許をとることは可能だと聞いていますが、今後具体的にどのように進んでいくのか、まだよく分からないので4年制課程の学生は不安に感じているようです。

私たち6年制課程薬学部生だけでなく、4年制課程の薬学部の学生に対する配慮もしていただけたらと思います。

今回のワークショップへの参加を通じて、「自主性を伸ばす重要性」を学びました。学びたいことに
対し、受け身ではなく、積極的かつ自発的に行動することは、学生生活を充実させ、さらに、6年制卒
業薬剤師として歩いていく中においても必要とされることであると気付きました。また今回のワークショ
ップにおいて、自らの信念をもち、意見や指摘をはっきりと示すことができる、そのような方々との交
流を経て、もっと自分の「軸」をもち、しっかりと歩いていかなければならないと感じました。更に、
約5年半の大学教育において培われてきた「価値観」の長所・短所にも気付くことができ、大学の枠を
超えて、広く交流をもつことは重要であると思いました。今回学んだことは、できるだけ多くの学生と
共有したいと考えています。私自身も、今回のワークショップで得たことを大切に、6年制一期生とし
ての自覚をもち、責任と誇りをもって今後をしっかりと歩いていきたいと思っています。とても貴重な一日
でした。

また今後とも、全国の薬学生の交流がはかられることを切に希望致します。

最後に、今回のような貴重な機会を下さいました関係者の皆様に、深く感謝申し上げます。

1. 感想

今回のワークショップに出席して、他校の同級生が実務実習を通じて様々な思いを持ったことを肌で
感じ取ることができました。中には、「人の死を実際に見たことにより薬学を学び病気の人々の助けに
なりたい」という意見や、「入院生活を模擬的でいいから行い患者さんの気持ちを理解したかった」な
ど私には考えもしなかった意見も沢山ありました。このような意見交換ができたという点においても、
参加した意義は大きかったと感じています。また、討議以外にもプロダクトを作製する際に「相手に理
解してもらいやすいようにするためには、いかに工夫してゆくべきなのか？」などスキル面において、
グループ内の議論を通じて自身のレベルアップにもつながったと思っています。

2. 私の意見

当初ワークショップに参加しようと考えた経緯として、「様々な人々に出会い、考えの幅を広げるこ
とにより成長できるのでは？」と考えていました。事実、参加してみて様々な意見を聞くことができ、
考えの幅が広がったことは勿論ですが、同時に薬剤師としての未来を熱く語り合う仲間ができました。
また、「薬剤師として患者様の為に」という原点に戻り、改めて考える動機になったと考えます。

3. メッセージ

他学校の学生と議論を行うことにより、刺激を受け、高い志と高いモチベーションをもつことができ
ました。このようなワークショップを通して、私は成長をすることができたと考えています。後輩の方
も、機会があれば是非ワークショップに参加しては如何でしょうか。

第三部では、一部、二部よりも更に活発に意見が出されました。KJ法を用いたものではなかったことと、パワーポイントを作成しながらの討議だったので、余計にもっと時間がほしかったです。最も時間を割いて討議したのは、実務実習、4年制から6年制への移行についてです。実務実習に関しては、実習への意欲をより高めるためにも学生自身が実習先を選択する、1施設当たりの実習期間を短縮し、残りの期間は自分で選択した施設で行うなど、様々な意見が出されました。全員の希望通りにはいかないと思いますが、自分で実習先を選択出来れば尚意欲を持って実習出来ると私も感じました。

4年制から6年制への以降については、個々に様々な考えや意見があると思います。6年制になったことで実習に時間を多く割けるというメリットを生かすためにも、実習内容の充実は必須だと思います。意見に挙がっていました、4年制で国家試験を受験し、薬剤師免許を持った上で研修という形で2年間過ごすというのも案の1つだと感じました。

就職先の考えで、研究・開発→MR→→病院・薬局と位置付けている大学もあることを知り、非常に驚きました。私の大学では、進路に関してそのようなことはなく、学生の希望を尊重してくれます。

上記の様な考えを持っていらっしゃる大学の方から、第三部の発表の際に、進路に幅を持たせてほしいとの発表がありました。もちろん、この様に初めから位置付けているのはおかしいと感じますが、それに苦言を呈するだけなのは何か違うように思いました。自分の進む道は、誰かに言われて決めることではないと私は思います。この様なことに左右されずに自分の意思を強く持つことが必要だと思いました。

三部は、一、二部よりも更に活発で熱い討議が出来ました。又、発表者を務めさせていただき、発表をし、質問へ答えることでより積極的に参加することが出来ました。

今回のワークショップでは、全国の薬学生の6年制一期生としての意識の高さを知ることができた。6年制一期生として医療現場に出た時に患者のために何ができるのか、これからどのように薬剤師がチームの中で活躍していくのかを皆が真剣に考えており、自分の意識をさらに高めるきっかけとなるワークショップであった。

特に3部では、6年制薬学教育を経験してきた我々だからこそ議論ができるテーマであり、非常に有意義かつ意味のある討論だったと感じている。薬学教育を4年制から6年制にしたことに意味があったのか、6年制教育を受けた我々が医療現場に出た時に何ができるのかを皆がそれぞれの視点から意見を出し合い、議論できたことは非常に有意義なものであった。私は、6年制教育にした意味は、今後我々が医療現場で活躍することで証明できると考えている。4年制教育では身につけられないような知識や考え方を患者および他の医療従事者に提供し、我々が如何に医療現場で必要な職種であるかを積極的にアピールしなくてはならないと考える。

私は今回のワークショップを経験して、同じ志をもった同期とお互いに意見交換できる環境は非常に有意義だと感じた。そのためには今回のようなワークショップは今後も開催していくべきだと私は考える。

班名： IC 氏名 阿部 梢

今回のWSは、6年制一期生として未知数の存在である我々が、今後の薬学生の道標になるべく、責任感をもって自分の選択した道を進んで行きたいと再度認識することが出来た良い機会となりました。様々な考えを持つ様々な学生と触れ合える、貴重な機会を下さった方々に、感謝申し上げます。

今回のWSでは、「6年制一期生として薬学教育に望むこと」をテーマとしていましたが、全体的に、薬剤師としての進路を前提として議論が進んでいたように思います。

私は、6年制薬学教育を修学し、臨床現場の目線をもって医薬品製剤の研究開発に従事し、人々の命・健康・QOLに貢献することを自己実現としています。

与えられたテーマに対して、始めは、薬剤師という進路を選択したと仮定して、現在の薬学教育についてどう考えるか、という立場から議論に参加していましたが、途中からは、自分の研究者としての将来とそこから考える今後の薬学教育について意見を述べました。このような自分の選択や考えは、参加した方々の意見や考えとは様々な意味で相違がありましたが、他の学生がどのように将来を見据えて、どのように6年制教育に臨み、何を思ったかについて、議論を行えたことは、とても有意義であったと感じました。それと同時に、この議論をさらに深めてゆくことによって、これから後に続く6年制学生が将来を選択する上で少しでも貢献できたらと思いました。

班名 IC 氏名 宮坂 知幸

同じ大学の学生同士でも話し合う機会がなかなか無い内容の議論を、その日初めて会った学生と行うということは自分にとってとても刺激的で、また得たものもたくさんありました。でも一番感じたのは、全てにおいて与えられた時間が短すぎて、十分に議論することなく、あまり深いところまで共有せずに結論・発表してしまったという物足りなさです。せっかく全国から集めたのだから、議題を絞ってもっとじっくり話し合うようなプログラムにしてもよかったのではないかと思います。

1部～3部を通して様々な意見が出ましたが、僕は3部の内容がとても印象に残りました。それは、1部や2部の話は過去の話であり今更どうしようもないことですが、3部は未来の話であり、みんながこれから行っていく内容だからです。みんなが何をどう感じてどんな職業を選択し将来何をしたいのか、薬学教育をどのように改善したいのか、など夢のある話でとても楽しかったです。

また全体発表・総合討論では各班の3部の内容を知ることができ、とても勉強になりました。途中熱い議論が交わされましたが、その中で出た「自分でできることは大学側（他人）に甘えることなく自分

でやる」というスタンスに僕も賛成です。運悪く僕たちは一生一期生なので、社会に出てもそれを忘れることなく、全力で熱く頑張りましょう！

班名 IC

氏名 谷口 香織

短い時間ではありましたが、全国の6年制薬学部に通う同期と共に現在の薬学教育について活発なディスカッションが出来た事を本当に嬉しく思っています。普段、他大学の学生と交流し教育について真剣に考える機会は無いので、今回非常に良い場を設けていただき、かつ参加させていただき貴重な経験だったと感じています。

他大学と自身の大学のカリキュラムの違いや、考え方の違い等の発見が出来た事と共に、改めて自身の学生生活を振り返りどの様な事を学んできたのか、やり残した事は何か、今後やっていくべき事は何か等、様々な事を考える事が出来ました。

それぞれの大学・個人によって考え方や進んでいく先は違いましたが、現状に納得していない事、さらに薬学部・薬剤師をより良いものにして行きたいと考えている事は、全学生に共通して言える事ではなかったかなと私は感じました。更なる向上を目指して行く為の方法は様々あると思いますが、私は今の自分に出来る事・今後していくべき事をそれぞれの学生が周囲の人を巻き込みながら、また次へと受け継ぎながら実行し続けていく事が大切なのではないかと考えています。また、受身の姿勢ではなく自ら発信できる事を個々で少しずつ行う事が重要で、難しい事だと私は考えています。

今回は非常に貴重な機会をありがとうございました。

班名 IC

氏名 小倉 良太

初めて顔を合わす他大学の多数の同学年生とともに、共通のテーマについて話し合うことにより、各大学・各地域によって「薬学教育」に差が生じていることを実感しました。

国公立大学と私立大学の差ということではなく、実務実習・事前実習の内容に差が生じているため、ワークショップでは「教育内容の統一性が望まれる」という趣旨の発言が多かったように感じます。

また、4年制から6年制へ変更されたことの意義も各学生によって考え方に差があり、今後「教育」の中でいかに「6年制となったことの意義」を学生に学び・感じ取らせるかが今後のカリキュラム編成においては必要だといった趣旨の意見も多く出されたように感じます。

新しい薬学教育において、6カ年の薬学教育をいかに医療現場に則した内容にしていけるか、いかに地域差を少なくするような教育内容にするのか、が今後の大きな課題であると感じました。

個人的には、他大学の同学年生と話す機会などこれまでなかったもので、非常に有意義な時間を過ごさせていただいたと感じております。

班名 IC

氏名 矢部 晴香

今回、第1回全国学生ワークショップ「6年制一期生として薬学教育に望むこと」に参加させて頂き、他大学の薬学生の皆様と三つの議題（第一部：6年制薬学教育を通して成長したこと、第二部：6年制薬学教育を通して、もっと伸ばしたかったこと、やり残したこと、第三部：6年制卒の一期生として取

このワークショップで様々な学校の薬学生と話すことができ多くの刺激を得ることができました。このような機会を作っていただきありがとうございました。また一緒にワークショップに参加した薬学生の皆さん、ありがとうございました。

班名 II A 氏名 須藤 迪依

第三部の全体発表と総合討論では、第一部、第二部とは違い多くの人の意見を聞く事ができたと感じています。一人ひとり考えは違うし、学習環境や生活環境も異なるため、多くの意見を聞くことで、自分の考えやチームの考えに無かった意見を共有できたと考えています。特に印象に残っていることは、「4年制と6年制でなにが違うのか」という疑問でした。第一期生である私たちが卒業し現場に出て初めて、なにがどう違うのかを具体的に実感できるのではないかと私は考えています。この機会に出会った多くの仲間とこれかも情報交換や意見交換を行い、後輩に伝えていくことが私達の大きな役割だと感じました。また、総合大学では、医学部、看護学部、薬学部等の学生同士でグループを作り、症例検討を行っている大学があることを初めて知りました。このような他大学の取り組みを知ることは、良い刺激となりました。

なお、チームの仲間とは話すことができましたが、チーム外の学生とは話す機会が少なかったので、フリータイムを設けて欲しいと思いました。今後もこのような機会を設けることで薬学部生の交流を深めていけると良いと思います。

班名 II A 氏名 山口 奈美子

薬学科に所属していながら、「くすり」や「薬剤師」とはほぼ無縁の基礎研究中心の生活を送る私にとって、今回のワークショップは発見と驚きの連続だった。病院・薬局実習を終えて1年になる私は早くも薬の知識が抜け、当時のことをなつかしむ気持ちでいたのに対し、「実習は先週終わったばかりだよ。」と話すYちゃん。国試対策用に研究室のお休みを1か月いただくことを「長過ぎるかな・・・」とまだ迷っている私に対し、「9月から半年間はずっと国試対策の授業があるよ。」と言うHちゃん。久々に私自身は6年制1期生なんだな、という実感を持つことができた。1期生という同じ道の上を、たくさん笑ったり、悩んだりしながら進んできた仲間と話ができた1日は、とても楽しいものだった。

その皆が共通して持っていた疑問で、最も印象に残っているのが「6年制になって何が変わったのだろうか？」ということだった。カリキュラム上では1つに実務実習の導入がうたわれているが、4年制のときから1～2か月の実習を受けることができた大学もあり、それで十分ではないかという意見を聞いた。また、もう1つとして卒業研究が新たに導入されたが、これについても「十分にできなかった」「実際に研究をせず、文献をまとめるだけで卒論を書く選択肢もある」という物足りなさを訴える声が多かった。制度が始まったばかりで、カリキュラムと薬学教育の現場に大きな溝があることは否定できない。

しかし、私たちの班では「1期生の看板は一生背負っていく。だから私たちが6年制薬学部が存在や意義を広めるために頑張っていこう」と確認しあうことができた。

来年度から就職する仲間がほとんどだった今回のワークショップの中で、研究を続けるために私は博士課程へ進む。今回得た課題や発見を忘れず、皆のやり残した分まで研究に打ち込みたいと思う。そしてこれからも、1期生として誇れる学生や社会人であり続けたい。

班名 II A 氏名 服部 友哉

ワークショップを終えて、私はとても厳しいものだったと感じた。初めて会う、繋がりが薬学部6年生だけの8名の班。その場で与えられた議題についてその個人個人が意見し、討論し、協力してまとめて班ごとに発表。これを朝から一日3セット。私はワークショップに参加することが決まってから、自分の大学の学生数十人にアンケートをとって、6年制薬学部についてたくさん意見をもらってきた。時間が限られていて、新たな場所で、私はそれらを伝えきれなかった。素早く的確に強く発言する力が足りなかった。力強く発言している人を見て圧倒されたりもした。とはいえ、他の大学の仲間も同じように感じていたことが意外とたくさんあり、新たな目線の意見を聞くことができ、非常に有意義であった。最後に、これは少し歪んだ捉え方になってしまうのかもしれないが、今回のようなワークショップはどんなアンケートをとるよりも効率的で質の高いものとなると思った。各大学の代表者が真剣に意見し、さらに討論してすでにそれらがまとめられているからである。

班名 II A 氏名 白石 奈緒子

今回、最も私の心に残ったのは「一生一期生」という言葉だ。6年間の薬学教育課程修了を前に、今まで試行錯誤の中カリキュラムをこなしてきた日々を思い返すと、私の胸には「一期生」として今後薬学を志す後輩たちの道標となれた達成感と安堵感があった。しかし、今回のWSで出会った同じ一期生のメンバーと話しているうちに、私は今まで見過ごしていた重要な点に気づくことが出来た。それは“卒業がゴールではない”ということだ。今年度の3月、私たちは大学を卒業し、社会に出ていく。けれども、卒業しても「一生一期生」としての自覚を持ち、やはり後輩たちの道標となっていかなければならないと強く感じた。社会に出てから、後輩の為に道を切りひらくということは決して容易ではないと思う。けれども、私は今回のWSで、“私は1人ではない”とも感じた。住んでいる地域や卒業後の進路は違えども、6年制薬学部の卒業生として私たちにしか出来ないことをし、社会に認められたいという思いを同じくする仲間がいる。この一期生の仲間がいるのなら、この先大変なことがあっても乗り越えて行けると確信している。

最後に、重要なことに気づかせてくれたII A 班のメンバー、タスクフォースの方に感謝致します。

班名 II A

氏名 森川 花絵

私はこのワークショップに参加し、議論を通して全国の薬学生と様々な意見・情報交換することができました。また全国の薬学生と触れ、自分のモチベーションを高めることができました。私は特に後者が今回一番の収穫ではないかと感じています。

私の大学は私立であり、やはり一番は国家試験対策で、カリキュラム以上の講義や研究には力を入れず、薬剤師を変えるという意気込みは正直あまり感じられません。そのためか同学年の学生も国家試験に通る事が目的となっており、これからの薬剤師について語り合える人も少なくモチベーションが中々上がらないでいました。このワークショップを通して、同じ様な思いを抱く人は多くいることを知り大変嬉しく思っています。

ただ、今回特に国立大学の薬学生中心の素晴らしい話を聞くことができました。しかし、より少人数でより企業・研究の道に進む国立大学の薬学生よりも、より大人数でより病院・薬局の道に進む私立大学の薬学生の方が薬剤師として社会に与える影響は大きく、私は私立の薬学生が変わらない限り、薬剤師は変わらないのではないかと考えています。今後より私立大学薬学部に焦点を当てた議論も願います。また今後、私立卒の自分に課せられたものもあるのではと感じています。今回私達のグループが行き着いた“一生一期生”の言葉を胸に、これから薬剤師として多く貢献できればと思います。

班名 II A

氏名 角陸 舞

今回参加させていただいたワークショップは想像以上に楽しく、様々な境遇の学生と意見交換をすることにより世界が広がり、自分自身にとっても大きな影響を与えてくれるものとなりました。

第三部での発表では、私を含め多くのグループが言いたいことの全てを伝えることはできなかったと思いますが、薬学に留まらず世界に目を向けて英語やその他様々なことを学びたいという思い、薬剤師の地位の向上への思い、自分たちの経験から後輩にもっと有意義な実習・学生生活を送ってもらいたいという熱い思いはアプローチの仕方は少し違えども、どのグループにも共通している思いであるという印象を受けました。参加者全てに『一生一期生』という自覚、自分たちが行動を起こさなければという責任感も強く感じました。報告書のほうに私達の意見・提案が全て記されていますので、薬学教育に関わる方、学生全てに目を通していただくことを望みます。

また、同じグループの方達とは地域だけではなく将来進む道も様々で、とても有意義な時間をもつことができました。私は彼らの考えに尊敬し、本当に出会えてよかったと心から思います。私達が一期生として社会にでてからも、また意見交換をする機会をぜひ設けることができればと強く願います。

班名 II A

氏名 中嶋 智治

今回のワークショップに参加して、初の6年制薬学教育で何を学んできたのか、何を学ばなかったのか、今後どう改善していくべきかを自分自身で振り返ることができたのと同時に、自分以外の薬学生がどのような考えを持っているのかを聞き、それぞれの考えを共有することができて非常に刺激を受

けた。特に私が印象に残っているのは、全体討論の際に話題の一つとなった「薬剤師の地位の向上」についてである。「薬剤師の地位の向上」というのは何をもちいて地位の向上というのか？という問いかけに対して様々な意見が出た。皆が今後の「薬学部」「薬剤師」はどうあるべきかという自分たちの理想像を持っており、「薬学部」「薬剤師」に対しての熱い思いや愛情を強く感じた。グループ内の議論の中では「臨床に近い学習をもっとやりたい」という意見が多く、学習意欲の高さを強く感じた。6年制薬学教育に変わり臨床に強い薬剤師が望まれるのであれば、臨床現場で学ぶチャンスを更に増やしても良いのではないかと私は思う。今回のワークショップを通じて、薬学部の学生であることに誇りを感じるようになったのと同時に、社会に出て活躍したいという想いがより一層強くなった。

班名 II A 氏名 佐々木 将太郎

チーム討論時、5月で卒業研究を終えた大学があると聞き、たいへん驚いた。3月末まで実務実習に行っていたことを考えると、学生一人一人が満足できる研究が行えたとは思えない。そもそも薬学教育が4年制から6年制に移行したのは、薬剤師の大半が研究を行っておらず、成果を残してこなかったために、今の薬剤師は仕事をしていないと国に判断されたことが理由の一つに挙げられる。臨床教育の充実を計ると共に、研究ができる薬剤師を育成することが大学の目標であり、負うべき責任ではなかったのか？6年制薬学教育課程が完成年度を迎えることになるが、本当の意味での完成はまだまだ先である。

総合討論時、「薬剤師の地位」について様々な意見が挙げられたが、私が考える「薬剤師の地位」は政治力である。明治から始まる日本の薬剤師の歴史は、薬系議員が医系議員に負け続けた歴史に等しい。辛うじて通した法案も骨抜きにされたものであり、かつて薬学の発展に尽力した人々が涙を呑んだ苦い歴史がある。明治時代、東京大学から始まった薬学教育も、現在では60以上もの大学で行われている。しかしながら、医系議員と対等に戦えるだけの力をもった薬系議員は極めて少ない。薬学教育の6年制への移行によって、有力な薬系議員が数多く輩出されることを望む。

ある学生の「経営やその他のことを学ぶ必要はない。薬剤師は薬剤師の仕事のことだけ学べばいい」という発言を聴き、強い違和感を覚えた。チームの一員であることが求められる医療従事者は、立場が違う人々との相互理解が重要となる。そのため薬剤師は、独り善がりで見識の狭い人間よりも、幅広い知識を持った、より多くの人に寄り添うことのできる人間でなければならない。学生時代というのは様々な知識を得る絶好の機会である。

また、経営学は今後の薬学教育に大きく関わってくると考えられる。国が進める医薬分業によって、私の地元では分業率が80%を超えるまでになった。しかし、その結果深刻な問題も生じている。一つは、後継者不足である。数多くの薬局が乱立し、一人薬剤師の店舗が急増した。そのため、現在では薬剤師の高齢化に伴い、後継者の争奪戦と薬局間の潰しあいが始まっている。もう一つは薬剤師免許を持たない開設者（経営者）と現場で働く薬剤師との摩擦である。これらの問題により、今後は分業率の低下が予想される。そもそも薬局運営ガイドラインには、開設者は薬剤師であること“が望ましい”とある。

政治力の弱さから“が望ましい”となっているが、上記の問題はいずれも経営を学んだ薬剤師が薬局を運営することで解決するのではないだろうか。

班名 Ⅱ B 氏名 瀬川 良佑

第三部全体発表と総合討論を終えて一番すごいと思った事は、六年制第一期生の皆が現在の薬剤師の仕事・地位に満足せず、さらなる役割の拡充、地位の向上を目指しているということです。地位の向上に対する各々の定義は違えど、目標としている場所は皆同じであるということに感動しました。この志の高さを生みだして来たのが現在の六年制薬学教育の大きな成果であり、今までの四年制教育と異なる点であるのだと思います。薬剤師の地位向上は、病院や薬局で働く人だけでなく、大学側から研究支援を行う人や、法律を変えていく人、病院内の制度を変えていく人が必要であり、それぞれの人達が連携をとっていくことで達成されていく目標なのだと言論や発表を通して感じました。自分自身がどのような形で目標達成のために貢献したいのか、そのために今自分ができることは何なのかをよく考えようと思います。今回のワークショップではそのための活力をもらったと感じており、参加できたことにとても感謝しています。

班名 Ⅱ B 氏名 宮本 千賀子

今回、このワークショップに参加することで、多くの良い刺激を受けることができ、残りの学生生活や、今後の薬剤師活動へのモチベーションをより一層高めることができたと思います。6年制の1期生として、不安なことも多いですが、今回のワークショップで、6年間で多くのことを学び、考え、実践することで、医療に携わる一人の人間として様々な成長ができたということ、また、まだまだ足りないところがあるということを実感しました。また、患者さんのため、社会のために、これからの薬剤師の職域拡大やレベルを上げたいという目的意識の高い多くの学生と交流が持てたことは、私自身に大きなプラスとなりましたし、この体験を他の学生や後輩に伝えられたらいいなと思いました。「一生一期生」であることを忘れずに、何事にも積極的に取り組んでいきたいと改めて感じました。

最後になりましたが、学生の意見を薬学教育にとりいれようと、このようなワークショップを開催してくださった日本薬学会の皆様、また、各大学の諸先生方、本当にありがとうございました。

班名 Ⅱ B 氏名 彦坂 一成

これまで私は、6年制薬学部第一期生として社会から受ける期待や責任は大きなものであると、漠然と感じていました。しかし、具体的に自分がこの6年間で何を学び、何ができるようになったのかを深く考える機会は少なく、自分がその期待に応えられるだけの人間に成長できたかは疑問でした。そのた

め今回のワークショップは、6年間の自分を振り返ること、また、他大学の人の意見を知ることができた、大変良い経験となりました。

今回の討論を終え、医療人として大切な倫理観を養うことができた一方で、まだまだ薬剤師としての知識が不十分であり、薬学以外の分野に対する視野も狭いことが分かりました。これは、大学生活の中で日々目の前に迫る試験や課題、レポートをただ黙々とこなしてきただけで、自ら積極的に学ぼうとする姿勢が足りなかった結果であると、私は考えています。

学生でいられる時間も残りわずかになってしまいましたが、残りの時間は、どんなことにも主体的に取り組んでいく努力をし、薬剤師や人間としての幅を広げていきたいと感じています。そして私たちが、6年制を卒業した薬剤師はここまでできるといった基準を、社会に対して示すことができたらと考えています。

班名 II B 氏名 倉持 智美

私は今回初めてこのようなワークショップに参加させて頂きました。私にとって一番の収穫は、同じ薬学部に通う、そして同じカリキュラムを受けてきた仲間と交流を持ち、お互いの意見や考えを知ることが出来たことです。6年間で、私は他大学の薬学部の学生と知り合う機会があまりありませんでした。そのため、他大学ではどのような授業や実習を行ってきたのか、また大学によって大きな違いがあることを初めて知りました。さらに授業や実習の捉え方、考え方も異なり、視野が広がりました。同時にもっと早く知っていれば、自分の大学に対してこんなことを学びたい、経験したいと提案出来たかもしれないとも思いました。

もう一つ私が今回感じたことは、参加した学生が皆、自分の意見や考えをきちんと持っており、とても意識が高かったことです。自分達は6年間で何を学んだか、それを今後どう活かしていくべきかといったことに各々がしっかり向き合い、考えを持っていました。そのためグループ討論も充実し、また私自身刺激を受け、改めて身が引き締まりました。

最後にこういった機会は今後も設けて頂きたい、そして後輩達には積極的に参加して欲しいと思いました。

班名 II B 氏名 小山 理那

今回のワークショップに参加させて頂いて、自分の学生時代の過去と現在を見つめ直したり、6年制の1期生として今後どのように歩いていくべきかを考える良い機会となりました。

私、個人としては長期実務実習を重要視して欲しいと思います。幸運なことに、私は実習施設に恵まれ非常に充実した、貴重な時間を過ごさせて頂きました。実習期間は自分の将来を考えることができます。実習に行く前、私は薬剤師になりたいとは思っていませんでした。しかし、実習先で出会った薬剤師の方々と一緒に過ごさせて頂いて、患者さんに対する温かさや仕事に対する情熱を傍で感じ、薬剤師は素敵な仕事だと改めて実感しました。そして、私もこんな薬剤師になりたいという目標が出来ました。

よく薬剤師の地位向上という言葉を聞きますが、それにはまず薬剤師自身が自分の仕事に対して誇りと情熱を持って向かうべきだと思います。そういう薬剤師の存在が周りの薬剤師に良い影響を与え、実習にきた学生にも薬剤師の素晴らしさが伝わり目標が出来る。そして、高い志を持った薬剤師が次々に生まれる。こうした、一つの良い刺激がみんなに伝わり循環され、一人ひとりが薬剤師として成長していければ、薬剤師の地位の向上ができるのではないかと思います。

私も今後、社会に貢献できる、そして後輩にいい影響を与えることができるような薬剤師になりたいと思います。

班名 II B 氏名 山下 みづ穂

今回のワークショップでは、参加者全員の意欲が高く、6年制一期生の熱い思いを感じることができ、大変楽しい時間を過ごせた。個人的にはもっと積極的に発言すべきだったという反省点もあり、今後の課題にしていきたいと思った。

日常ではなかなか機会のない他大学の学生との意見交換は大変有意義であったが、時間に限りがあり主に班内のメンバーとしか話ができなかったのは少し心残りである。しかし、全体討論の時間を通して、他大学の方のおおまかな考え方を知ることはできたとし、6年制一期生として掲げている目標及び方向性は、みな同じであるように感じた。議論を通して、将来目指すべく薬剤師像がより明確になった。同時に、医療の第一線における薬剤師の存在意義の確立には、絶え間ない自己研鑽が必要であると感じた。今回挙がってきた薬学教育に対する課題は、是非、学部教育あるいは実務実習にフィードバックして活かして頂きたい。また、このような場は参加者の視野の拡大・モチベーションアップにもつながるので、どんどん設けてほしいと思う。今後は、自分自身でも学会・シンポジウム等に足を運び、人脈を広げる、あるいは新しい知識を吸収する努力をしていきたい。

班名 II B 氏名 野口 知里

ワークショップに参加して驚いたことは、皆が自分の考えをしっかりと持っていて、それを外に向かって発信していることでした。自分の大学の特色を知っていたり、NPOなどが主催する勉強会に自主的に参加していたり、先日の東日本大震災のボランティアに参加していたり、と自らアクティブに活動しており、自分が薬学部生として感じていた世界はまだまだ狭かったということと自分から世界を広げようとしていなかったことを思い知りました。グループ討議のなかのひとつの話題をとっても、様々な意見が出てきて話がつながっていき、昼食の時も議題以外のことで話が続き、充実した時間を過ごせました。

同年代の薬学部生がこんなにたくさん考えて、訴えかけているということはワークショップに参加していなければ知らないままだったかもしれません。このような活動を知り、参加したり、行動をアピールすることも薬学を盛り上げていくために必要だと思います。

6年制教育の第一期生というのは一生ものです。今回のワークショップに参加して、これから薬学への認識は私たちが作っていくという自覚を持ち、広くアンテナを張ってこれからの生活をしていきたいという思いが強くなりました。まずは、残りの大学生活を悔いなく過ごしたいと思います。

班名 II B 氏名 徐 勇

今回のワークショップでは全国の薬学部の学生とコミュニケーションをとることができ、全国の薬学生が5年以上過ごしてどう感じたのか、また自分自身はどのように感じていたのかをあらためて検討し、述べることでとてもよい経験をさせてもらえたと思っています。

私自身は病院・薬局実習を行うまで基礎課程で学習した内容が現場でどのように必要なのか具体的に知ることができなかったが、早期体験学習などで実際に聞くことや体験することができれば、授業への取り組み方や日々の過ごし方もまた違ってくると思った。また、そういったことをできるようなシステム作りなどをしていく必要があると感じました。また、今回は6年制1期生として今回のワークショップがあったが、薬学会として全国又は地方ごとで定期的に今回のような活動を行ったりしていけると良いのではないかと私自身思いました。

最後に今回、私は縁あってこのような企画に参加することができました。今後このような活動があるのかまだ分かりませんが、後輩の皆さんは自らアンテナをはって積極的にいろいろな催しに参加してみてください。

班名 II C 氏名 青木 里美

各大学から「6年制卒第一期生としてこれからの薬剤師業界、医療業界を引っ張っていきたい」と意欲のある学生が集まっていたので、問題点や課題、今後の目標についてそれぞれの思いをシェアし、お互いに刺激を受けることができた。

各グループそれぞれの色が出て、とても有意義な話し合いになったので、このことは他の明薬の同期生はもちろん、これからの薬学部を引っ張っていく後輩たちにもフィードバックしたいと思っている。私も高い意識を持って薬学を勉強し、活気と充実で満ちた大学生活を送ることができるようになるよう努力しようと改めて感じた。

それから、熱い思いを持った友達もたくさんできたので、これからもこのつながりを大切にしながらお互いに切磋琢磨していきたいと思っている。

最後に、このようなすばらしい機会を与えてくださってありがとうございます。

私は将来、臨床薬剤師ではなく臨床開発職として働きますが、「一生一期生」として社会にどのような貢献ができるのかを考えながら行動したいと思いました。

私は薬局実習やその他イベント等を通じて、首都圏内の薬学生と交流する機会が多く、他大の学習状況もある程度把握することができ、またそうした仲間達と互いに切磋琢磨し合いながら5年半の薬学生としての生活を送ることができました。しかしながら、本ワークショップを通して、大学間交流の頻度に地域差があること、実習の受け入れ先の数に差がある等、首都圏の薬科大学とは異なる環境に置かれた学生がいるという現実を知ることができました。それ故に、我々は後輩達のためにも、平等な教育を受けることが可能な環境を整備していく必要があるという使命感を感じました。

本ワークショップでは、普段大学内にいるだけではなかなか味わうことのできない、学生同士の熱い思いに触れることができ、非常に有意義な一日を経験させていただきました。互いに刺激し合うことで、各個人が成長し、再び刺激を与えていくといった「刺激⇔成長」のサイクルを保ち続けることは、日本の薬学会をより良くしていくためには重要な手段であると感じました。初見にも関わらず、活発な議論を交わし、意識の共有化を図ることができた仲間達に出会えたことは、私自身の今後の成長の大きな糧になると感じました。

このような貴重な機会を提供して下さった日本薬学会薬学教育委員会の先生方、第1回全国学生ワークショップ実行委員会の先生方、並びにII C 班のタスクフォースを担当して下さった石井伊都子先生に厚く御礼申し上げます。また、II C 班で共に熱く議論を交わした仲間達に深く感謝いたします。

第一回全国学生ワークショップに参加して、自分自身をもっと薬剤師になるために勉強し、もっと成長していきたいと改めて感じました。今回、他大学の同じ志をもつ仲間と出会えたこと、そして6年制薬学部の第一期生としてさまざまな課題を話し合うことでこの思いがとても強くなりました。

私の班(II C 班)は、薬剤師の将来・今後について情熱を持ったメンバーが多く私自身もそのような仲間と今回のようなテーマについて話し合うことができとても充実感を感じています。大学では、今後薬剤師過剰時代が来て薬剤師が世の中から溢れてしまうなど心配な話を聞くことがあります。しかし、今回のワークショップを通して今後自分自身がどのような薬剤師になっていきたいのか？また過剰時代になってしまうからこそ薬剤師として仕事に対して信念を持ち理想とする薬剤師に近づくように努力しなければいけないと感じました。情熱あふれる他大学の学生と話し合うことで薬剤師の将来は過剰時代など悲観するようものではなく、6年制になったのだからこそ周りの薬剤師の方や医療従事者の方々に6年制にした意味があった・6年制にしてよかったと思ってもらえるように自分自身が行動し臨床現場で活躍していきたいと感じました。また、それが私たち6年制第一期生の責務であるとも感じました。

私の大学は県内に薬科系大学が一つしかなく、他の薬科系大学の学生と今まで関わる機会がなく今回のような機会は初めての経験でした。今まで他大学との交流といったものに対してあまり意識したことはありませんでしたが、このワークショップを通じてもっと他の大学と交流し実習・授業・卒業研究のこ

となどさまざまな意見交換をしていきたいと感じました。また、情報交換をしていくうちに都市部での就職活動状況と地方での状況は少し異なり、自分の住んでいる地域だけではなくもっと視野を広げていきたいと感じました。

私は、5年時の長期実務実習にてさまざまな経験をさせていただき、指導薬剤師の先生にも恵まれ充実した長期実務実習となりました。この実習を終えて、薬剤師として臨床の現場で働きたいという思いが強くなりました。しかし中には、実習は満足するようなものではなく、かえって将来臨床の現場では働きたくない…と思った人がいるのも事実です。6年制にしたメインはこの長期実務実習だと思います。将来臨床の現場で働く人や、そうではなく企業などで働く人にとってもこの半年間の臨床の現場での経験というものはとても貴重だと思います。そのため、この実習がすべての薬学生にとって満足いくものだったと思ってもらえるようにしてもらいたいです。

このような貴重な機会を与えてくださった日本薬学会の先生方・タスクフォースの先生方にお礼申し上げます。

班名 II C 氏名 林田 佳愛

ワークショップに参加するまでは、正直、そんなに充実した日にならないだろうと思っていましたが、今回のワークショップは私の考えていたよりも遥かに充実していました。普段は同じ大学の友人としか話をしないので、同じ環境で同じ様に勉強してきた人との情報交換しかできませんでした。しかし、このワークショップを通じて、他大学の人と話をすることで、他大学の情報や色んな人の考え方・意見を聞くことができ、すごく勉強になりました。また、薬学部六年制の意味を再確認することによって、残りの学生生活の過ごし方と卒業してからの自分の在り方を考えることができました。そして、同じ班のメンバーとは1日限りではなく、これから先、社会人になっても情報交換をして、薬剤師の質の向上に積極的に関わっていこう。と約束を交わし、今まで以上に薬剤師として働くことに意欲が湧いてきたことを嬉しく思います。

最後に、ワークショップを開催していただいた関係者の皆様にとっても感謝しております。このワークショップで得たものをベースに、よりよい薬剤師を目指し、日々頑張っていきたいと思います。ありがとうございました。

班名 II C 氏名 山本 将太

私は今回のワークショップに参加して、医療従事者になるという意識が向上し、より学びたいという意識が強くなりました。ワークショップでは、大学内の友達の中にはない考えを持った意識の高い人が多く、他の大学の現状も含めて知ることができ、非常に有意義な時間を過ごせました。

ワークショップでは三部構成で、過去、現在、未来のように筋道を立てて議論を進めていきましたが、「今後の六年制薬学教育に望むこと、今後取り組んで行きたいこと」の討議の中で、実習場所や実習時

期の希望選択に関することや、今後臨床現場に立ちながら教育を行える薬剤師になることなど自分が考えていることを他にも考えている人がいて、意見を聞き非常に参考になりました。

現在薬学部では、医学部などのように臨床現場で働くと同時に、大学の教壇に立つ先生が少ないですが、より臨床に近く、現場に出たときに即戦力として働ける学生を育てられるように、自分もそのような薬剤師になりたいと思っています。

六年制の薬学教育をより良いものにしていく上でも、大学を越えた情報交換、共有を図る上でも今回のようなワークショップは定期的で開催してほしいと思います。

最後に、今回のワークショップ開催に関わり、貴重な経験をさせてくださった関係者の皆様に深く御礼申し上げます。

班名 II C 氏名 水谷 翔

今回のワークショップは、元々は生まれたばかりの6年制薬学教育が抱える課題を学生目線で抽出することが目的であったが、参加した学生にとっても他大学の学生との交流・議論を通じて大いに刺激を受ける良い機会になった。例えば、多くの薬学部、薬科大学が集まる都市部とは異なり、地方の大学の学生にとっては他大学との交流が極端に少なく、本学のように全員が附属病院で実習を行う大学では、実習施設間の違いについて議論することさえ難しい。今回の機会がなければ、気付かないまま見過ごされていたかもしれない課題について考えることができたのは大変有意義だった。また、同じ班のメンバーとは初対面だったにも関わらず活発かつ率直な意見交換を行えた。これは、各々が日頃から自分で考え、自分の意見を持っていたからこそできたのではないだろうか。議論を通じて、自分の何が通用し、どこに甘さがあるのか再認識できたのと同時に、他大学にも志の高いメンバーがいることに勇気もらった。ここで出会った仲間との縁を大切に、いつか一期生同士で新たな動きを仕掛けていけたら面白いと思う。この素晴らしい機会を後輩たちにも経験して欲しいと切に願っている。

班名 II C 氏名 島田 紘明

私は今回のワークショップに出席し、全国の同学年の薬学生の仲間達と討論を行い、全国に自分と同じように「志」や「現状への危機感」を有する仲間がいることが確認できたことが何より収穫でした。

私は、まだ現状の薬学教育では六年制となった利点が生かし切れていないと感じていました。第Ⅲ部で他の班の方が言っていたように、自分から学ぶ姿勢を持たない限り六年制となった意味がないと思います。ただ、すべての学生が学ぶ意識を自ら高く持つということは困難だということも、現在の自分の大学の状況から理解できています。そのため、今後の薬学教育においては、より多くの学生が興味を持って学べるように幅広い分野での教育が重要なのではないかと思います。具体的には、現役として薬局や病院で働く薬剤師の方に非常勤講師として1か月に1度でも薬局や病院の薬剤師業務内容や、最新の

医薬情報、現実のチーム医療について講義を行ってもらったり、FDAの新薬承認など海外に目を向けた講義を行うことが良いのではないかと考えています。また、薬剤師のグローバル化を促すために国家試験に一部英文の問題（薬学に関する）を出題するなどということも非常に有効ではないかと思えます。

今後の薬学の発展のためにも、私たち六年制課程の第一期生が能力を示すとともに、今後の課題を明らかにしていかなければならないと感じました。自分自身の成長が、薬学全体の発展に関与することを意識しながら今後も努力していきたいと思えます。

班名 II C 氏名 大嶺 彩

今回このようなワークショップに参加して、私自身のモチベーションが上がりました。全国の薬学生との交流を通して、志の高さ・情熱を感じる事が出来、私達の思いは一つなのだと思えて感じた一日となりました。

私は地方の大学、西の端の大学に通う中で、全国の薬学生との交流はなく、このようなワークショップが開催されて、とてもうれしく思いました。6年制卒一期生であるという自覚を持ち、これからの薬剤師の職域の拡大、質の向上等、私達がすべき課題は数多くあると再認識しました。私達が力を合わせて課題をクリアしていくことで、将来、薬剤師という職業がどの分野からも信頼されるものになると感じました。他大学の仲間と同じテーマで意見交換できることは、私自身の成長にもつながり、同じ思いを共有できる貴重な時間・空間だと思えます。

「本ワークショップを通して一番感じたこと」、それはもっとこのような機会を増やして欲しいということです。今後もこのような交流の機会を通して、互いに切磋琢磨していけたらと思えます。

最後に、今回のワークショップの開催にご尽力いただいた、すべての関係者の皆様に厚く御礼申し上げます、また一緒に参加した全ての仲間に感謝致します。

班名 II D 氏名 高橋 明日香

8月4日大阪大学中之島センターにて、第一回目の記念すべき全国学生ワークショップが開催され、全国の薬学部から代表学生が一同に集結した。

決められた同じ6年制のカリキュラム・SBOを受けてきたので、各大学ごとにそれほど差は無いかと思っていたが、話しが掘り下がっていく内に様々なカラー・特色を持っていることに驚いた。内容は違うがどの大学も、学生が声を上げ中心となり新たな活動を始めたり、規則を変え学校を動かす原動力となったりと、学生の熱い気持ちや勢いを感じた。

4年間の学生生活が2年間延びたことで、学習の場が増え知識の向上へ繋がっただけでは無く、6年制になったことで、又自分達はその第1期生であるということで、自分達で道を見つけていかなければならない、そして、そこで得た教訓を活かしより良いものを後輩達に残していこうという自覚が芽生え、人間としてもひと回り成長できたのではないだろうか。

第3部の全体発表では、時間が足りなくなるほど多くの学生から意見があがり熱い熱いワークショップとなった。

全チームの発表を聞いて、それぞれ意見はあるが核となっている本質の部分は、皆似ている様にも感じた。今回のように全国の大学間をまたいだ討論の場は、多くの活きた生の声がかきける大変貴重な会である。来年度からも全国の薬学生間で意見交換する場をもっと設けていけば、更により良い薬学教育に繋がっていくと思う。6年間の大学生生活最後の夏に、とても有意義な時間を過ごすことができた。このような場を与えて頂き、ありがとうございました。

班名 II D 氏名 曲山 佳代子

ワークショップを終えて

6年制薬学教育の目的は臨床に強い薬剤師を育成することにある。それを目的にコアカリキュラムも制定されたが、各大学で授業内容は大きく異なる事が今回のワークショップで分かった。

私の大学では、CBTやOSCE対策、国家試験対策の授業の割合が多く、臨床的な知識や技能の習得が疎かになりがちである。一方、他大学では症例検討や処方解析などのディスカッションだけでなく、医学部生との合同授業もあり、他の薬学生との力の差を感じた。

6年制薬学教育のメインである実務実習は施設によって差があり、実務実習の質という面で大きな問題となっていた。しかし、実務実習というチャンスを学生がどれだけ活かせるかは、授業でどれだけ臨床で使える知識が獲得できるか、という点によるところが大きいように思う。

今後は6年制薬学教育を行うすべての大学で、「学生が臨床で知識を活かす」ということを前提に、参加型授業を多く取り入れるなど、授業構成を再考し、実務実習をフルに活かせる体制を整えてもらいたい。

班名 II D 氏名 堀場 さゆり

今回のワークショップでは様々な大学の6年制薬学教育について聞くことができ、有意義な経験ができました。また、6年制薬学生でも企業に就職する者、薬局や病院で薬剤師として就職する者、大学院に進学する者など、様々な立場からの意見を聞くことができました。

SGDでは、各大学が独自に行っている取り組み（模擬チーム医療体験プログラム；様々な学部の学生でチームを作り課題に取り組むプログラム、ADSL・BLS講習、症例検討会など）や課外活動についても話し合うことができました。先日の東北地震の時に学校レベルでのボランティアを行った大学があること、個人のレベルでは限界があるので大学という大きな単位で継続的なボランティアができるようにと働きかけた学生がいたことが印象的でした。

私は実務実習で、チーム医療のチームには病院や薬局で働く薬剤師だけでなく製薬会社で研究をする人やMRさんも含まれていると教えて下さる薬剤師の先生に出会いました。このワークショップで出会

った6年制薬学教育1期生はみんな積極的でモチベーションの高い学生ばかりでした。この仲間ともに将来素敵なチーム医療が実現できるように頑張りたいと思いました。

班名 IID 氏名 早田 祐也

まず議題に挙がっていたテーマですが、過去を振り返ってから未来の事を話すというのは良い流れだったと思います。しかし話の内容的に学んだ事よりやり残した事の方がフランクに話せるので、皆と仲良くなる導入という意味でもやり残した事を一番に持ってきた方がいいとおもいました。

ワークショップ自体はとても楽しく進められました。みんな全国から集っている外交的で活発な方々だったので意見が飛び交い、白熱したディスカッションになっていたと思います。発表も一回目は様子を見てみんなおとなしかったのが、二回目になって班それぞれで工夫して和気あいあいと出来て楽しく情報交換ができていたのではないかと思います。三回目の全体の前での発表は全ての班が割と同じような意見を出していたのでマンネリ感があったので(僕だけ?)、各班違うテーマを話し合い、挙手制でつつこんでいくという形をとったらどうかと思いました。

全体的に見て情報交換ができたうえ、様々な人と仲良く慣れたので有意義だったと感じています。欲を言えばワークショップの後に軽く交流会があればもっといいと思いました。

班名 IID 氏名 飯盛 宏二郎

印象に残ったことは2つあります。まず、第二部で「服薬指導をやり残した」という意見です。実習中に指導を全くさせてもらえなかった学生もいれば、指導回数200回とノルマを課せられた学生もいたからです。この施設間によるバラつきは学生の実習に対するモチベーションにつながるため、早急に解決すべき問題だと感じました。

次に、第三部では「私たちが一期生なので社会に出て、ある意味実験台になるのは仕方がない。しかし、その結果や改善点を大学にフィードバックしていくことが大切」という意見が出ました。全体発表でも他班が薬薬薬連携(薬剤部+薬局+薬学部)していきべきという意見が出て、一期生として責任感や使命感を持っている学生が多いという印象を抱きました。

今回、このような機会を設けてくださった学生ワークショップ実行委員会の方々を始め各関係者の皆様に感謝します。また、同じ班として討論を重ねたメンバーとは良い関係を築くことができ、サークル活動、就職活動、震災に対する取り組み等、各大学の特色を聞くことができる良い機会でした。感謝しています。これからさらに他大学との交流が活発化していくことを願っています。ありがとうございます。

今回のワークショップ参加者が皆、非常に高い問題意識を持ってディスカッションに参加していたことはとにかく驚きました。薬学部が6年制になったことをただ無抵抗に受け入れるのではなく、なぜ6年制になったのか、6年制の自分たちがすべきこと・しなくてはいけないことは何なのか、果たして本当に6年制になった意味はあったのか…と、それぞれが現在の薬学部教育と将来の薬剤師像について様々な思いを抱え、それをディスカッションに素直にぶつける光景には、私自身が参加者の一人であるという事を忘れ、ただひたすらに感銘を受けました。

悲しいことですが、6年制1期生の全員が、ワークショップ参加者のような高いモチベーションを持っているわけではありません。しかし、今回ディスカッションした内容を、ぜひ1期生だけでなく、現在薬学部に在籍する人や、現場で薬剤師として活躍している先生方、薬剤師を目指す高校生など、幅広い方々にも見ていただきたいと思っています。それが今後生まれる新しい薬剤師につて考えるきっかけとなり、一人でも多くの人の刺激となることを期待しています。

最後になりましたが、今回貴重な機会を与えて下さった日本薬学会の皆さまに心より感謝致します。ありがとうございました。

参加者 アンケート結果



日本薬学会第1回全国学生ワークショップの評価

回答数：62人

1. 今回のワークショップの流れにスムーズに入り込めましたか？

平均：4.3±0.73



2. ワークショップにおいて、あなたはどの程度グループ討議に参加しましたか？

平均：4.2±0.87



3. 今回のワークショップは、あなたのニーズにマッチしましたか？

平均：3.9±0.88



4. 今後、同様のワークショップが企画されたとき、友人や後輩に参加を勧めますか？

平均：4.6±0.63



5. 今回のワークショップで改善すべき点があれば書いて下さい。

【時間設定について】

- 討論の時間が少し短いように感じました。第Ⅲ部までありましたが、Ⅱ部構成でも良かったのではと感じました。1グループ7-8名で行いましたが、議題が変わるごとにグループのメンバーも変えるなど、いろんな方と討論したかったです。
- 一つ一つの議論に対する設定時間が短かった。昼休みが短かった。
- もう少し班メンバーと雑談する時間がほしかった。他の班とも交流したかった。スケジュールがギッチリ詰まり過ぎ、議論に余裕を持てなかった。
1部、2部も3部のように1班の発表が終わるごとに質疑応答の時間を設けてほしかった。
- KJ法による意見交換では、もう少し議論をする時間が必要であるように感じました。
- 日程が短すぎる。最低1日半は無いと、今回の内容については十分な議論が行えない。1日だと不十分議論のままで終わってしまい、発表された内容が稚拙で恥ずかしい点が全体で多々ある。全体に対して、個人で発言できる時間が短い。おかしい所を追求できない。
- 時間をオーバーしての発表と、それによって質問や討議時間が減ってしまったことについては、ただ単に相手の主張を聞いて終わり、というような印象がありました。

- 時間が短かったです。特に、KJ法に関しては、グループ分けやタイトル、関連図を完成させることを優先させてしまう為、討論を行なう時間があまりありませんでした。加えて、他の班との意見交換や議論を行なう時間も短かったように思います。
- 討論の内容が多岐に渡り、意見をまとめるのに時間がかかり、常に制限時間に追われる形になりました。2部制にして討論時間をもう少しゆっくり取るといったような、時間配分の改善をしていただければと思います。
- グループ討議、総合討論の時間をもう少し長くしてほしかったと思います。
- 時間が短かったため、セクションによっては十分に討議出来ないものもあり、その点が残念でした。発表、昼食時と、限られた間しか他の班の発表内容を見ることが出来なかったのも、閲覧出来る時間をもう少し長く設けて頂きたいです。
- 時間が短く、また先生方に話を変えられる事や訂正される事が多く、私たちがしたいディスカッションが十分に出来ませんでした。そこを改善していただければ嬉しく思います。
- 各テーマにおける、グループ討論、発表の実施時間は適切であるとは思われますが、その後の全体討論の時間がもっと必要だったのではないかと考えます。
- 模造紙にKJ法でまとめたグループの意見を発表前にもう少し閲覧できる時間があればいいなと感じました。
- お手洗いにいける時間がなかなか得られなかった。
- 第3部の総合討論にもっと時間が欲しかった。第1・2部を1日目、第3部を2日目とする2日制のワークショップにすれば準備やディスカッションにさらに時間がとれて良いと思う。
- 話し合い、発表・質疑応答の時間が短く、終始慌ただしかった。時間に制限があると、どうしても結論を急ぎすぎてしまうので、もう少しゆったりと話すことが出来れば違った意見・見方も出てきたのではないかと感じた。
- 1日だけでは足りないと思いました。2日間にして、1日の夜は懇親会などを開きより他の学生と親密になれば、と思いました。
- 全体討論の時間をもっと設けるべきであったと思う。
- 第三部の話し合いからパワーポイントを作る時間をあと10分伸ばしてほしかった。最後の発表の一人当たりの時間を10分にしてほしかった。
- 一部ごとのグループ討論の時間が短い。特にパワーポイントを用いた第三部のグループ討論では今まで行っていたKJ法と異なるため、もっと時間が必要である。
- 総合討論の時間をもう少し長くしていただけたらと思います。
- 内容はとてもよかったが時間が足りなかった。もっと早く、深くこのような話し合いができれば、お互いに刺激されてモチベーションもあがったと思う。それくらい楽しく、勉強になったので、このような機会をこれからどんどん増やしてほしい。
- 第三部の発表時間をもう少し長くして頂ければ、と思いました。学生にとって一番思い入れのあるテーマだったので、各班の様々な意見を余すことなく聴いてみたいと思っておりました。
- 話し合う時間が短かった。話が盛り上がりすぎて、発表準備がドタバタしてしまったためもっと話し合う時間を長くしてほしい。
- 3テーマでの討議で時間は十分とってあったと考えるが、実際行って見て足りなかった。
- 改善してほしいことや取り組んでいきたいことなどは、多くの意見が出るだろうし、今後の薬学教育をより良くしてくれる意見が多く出るはずなので、議論の時間をもっと増やしてもいいと思います。

【討論の方法】

- 第二部で行ったK J法についてですが、あの時間内で他のメンバーの意見内容を十分に把握することは少し難しいのではないかと感じました。第三部で行った形式の方が意見を言い合う形に近いと思いますので、この点を少し検討して頂きたいです。
- 討論を行う方法として、KJ法を用いることは、討論をスムーズに開始するにあたって有用だと思いますが、結局、まとめる作業に時間を費やしてしまうので、班全体で討論を行うことができません。なので、第三部で行った討論方法で行うべきだと思います。また、討論時間をしっかりと確保する事が出来ないことから、討論テーマが三部構成というのは多いと思います。
- 討論・発表の中で強い反対意見を出す学生が目立ちました。K J法は様々な意見を出す事に意味のある討論方法だと思いますので、K J法に関して事前により詳しく説明すべきだったと思います。
- 質問者が限られていたので、もっと色んな人の意見を聴けたら良いと感じました。
- 初めにアイスブレイキングの時間をもう少し設けたほうが良いと思います。
- 私たちがいくら理想を語っても、実際にできる事とできない事があると思うので、学生側からの意見を発信するだけでなく、厚労省の方や先生方の意見も聞ければもっと良かった。
- 自分の意見がなかなかまとまらなかったの、事前に、議論する内容を知らせて頂けると、もっとスムーズに議論に参加できたのではないかと思います。
- 今回は全国の様々な地域の学生で1つの班を作っていたが、地域ごとにもしかしたら達成できたこと・後悔していることに特色があるかもしれないと感じた。もし機会があるのであれば、地域ごとの学生で集まって情報交換できる時間がほしかった。
- 第三部の発表・討論時、IチームとIIチームの間に温度差を感じた。第二部の発表・討論は小グループ単位でIチームとIIチームを入れ替えてはどうか？
- グループ討議のメンバーを第一部から第三部まで多少入れ替えても、グループを横断した面白い討議ができたのではないかと思います。
- 3部では一部の学生が個人的な意見や他のグループの批判ととれる発言をグループ発表の場で述べたりしていたので、そういったルールはしっかりと守るように初めに注意すべきだったと思った。
- 大学間で授業内容に差があるので、各大学の特色のある授業などは事前に資料としていただけると、ディスカッションにスムーズに入りやすいと感じました。
- テーマを細分化して話しあわせた方が話しやすいので細分化したらどうか
⇒やりのこした事を学業と学業以外、私生活に分けるなど

【班のメンバー以外との交流】

- 全国の大学から学生が集まる機会はなかなかないので、グループ内のメンバー以外の学生とも話を出来る時間を設けて欲しかったです。
- 他の班ともっと交流できる時間が欲しい。8人ないし7人だけで話し合っているよりも、他のメンバーと話したりする事で、気付かされる事があり、高いレベルの議論が行えるはずだ。
- せっかく他大学の友人と知り合うことが出来ましたが、グループが異なると連絡先を交換する時間もなかったことが残念です。
- チーム以外の薬学部生とも話す機会が欲しいです。
- もう少しグループ以外のメンバーと話すチャンスがあればより良かったと思いました。
- せっかく全国から学生が集まっていたので、もっと交流する時間があるとなお良かった。

- 全国から先生方・学生が集まっていたため難しかったとは思いますが、他の班の学生や本ワークショップを企画して下さった先生方と交流できる時間があれば、学生にとって更に価値のあるワークショップになったと思います。

【テーマ設定】

- 今回の議論については、学生が薬剤師になることを前提に話が進んでいたように思います。6年制教育を受けた者として、研究や開発、行政に携わることも重要であると考えます。そういった考えを持って6年間修学してきた立場としては、議論に偏りがあったように思えました。

【発表方法】

- ポスターではなく、すべてパワーポイントによる発表にすべきだと思う。

【使用物品】

- 模造紙、ホワイトボードが小さかった点。
- プロダクト作成に用いる道具がやや不足していたように思う。限られた時間でプロダクトを仕上げるには、同時に複数の人が作業できるような条件が望ましい。逆に言えば、プロダクトを効率的に仕上げる事ができれば、より多くの時間を議論に割くことができると考えられる。

6. 今後、ワークショップのテーマとして取り上げて欲しいことがあれば書いて下さい。

- 今回の第一回全国学生ワークショップに参加した学生を対象に、「社会に出た後の変化」をテーマとしたワークショップをお願いしたいと思います。理想と現実、目指したかったけど出来なかったことなど、社会に出てから6年制卒業薬剤師として感じ取ったことを意見交換してみたいと思います。
- テーマではありませんが、6年制の1期生が卒業後しばらくしたら、今度は実際に社会に出て感じた6年制の長所・短所をディスカッションするような機会があると嬉しいです。
- 10年後一期生はどうなったか。
- 今回討議した内容が、今後どのように反映されていくかを追っていくという意味でも、今回と同じテーマを継続して討議していくことは大事だと思います。
- 6年制薬学生が活躍できる将来のフィールドについて取り上げてほしいです。
- 「6年制卒として私達がしたいと思っていること」と「6年制卒に医療機関や大学が期待すること」のギャップを埋めるような機会があってもいいのではないかと思う。
- 「6年制教育を終えた薬剤師が指導薬剤師になったとき」
「6年制が6年制であるためにすべきこと」
「研究ができる薬剤師を育てる6年制教育とは何か？」
- 「6年制」の意義を教育現場、臨床現場に周知徹底するために必要なこと。
- 6年制になった意義とは。(意義を再確認し、新たな課題を見つける)
今後より薬剤師が薬物治療の中心となるには何が求められるか。
- 薬学教育の問題点(全国大学間の教育環境のずれ等)
6年制卒の薬剤師として求められていること
- 臨床現場で働きながら薬学部で教育に携わることについて。
医学部のように、臨床現場で活躍している教育者が多くなるにはどうしたらいいのか話し合いたいです。

- 今回のWS「6年制一期生として薬学教育に望むこと」で討論となった具体的な内容について。例えば薬学部6年制における研究（卒業研究も含め）の在り方など。
- 薬剤師の地位の向上のため、薬学生・薬剤師はどのようなことをして行けばよいか具体案を考えるようなテーマ。
- これから薬剤師の職能を広げていくために、大学で学んでおきたいこと
- 薬剤師の職域はどこまで広げることができるのか？
海外の薬学部と日本の薬学部の制度や活動などの比較
- 今回のワークショップの中でも一部で討議されました。「薬剤師の地位をあげるためには、具体的にどのような活動が必要か」というテーマでワークショップを行うことで、私たちの今後の活動の視点が明確となり、薬剤師になるにあたって動機づけとなるのではないのでしょうか。
- 患者様が望む服薬指導
薬剤師が他の医療従事者にできること
今からの薬剤師活動
- 薬剤師の即戦力になるために学びたいこと、
大学の教育で臨床に役立つ薬剤師として必要ないと思うこと
- 「6年制教育を経て、選択する進路」
「各進路を目指す学生にとっての現在の6年制教育の改善点」
- 「将来どんな職につきたいか」で、職種ごとに班を作り、それぞれの班の意見を聞くことで、薬学の仕事や将来についてもっと深く考えることができる。←出来れば就職活動の前の学生同士で話し合えると面白そう。
- 6年制教育を受けた薬剤師の就職に対する考え方について、臨床薬剤師を目指す人が4年制の時と比べてどの程度変化したのかなど、他の学生の考えを聞いてみたいです。
- 薬学部の就職先として医師とは違い多方面に渡ることについて感じること
(例えばMRなどは免許がいらないがなりたい人が多い理由についてなど)
就職活動をするときにもっとしておけばよかったと思うことなど
- 6年制薬学教育に対応した在るべき大学院の像
- 6年制薬学教育における博士課程の教育内容や意義について考えるようなワークショップがあると後輩達が将来のビジョンを持ちやすいのではないかと思います。
- 具体的な薬学コアカリキュラムの改善案をベースとして、学生間で討論する。
- 「モデルコアカリキュラム」の内容の見直し(重複がないか、基礎で学んだことを臨床にどう活かすかまで含めて)について。
- 6年制薬学教育における基礎薬学の必要性
- 6年制課程だけでは無く、新4年制課程(研究コース)についてもワークショップを行った方が良いのではないのでしょうか。
- 6年制教育を受けた者として、研究や開発、行政に携わることも重要であると考えます。
そういった考えを持って6年間修学してきた立場としては、議論に偏りがあったように思えました。
時間をオーバーしての発表と、それによって質問や討議時間が減ってしまったことについては、ただ単に相手の主張を聞いて終わり、というような印象がありました。
- 各学年で、その年を振り返り、それを下の学年と情報共有できるようなワークショップがあると良いのではないかと思います。
- テーマではないですが、次は学年を越えたワークショップの開催に期待しています。

- 病院や薬局実習でどんなことを経験してきたか、またどんなことを経験したかったか。
- 実習施設間で、実務実習の質に大きな差があることに対する解決策について。
- 大学教員、病院薬局実務実習先の指導薬剤師、学生の3者間における討論があればと考えます。
- 現在、その段階には至っていないと思いますが、最終的に、日本看護学校協議会や日本医学教育学会などと連携し、看護学部や医学部学生と互いの教育プログラムについてディスカッションする機会があればと思います。
- (他の医療関係の学部生を交えて) チーム医療と個々の役割、それぞれの職域について CBT と OSCE の見直し…今回の WS でも難易度や現場との相違に関して疑問視する声があがっていたので
- 6年制薬学部の意義について再確認。また、他医療従事者や世間にも認めてもらうようになるには今後どのようにすればよいか。
- 印象記にもあるように、私立薬学部の今後についてなにか取り上げていただきたいです。
- 他の大学がどのようなカリキュラムで勉強しているか(私の大学は KJ 法を用いた SGD はしたことがなく、また、同じ班の大学では静脈注射や採血の実習があると聞きました)

● <話し合ってみたいこと その1>

薬学部6年制導入の意義を医療従事者(実習先の指導薬剤師、臨床現場で働く医師・薬剤師・看護師等)により理解して頂くためには、どのようなアピールが必要か

<理由>

今回のワークショップにおいてII C 班では、指導薬剤師の教育に対するモチベーションに差があることや、学生の希望通りに実習先が選べない理由として、薬学部6年制導入の意義が社会的に浸透していないことに原因があると結論付けました。その具体的な解決策について話し合ってみたいと考えております。

<話し合ってみたいこと その2>

①薬学部の仕事・役割を、患者さんを含めた世間一般に理解してもらうためには、どのようなアピールが必要か

②調剤薬局や病院内の調剤において、患者さんにお薬の交付を待つことに対するストレスを感じさせない仕組みをつくるにはどうすればよいか

<理由>

患者さんを含め、社会全体に薬剤師の仕事・役割が明確に浸透していないことが予想されるから。また、これと明確に関連しているか判断しかねますが、8月19日に発覚した埼玉県の薬剤師の書類送検の事件を例にして述べてみます。

当事件では「患者さんを待たせなかった」という薬剤師の仕事のスピードを理由に調剤過誤が起きてしまいました。過誤が発生した背景として薬剤師としての振舞い方や毒薬管理の問題など、様々な問題が介在していることが予想されましたが、それ以外に「薬剤師の仕事が理解されていない・医薬分業の意義が患者さんに浸透していない」ことも理由の1つにあげられると考えました。薬剤師の仕事の意味が明確に理解されていないために、「薬をもらうだけなのに、何故病院と薬局の二箇所待たされる必要があるのか」と多くの患者さんは感じてしまい、患者さんによってはイライラしてしまうこともあるかと思えます。そのため、「素早く調剤しなければ」という意識が先行してしまい、本来行われるべき薬剤師の業務がなされなかったのではないのでしょうか。

こうした問題の解決には、薬剤師の仕事・役割や医薬分業の意義を、患者さんを含めた世間一般に理解して頂く必要があると私は考えております。しかしながら、仮に理解していただけたとしても、待たされるとどうしてもストレスを感じてしまうかもしれません。それ故に、調剤を待つことに関してストレスを感じさせない仕組みを併せて整えるべきではないか、と感じました。

世間一般に具体的にどのようなアピールが必要か、またストレスを感じさせない仕組みづくりについて、ぜひ話し合ってみたいと考えております。

- CBT、OSCE は本当に必要か。

薬学部は6年間必要か（薬剤師として社会に出たときに4年制+2年間の社会経験を積んだ薬剤師との明確な違いがあるのか）。

<提案理由>

6年制薬学部生が薬剤師として社会に出たときに、同じ6年間として4年制+2年間の社会経験を積んだ薬剤師と比較すると、2年間の現場を経験しているため4+2のほうが実力は当然上だと思います。ならば4年制に戻し、国家試験を合格した者に研修薬剤師として、病院、薬局で実習を受けたほうが「臨床に強い薬剤師」を育てることができるのではないかと考えています。

したがって、本当にCBTやOSCEが必要なのか疑問に感じています。さらに指導薬剤師からもCBTのレベルが国家試験レベルなのか4回生から5回生に進級する程度のものなのか不透明なため、指導に影響が出るのではないかと思います。具体的には先に述べた服薬指導の件です。CBTのレベルが分からないため学生への信頼度が低い。よって服薬指導させることに不安を覚える結果、指導はさせずにロールプレイで済まそうとするのではないかと感じました。逆に国家試験を合格した者であれば、指導薬剤師たちも同じ道を通ってきたわけですから指導の「目安」になるのではないのでしょうか。

7. その他の意見（何なりとご自由に）

【ワークショップの継続】

- 今後もワークショップを続けていって欲しいと思います。私自身が意見を述べることは多くありませんでしたが、このような機会に参加し他大学の学生の意見を聴くことだけでも大きな収穫でした。
- 薬学会の方からのお話もっとお聞きしたかったです。特に今薬剤師には何が求められているのか、チーム医療の推進に関する検討会報告書の話や、弁護士の三輪亮寿さんのお話など、薬剤師に対する社会の動きを知りたいです。

今回はワークショップに参加させていただき本当にありがとうございました。ただ、これきりで終わりにはしたくないです。また学生として参加もしたいですし、社会に出て実際どう考え方が変わったかなど話す機会も設けて頂きたいです。今回であった学生とつながってたいです。このような会をより多く開催していただくことを願っています。今回は貴重な経験を本当にありがとうございました。

今回のワークショップに参加して、どの学生も6年制の薬学部の在り方について考えを持っていて非常に刺激を受けました。

- ディスカッションに教員や実習担当薬剤師に加わっていただきたい。報告書という形だけでなく、生の声で聞いてほしい。また、私たちが学生視点でディスカッションしている内容がどこまで現実的なのか、実現できないとすればなぜなのか、その場で答えていただければ、もっと現実的なディスカッションができるのではないかと思います。

- いろいろな大学の学生と情報交換することが出来、とても有意義な時間を過ごすことが出来ました。このような機会がもっとあれば、学生間で自分たちのカリキュラムについて考え、また提案し、よりよい薬学教育課程を作っていくことが出来るのではないかと思います。
貴重な体験をさせていただき、本当にありがとうございました。
- 実習施設側と直接意見交換をする機会がほしい。学生のための WS だと学生側からの一方的な意見になってしまいがち。施設側の見解も聞きたいし、一緒に考えていくことが大切だと思う。
在学期間の早いうちに WS を行うのも良いと思う。たとえば、実習前の段階で実習について議論すると、目標が明確になるのもっと実習を充実させることができる。その際に今回の WS のような実習を終えた側からの反省点やアドバイスをフィードバックすると、同じ反省を繰り返すことなく実務実習のレベルもあがっていくのではないかと。あるいは、直接、先輩と後輩が話す機会を設けても良いと思う。
- この度は貴重な体験をさせていただき、誠にありがとうございました。
今後ワークショップが開催される際は、ぜひ参加させていただきたいと考えております。
大学卒業後も、今回のようなワークショップが継続的に開催され、日本の薬学会を盛り上げていければと思っております。
また、ワークショップ以外にも薬学生としてお手伝いができるイベント等がございましたら、ぜひお声かけ頂ければ幸いです。
今後どうぞよろしく願いいたします。
- もっとワークショップの回数を多くして(全国ではなく、地域ごとなど)ワークショップの存在を多くの薬学生に知ってもらい、参加してもらいたい。
- 定期的にワークショップの開催してもらいたいです。全国の大学で、学年ごとにも人数を集めて話し合えばよりよい討議になると思います。
- 今後も WS を継続して欲しい。この WS はとても大きな刺激になったので、後輩たちにも是非経験してもらいたい。また、病院の部長や薬局の経営者などをオブザーバーとして呼べば、学生の率直な意見が現場に伝わりやすいと思う(影響力のありそうな大病院、大手薬局チェーンならなお良いかもしれない)。
- このようなワークショップをもっと低学年のうちから経験したかったと感じました。1年から6年までの各学年でこのようなワークショップを開催していただければ、意識を高く持つことのできる学生がたくさん現れるようになるのではないかと思います。
また、今回は6年だけのワークショップでしたが、他の学年の参加もあればより面白い討議ができるのではないかと思います。
- もっと、このような全国の大学生と交流できるワークショップを開催していただきたいです。
- 今回のようなワークショップを、学生が自ら企画・運営する機会があれば、その際には薬学会の皆さまのサポートをぜひよろしくお願い致します。

【交流の機会】

- 全体の懇親会などがあれば、もっと多くの方と深く交流できるのではないかと思います。
- ワorkshop終了後、学生だけでなく、薬学会の方々やタスクフォースの先生方も交えた懇親会があればと思いました。他班のグループ発表を聴いて個人的により深く話を聞きたい部分や、ディスカッションではあまりお話しできなかった先生方とも意見交換することで、さらに実りあるワークショップになったのではないかと思います。

- 全国の薬学生が集まる機会はそうそうないので、お手数ではありますが、学生同士が仲を深める機会が得られる全体での懇親会を行って欲しいです。
また、薬学部同士の付き合いは少ないので、このような一同に集まる事が出来るフォーラムなどをもっと開催してもらいたいです。
お金がかかってしまうとは思いますが、多くの討論をすることを目的としているなら、一日で発表・総合討論を行うことは無理があるので、二日間に分けるなどの配慮も必表だと思います。
- 他のグループと交流する機会がなかったので、今後このような機会があれば最後にちょっとした交流会を設けていただけると嬉しい。
- 62大学の学生が集まる機会というのは滅多にないので、テーマに縛られることのない交流の時間を設けてほしい。(出張費の関係で、最終便に間に合う場合、その日のうちに帰らなければならない。ツライ。)
- 1回ごとにワークショップを行うメンバーを変えるとより多くの学生と知り合うことができるため検討してほしい。
- 過密スケジュールのため、限られた時間の中で議論しなければならないと思いますが、もっと他大学の仲間と交流したいと思いました。2日間を通してのワークショップもありかと思いました。費用がかかり難しいかと思いますが、このような交流の機会がさらに増えることを期待します。

【追加発言】

- 最後の総合討論で発言したかった事をここに書かせて頂きます。
まず、「長期実務実習に対して不平不満を言っているが、自分でなぜ打開しようとせずに他人のせいにしてしているのか」という旨の発言がありました。この意見については、私は個人的に賛成です。実際に、長期実務実習中は要望をたくさん言いました。そして、患者向けの教育や医療従事者向けの勉強会に数多く参加させてもらいました。東京で行われた長期実務実習を終えての題目で行われた報告書を読んで、なんで他人任せな意見ばかり挙げて、自分でどうにかしようという旨の意見が無いんだろうと思った。しかし、今回の場では全体論を話し合う所なので、1部の人間だけを見た批判は場違いではないだろうか。但し、自分から何かしたいという心持は非常に重要なので、周りの人間や後輩に伝えていくべきだと思う。

また、バイタルサインからアプローチしたいという意見があったが、既に現場の薬剤師はバイタルサインからアプローチしている。講習会も計画されており、参加者は右肩上がりの現状で違うアプローチの方法があるのか聞きたかった。

採血の講義があるから採血を武器にしたい、TDM時の採血は大丈夫そうだからそこからアプローチする旨の意見があった。採血に関しては相対的医行為にあたるため、現在薬剤師が採血を行う事は不可能である。医師以外の看護師が採血できるのは、「診療の補助」を行えるからであって、薬剤師とは与えられている使命が異なる。それなのに、採血を武器にしていきたいと言っているならば、薬剤師が採血を行えるようになる具体的な方法論を持っているのか聞きたい。

日本病院薬剤師会が行ったアンケート調査がある。それは、看護師に対して行ったもので、題名は「薬剤師にして欲しい新しい業務」であった。ここで、1位になったのはTDM時の採血である。TDMによる抗菌薬等の適正使用による多大な功績を挙げる事が出来れば、薬剤師がTDM時の採血を行える可能性は出てくると言われているのが現状だ。

WS当日の総合討論では、以上の事を言いたかった。コミュニケーションについては、大学内の話であれば別に構わなかったが、WSに来てまで安易に使われているのが残念で仕方が無かった。コミ

コミュニケーションを単なる「会話」ではない意味で使っていたと思う。しかしわざわざ大阪まで来て、聞かされるとは思っていなかった。

ここまで発言しきれなかった事を書かせて頂きましたが、お陰様で、ここに書いた事以上に得たものは多く、非常に有意義で楽しい時間を過ごせたと思っています。同じようなワークショップが再び開催されれば、是非とも次も参加させて頂きたいと思っている程です。本当にお世話になりました。ありがとうございました。

このような場に参加でき、他大学の友人と意見を交換し合うことができ大変嬉しかったです。有意義な時間を過ごすことができました。ありがとうございました。

- 成績の優秀な学生から順に企業、病院、薬局、ドラッグストアに就職するという話が、討論の中でも出ておりましたが、給料面から見たら確かにこの順序になるかとは思いますが、学生の多くがそう考えておいたら、医療人として、薬剤師として医療現場で働く事へのモチベーションは高まらず、結果として『薬剤師の地位の向上』にも繋がらないように思います。現状、薬剤師免許を持っている事は就職に有利ですが、優秀な学生が医療現場に出て行きにくい、という状況があるとしたら非常に残念な事だと思います。

患者さんが何を思い、何に苦しみ、何を求めているのか、それらを知る事は決して無駄な事ではないと思います。

そういった意味では、薬学部が六年制になり、病院・薬局実習が長期化したことは、卒業後すぐに企業等に就職し、医療現場を経験する機会の少ない学生にとっても、意味のある事だと思います。薬学会の先生方や厚労省の方の意見なども聴きたかったです。

【時間不足】

- 限られた時間の中で、お互いの意見を尊重しながらの意見交換に、やや窮屈間を感じたこともありました。時間・経費が許すのであれば、もう少し時間にゆとりを持って開催されると、より活発な議論が展開でき、より内容のあるプロダクトができるのではないかと考えます。

【意見・感想】

- 今回、この様なワークショップに参加させていただき、大変勉強になりましたし、凄く楽しかったです。なかなか、他大学の方と交流を持つ機会がありませんので、様々な考えや意見を聞くことが出来ました。

私は、KJ法での討議は始めてでしたが、先ずカードに記載し、その後グループ分けしていくこの方法は、口頭でよりも自分の意見を多く出しやすく、又他の方の意見・考えも視覚的にも見て分かるので、討議しやすかったです。自分の大学でもこの方法を取り入れてほしいと感じました。

大学間・実習先の施設間での実習内容のばらつきはとてもあると感じました。特に、学校、実務実習共に、実際に聴診器を持って行った話や、採血の練習をした話、バイタルサインについて深く学んだと言う方の話を聞いて凄く羨ましく、自分も学びたい、是非実習やカリキュラムに組み込んでほしいと思いました。

震災時の学生、薬剤師の役割、活動等を知ってほしかったです。今回、班での討議、第三部の自分が演者だった際には少し話をさせていただきましたが、もっと今回の震災を経て考えてもらいたかったです。私は、石巻市に実家がありますので尚更そう思うのかもしれませんが、どれだけ大変だったかというのを話したいのではなく、薬剤師がチームに必要なだと認識され始めたのも事実です。

し、大きな役割を果たしているのも事実なので、薬剤師の職能を広めていくためにもその点について知ってほしいと思いました。私は、一般の災害ボランティアとして泥かきや瓦礫の運搬などをしていました。薬剤師であれば、もっと出来ることがあるのに、と何度も思いました。私達、学生に今出来ることを精一杯やるのが大切だと思います。自分が出来ていないので恥ずかしいのですが、出来ることそれが今は勉強だと思います。薬剤師として、薬学を学んできた者として社会に貢献していくべく嫌でも勉強が大切だと思います。又、家族など大切な人との連絡方法、防災グッズの備えなども今すぐ出来ることだと思います。どうしても聞いていただきたく、この場を書かせていただきました。

1日という限られた時間でしたが、討議、発表、質疑応答を通して、多くの方の様々な考え・意見を聞くことが出来、非常に濃い時間を過ごすことが出来ました。又、他大学の方と交流を持つ機会がなかなかないので、非常に嬉しかったです。1回目という、貴重なワークショップに参加させていただき、本当にありがとうございました。今回、得た考えをこれからの生活に活かしていきます。1日では話し足りず、もっと時間があればと思いました。もしまたこの様な機会がありましたら是非参加したいです。

貴重な体験をさせていただいた皆々様に心より厚く御礼申し上げます。誠にありがとうございました。

- 今回のワークショップで得られたことは、残りの学生生活を過ごす中で、また、薬剤師として歩みだした後も、ずっと私の教訓として活かしていきたいと考えています。明確な意思表示、躊躇しない指摘、自信と自覚をもった言動、ワークショップの一日を通して感じたこと全てが今後活かすべきことであると思っています。これから卒業までの数ヶ月間、同級生や後輩たちと今回のワークショップで得たことを少しでも多く共有したいと思います。また、出身大学、さらに全国の薬学部・薬科大学における6年制教育の更なる発展を願って、出来ることから力になりたいと考えています。
- 前回（慶応大学で開催）は終了時間が延びて、帰りの飛行機に遅れそうになったが、今回は時間通り終わったので、予定通りに帰れて良かった。
- 先日、先生がおっしゃっていた通り、この時期の開催は適切だと思います。それぞれが薬剤師、医療人の理想像を持っており、これを機会に6年間を顧みると同時に、自分が今立たされている状況を再認識できたと思います。これが、継続性を持ちより良い薬学教育に繋がると信じています。
- 私は、自分の意見を述べることに對して、苦手意識があり、班のメンバーには迷惑をかけてしまったと思います。しかし、今回同級生の考えを聞くことができ、自分にとって大きな刺激になりました。また、自分のモチベーションを高めることが出来ました。これから、周囲に負けないように努力していきたいと思っています。

今回、このような場を設けて頂き、本当に感謝いたします。ありがとうございました。

- 楽しい時間をありがとうございました。
これからの6ヶ月を有意義な大学生活にしていこうと前向きになることができました。
- 今回のワークショップを企画してくださった先生方へ
有意義なディスカッションと発表の時間を持って、全国に薬学部の友達がたくさんでき、本当に楽しい1日でした。私の大学は薬学科の同期が7人しかいないので、このような意見交換の機会がとても貴重です。どうもありがとうございました！！後輩のために、ぜひ来年度も開催していただければ、と思います。
- 飲み物まで用意していただきましてありがとうございました。水と甘い飲み物以外にお茶があると嬉しく思います。

- 実務実習の影響で、卒業研究をする時間が少なくなり、もっと卒業研究をしたいという意見が多かったことには驚きました。私の大学では、3年の夏に講座配属が行われ、そこから6年生の5月まで休みを含めながらも3年近くは卒業研究が出来るようになっていきます。早期の講座配属は、教授の先生方には面倒が増えるかもしれませんが、配属講座の采配で、充実した実験生活を送ることが出来るのではないかと思います。実務実習も大切ですが、学生時代にしか経験できない実験にももう少しウェイトを置いて良いのではないかと感じました。

また、ディスカッション時に「～～して欲しいと主張するばかりではなく、自分からアクションをおこせば良い」という意見が出された時にはハッとしました。その後に出された意見のように、学生や薬学部だけでは改善できないような内容もあるのは確かですが、不満ばかりを並べるだけだった自分を指摘されたような気がしました。今まで、ワークショップが開催されないような土地にいることを理由に、周りの人は何をやっているか、ということに目を向けていなかったような気がします。

これからは、自分ができることはないか、を考えながら行動できるようにしたいと思いました。

最後に、このようなワークショップもボランティアで開催されているということも、とても心に響きました。こういうイベントが開催されるのにもたくさんの人の協力があってこそ、なので、今回の事業に関わってくださった全ての人に感謝の気持ちでいっぱいです。私たちに期待してくれているということも、嬉しかったです。

今回のワークショップに参加できて本当に良かったです。有難うございました。

今までの薬剤師の枠にずっと入ってしまうような薬剤師ではなく、6年制は違うと感ずてもらえるような良い意味で型にはまらない薬剤師になりたいと思います。

- 非常に楽しく厳しく有意義な機会をありがとうございました。
- 他大学の方の色々な考え方や意見が聞けてすごく勉強になりました。
ワークショップ開催にとても感謝しております。ありがとうございました。
- 今回このようなワークショップを開催して下さいありがとうございました。自分自身得るものが多く、またとても刺激を受け、残りの学生生活を悔いなく過ごそうと改めて身が引き締まりました。開催にあたりご尽力頂いた先生方に感謝致します。

日本薬学会第1回全国学生ワークショップ実行委員会

赤池 昭紀 (京都大学)

石井 伊都子 (千葉大学)

入江 徹美 (熊本大学)

大野 尚仁 (東京薬科大学)

賀川 義之 (静岡県立大学)

亀井 美和子 (日本大学)

木内 祐二 (昭和大学)

河野 武幸 (摂南大学)

徳山 尚吾 (神戸学院大学)

◎ 中村 明弘 (昭和大学)

橋 詰 勉 (京都薬科大学)

平田 收正 (大阪大学)

(◎ : 委員長)

発行 2011年9月

公益社団法人 日本薬学会

薬学教育委員会

日本薬学会第1回全国学生ワークショップ実行委員会